

目 次

1. はしがき—日本交通学会創立 60 周年を迎えて	2
日本交通学会会長 山田浩之	
2. 日本交通学会 60 周年記念座談会	4～19
「日本交通学会の回顧—最近 4 半世紀を中心にして」	
山田浩之・岡野行秀・藤井弥太郎 塩見英治（司会）	
3. 研究報告にみる日本交通学会の 60 年	20～66
（1）研究報告のテーマと報告者(年次別一覧)	
（2）報告者(研究念法執筆者)別索引	
（3）研究報告会開催月日、主催校(会場)と統一論題の年次別一覧	
4. 日本交通学会の回顧	67～71
増井健一	
5. 日本交通学会の回顧と展望	72～74
廣岡治哉	
6. 創立期の経過—座談会「日本交通学会の創立をめぐって」	75～80
7. 資料	82～89
（1）「日本交通学会創立 16 年の歩み—研究報告大会の記録—」	
日本交通学会事務局	
（2）日本交通学会役員名簿（1961 年—2001 年）	
（3）日本交通学会賞受賞者一覧（1968 年—2000 年）	
8. 日本交通学会 60 周年記念大会行事	90～91
9. あとがき	92
塩見英治	

1. はしがき—日本交通学会創立60周年を迎えて

日本交通学会会長 山田浩之

日本交通学会は、本年創立60周年を迎える。本学会の前身・東亜交通学会は、創立されたのが1941年であり、日本の経済学関係の学会の中で最も早く設立された学会のひとつである。前年の1940年には、日本経済政策学会、日本財政学会、日本保険学会などが設立されており、日本経済政策学会の中には交通政策部会が設けられて、研究報告が行われている。したがってこのころには、交通学研究は学会設立が可能な段階にまで高まっていたといえよう。

東亜交通学会は、鉄道省と通信省の共同出資による財団法人として設立されている。戦後になって、財団法人と学会は分離され、財団法人は「運輸調査局」となり、学会は任意団体として「日本交通学会」と改称し、1947年に戦後最初の研究報告会が第6回大会として開催された。それ以降、毎年研究報告会が開催され、本年は第60回の記念大会となる。設立当初は少数であった会員数も2001年6月現在で、正会員458名、学生会員7名、特別会員43団体を数えるに至っている。本学会がこのように成長できたのは、歴代の会長をはじめとする先輩諸氏の長年の活動の蓄積によるものであるが、同時に交通関連諸団体の支援もまた大きく貢献したことを指摘しておきたい。

さて、本年は21世紀最初の年としても記念すべき年である。そこで、日本交通学会が取り組むべき21世紀の課題を考えるために、20世紀を迎えたころの問題をふりかえっておこう。ちょうど100年前、夏目漱石はロンドンに留学していた。彼は日本への手紙でこう書いている。

「倫敦の繁昌は目撃せねば分り兼候位馬車、鉄道、電鉄地下鉄、地下電鉄等蛛の糸をはりたる如くにてなれぬものは屢ば迷ひ途方もなき処へつれて行れ候」

当時のロンドンには、産業革命をリードした英国の首都として、近代文明のトップランナーであった。その象徴が鉄道である。鉄道のネットワークはロンドンの内外にはりめぐらされ、都市化も進行しはじめていた。『タイム・マシーン』(1895年)等でSF小説の創始者となったH. G. ウェルズは、ちょうどこのころ、交通技術の発達が現代のような分散的都市化＝巨大都市圏の形成をもたらすことを予言している。

しかし、近代文明は光だけではなく、暗い陰の面をもっていた。貧しい労働者の過密住宅(スラム)、霧(スモッグ)という環境汚染において、ロンドン是最悪の都市であった。漱石は「倫敦の町を散歩して試みに痰を吐きてみよ。真黒なる塊りの出るに驚くべし」と書いている。

この背景の下で、一方では1900年には後に労働党となる「イギリス労働代表委員会」が結成され、他方では近代的都市計画の先駆となった『明日の田園都市』(1898年に最初の版、1902年に改訂版)がE. ハワードに交通学研究に重要な影響を及ぼしてきた。歴史家G. M. トレヴェリアンは英国のヴィクトリア女王時代(1837～1901年)を「鉄道の時代」とよんでいるが、世界的には第2次大戦前まで鉄道の時代—より正確に言えば、鉄道と近代海運の時代—が続いたといえよう。そしてほぼ100年前に登場した自動車と航空機が現代では主役となり、自動車と航空機の時代に移ったといつてよい。さらに今日、コンピュータと情報通信技術の革新によって、いわゆるIT革命がはじまっている。

そこで、交通研究者が取り組むべき21世紀の課題について考えよう。大きく分けて、3つの課題があるのではなかろうか。

第1は、交通がもたらす環境問題である。この問題は、経済学的には外部性あるいは市場の失敗の問題ということができよう。100年前は石炭利用にともなう大気汚染が霧のロンド

ンを生んだように、今日では石油利用がもたらす環境汚染が大都市で大きな社会的費用をもたらしている。とくに、自動車の大気汚染、交通事故、混雑費用による社会的損失の問題は先進国だけでなく、発展途上国でも深刻である。さらに、運輸部門がもたらすCO₂による地球環境問題も解決すべき最も重要な課題として認識されるにいたった。持続的発展を目標とする交通が追求されねばならない。

第2は、都市と交通との関係の問題である。19世紀にはじまった鉄道の発展、20世紀とくに第1次世界大戦後のモータリゼーションの進展は現在の都市形態・都市システムを生み出した。今日進行しつつある情報通信の技術革新はこの都市構造を前提にして交通部門内部の問題を論ずる傾向が強かった。しかし、今後は情報化をはじめとしてさまざまな社会的トレンドが都市と交通をどう変化させていくのか、という問題を視野に入れながら、研究を進めねばならないであろう。将来の都市はいかにあるべきか、その中で交通はいかなる役割を果たすべきかが問われねばならない。

第3は、市場と政府との関係の問題である。その中でもっとも重要なのは規制のあり方の問題であろう。従来、交通産業では市場における競争を制限する方向で、さまざまな政府による規制が行われてきた。規制は、一面では規模の経済によるコスト低減という合理性をもつ場合もあるが、他方では技術革新の抑制、既得権益の擁護、レント・シーキング行動の助長などによって効率性を阻害してきた。今日、民営化・規制緩和などの改革が世界各国で進められており、わが国もその方向へ一歩を踏みだした。交通市場の競争化、効率的な交通サービスの提供は交通政策の最も重要な目標である。

とはいえ、巨額の交通インフラの整備については政府の計画が必要であり、市場と政府の役割分担のあり方は交通経済学者が取り組むべき最も重要な課題であり続けるだろう。なおその際、交通経済学と関連分野-財政学・公共経済学、都市・地域経済学、環境経済学、産業組織論・公益企業論、交通工学、都市計画論などとの一層の交流が必要となり、インターディシiplinaryなアプローチが要請されるであろう。

新しい時代を迎え、交通学の一層の発展に向けて大きく足を踏み出そう。

2001年7月30日

日本交通学会会長 山田浩之

2. 日本交通学会 60 周年記念座談会

「日本交通学会の回顧—最近 4 半世紀を中心にして」

山田浩之・岡野行秀・藤井弥太郎
塩見英治（司会）

塩見（司会） この座談会は、日本交通学会創立の 60 周年記念行事の一環として企画しました。日本交通学会の前身の東亜交通学会は 1941 年に発足しております。その後、戦後の 1946 年に現在のように改組されたわけです。今年は創立 60 周年に当たりまして、また 21 世紀の初めの年ということで、大きな時代の節目の年でもあります。

本日は、最近 10 年間の歴代の会長と現在の会長にお集まりいただいて、交通学会の回顧と展望について、特に最近の動向を中心に語っていただく会にしたいと思っております。

最近、交通学会を取り巻く環境も大きく変わってきておりまして、ここにお越しいただいている山田先生、岡野先生、藤井先生、いずれも学会をリードしてこられ、学会の研究動向に大きな影響を与えてこられた方であるだけにいろいろ参考になるご見解やご意見等をお伺いできるものと楽しみにしております。

まず、ここ最近 10 年間のことは後で触れるといたしまして、長期的にみて、学会でとりあげてきた統一テーマなり、方法なり、議論の焦点が、どのように変わってきたのかということから始めたいと思います。それでは、よろしく御願います。

学会の論議と統一テーマ

山田 まず、研究テーマの推移をみましょう。学会の年報である『交通学研究』が出版され始めたのが 1957 年ですが、それ以前についてもここに資料がありまして、中心的なテーマが少しわかります。戦争中のときは、大体「戦時経済と交通」というようなテーマでありました。その後しばらくは、まとまった形のものはありません。基本的には『交通学研究』が出だして統一テーマがはっきりと打ち出されるようになって、よくわかるようになります。

「総合交通政策」とか「交通政策の課題」とか、そういう形で取りあげられているのが 6 回ありますね。「競争と独占」というテーマもみられます。それから、「国鉄問題」というテーマで、83 年と 86 年に議論されています。これらを全部含めると、8 つぐらいでしょうか。そのあと 80 年代後半から 90 年代になって、規制改革の問題が取りあげられています。これが、87 年が最初で、94 年、96 年、97 年、それから今年を含めると、5 回になります。ですから、国鉄と規制改革も含めると、大体、14 回ぐらいが「交通政策」なるのではないかと思います。

それから 2 番目に多いのは、「地域交通」の問題ですね。「地域交通」の問題で都市交通関係が 5 回、それから地域開発をた地方交通の問題が 5 回あります。ただし、「地域交通」というテーマで都市と地方と両方取りあげたのが 2 回ありますので、「地域交通」の問題は 8 回取りあげられていることになると思います。

3 番目は、一言で言えば「交通の近代化」のテーマと言ってよいでしょう。技術革新とか情報通信技術の発展との関連とか、あるいは社会資本投資とか、経済成長と近代化と交通とのかかわりを取り上げたのが 6 回ぐらいある。

「運賃論」が、案外少なく今までで 3 回ですね。そして、環境問題は 73 年にはじめて登場し、次いで、昨年度の 2000 年に取り上げられたので、2 回です。それ以外に、「交通経

営」というテーマが労使関係を含めて2回あります。それから高齢者の問題とか、あるいは消費者サイドから見た交通など、「国民生活」の観点からの議論が、やはり2回ぐらいあります。

それ以外に「その他」がありまして、21世紀の交通、国際化、あるいは産業構造としての交通などのテーマが、5回ぐらいある。

以上をまとめますと、やはり「交通政策」が中心的な課題ですね。最初は、鉄道独占下での議論で、その後鉄道から道路へという大きな波の中で、「交通調整論」的な議論が入ってきた。80年代に入って「国鉄問題」が、そのあと「規制緩和」の問題に入ってしまったと思います。民営化や規制改革が具体的に引き上げられるようになった。それ以外に「公共交通の補助」の問題が2回あります。

岡野 「年報」を発行し始めたのは1957年ですが、統一テーマとなったのは、その2年位あとですね。

山田 1959年に、「技術革新と交通経営」を統一テーマとして掲げ、それ以降、統一テーマ方式をとるようになっていきます。

塩見 テーマの選定手続きは、最初は理事会等で役員が決めていたようですが、その後、会員からの募集を含めて選定するようになったと思われる。

岡野 それをやるようになったのは、わりあい最近になってからではないですか。我々のときはやっていましたね。だけど、その前はいつ頃からかな。

塩見 正確な記録がみあたりません。

山田 その場合、開催校の意見をできるだけ重視するというような原則がありますね。

塩見 基本的には開催校の意見を尊重することになっています。会員からのテーマの募集は継続していますが、最近では、応募はほとんどない状況です。

岡野 それは、ある意味できわめて象徴的だと思います。

藤井 山田先生の整理を伺っていて、この統一論題の年次別のリストを見ても、「総合交通政策」というのに注目されます。議論された最初が1957年。

山田 57年は、細野先生が「総合交通政策の樹立」というテーマで報告されているわけで、統一テーマではないんです。

藤井 統一テーマでは、30回の大会、1971年に最初に出ているようですね。

塩見 そのようです。

藤井 しかし、この「総合交通体系」の話は、政策としてはもうちょっと前からありますね。1960年代後半以降には、高速道路はできるし、新幹線もできるし、空港は大体整備されている。1965年頃までは、学会では、凡そ、鉄道の独占を前提にした議論をやっていたという、僕にはそんな感じがしますね。ですから、意外に後追いだった。現実の事態の後追いだという印象がするのですが。国鉄の問題でも。

山田 国鉄の問題は、83年に引き上げていますね。

塩見 これは国鉄改革論議で、中央大学で開催されている。

岡野 71年でとりあげた「総合交通政策」というのは、運輸政策審議会の46答申の関係ですね。

藤井 鉄道側がイコール・フットイングを主張したというのは、もうちょっと前ですね。

山田 イコール・フットイング論が盛んに議論された時期がありましたが、交通学会の統一テーマとしてはやってはいない。一つの報告としては、どなたかがやっておられると思いますが。

藤井 総合交通論議は、岡野先生はおやりにならなかった？

岡野 私がやった。

藤井 そうですね。

山田 それは71年ですか。

岡野 そうですね。

山田 「総合交通政策の基本的視点—競争と規制」の岡野報告ですね。この辺から、本

格的に「総合交通政策」というテーマが議論され始めたと思うのですが、1981年は運輸政策審議会の56答申の関連ですね。

岡野 そうです。

塩見 それは、「総合交通政策再論」という統一テーマですね。

山田 これは71年を受けていると思います。

塩見 国鉄改革を含め、46答申、56答申と、大きな政策の変更のときは、事後的な部分もありますけど、一応学会で取りあげている。

山田 学会としては取りあげていると思います。時代の問題を積極的に取りあげられたのは、増井先生、それから岡野さんではないかな。

塩見 世界の学問の潮流をみますと、いわゆる調整論の形での議論としては、もう少し前にやってもよさそうなのですが。

岡野 やっていないですね。

藤井 だけど、日本の交通のマーケット自体が、まだそこまで競争的になっていなかったという気がします。

山田 それ以前は、やはり経済成長の過程の中で、交通計画はいかにあるべきかという関心のほうが強かったのではないですかね。

岡野 「地域開発と交通」が1964年でしょう。1965年が「経済計画と交通」だし。まさに、高度成長時代ですよ。

藤井 1950年代の後半から60年代にかけて、経済一般で高度成長があつて、70年代に入って安定成長的になってきて、それから調整期に入っており、大体対応はしている。

岡野 対応はしてますね。

藤井 33回の統一テーマは、「交通と環境問題」ですか。これも象徴的ですね。

山田 33回といえば、1973年。70年頃から環境問題に対する関心が非常に強くなってきた。そして宇沢弘文氏の『自動車の社会的費用』が出てくる。

岡野 「学界展望」で杉山さんが書いているのは75年ですよ。宇沢氏の本は、その前年の74年に出ています。

藤井 恐らく前に田中角栄さんの「日本列島改造論」（1972年）があつて、それに対するアンチテーゼみたいな形で出たわけですよ。宇沢氏の本は。

岡野 ちょうど公害問題が起きたころですね。

山田 1972年にはストックホルムで国連人間環境会議が開催されている。私は、その直前、アメリカにいたので、日本では、どのような状況だったかよく知らないのですが。70年頃は、環境問題が相当盛り上がったのではないですかね。アメリカでも、70年というのはかなり盛り上がっていましたから。

岡野 あれ、いつでしたかね。東京・柳町の鉛害事件は。

塩見 60年代末ですね。向こう5年間に政府と業界は、ガソリンの無鉛対策に、東京都は柳町交差点の拡幅事業促進に乗り出す。従って、70年頃は一つのピークを迎える。その後も社会問題として継続する。しかし、その割には、学会では環境問題を持続してテーマに掲げていませんね。

山田 環境問題は、余り議論していないですね。73年に一回やって、その後は去年ですからね。

藤井 日本の経済社会一般についてそうだという感じがしないことはないのですが。ところで、「統一論題」に限らず、分析手法として、主観的価値の議論と客観的価値の議論とあるわけですね。いわゆるマルクス経済学的な議論というのは、どの辺で切れてしまったのでしょうかね。

山田 「自由論題報告」にはかなり出ていると思いますがね。

岡野 全体的には、「国鉄問題」が出てきたころからなくなったですね。

藤井 「国鉄問題」のときはあったわけですね。

岡野 あるにはあるが、そのときにはもはや原形ではなかった。

塩見 「国鉄問題」というのは、大きな影響を与えていますね。それから「都市問題」の領域も、60年代末頃からとりあげられるようになっていきますね。

山田 「都市問題」のほうは、どちらかというところと直接、環境との関連ではなくて混雑との関連ではないですかね。混雑にどう対応するかという議論で、岡野さんは、1968年に都市交通の基本問題というのをやっていますが、ここでロード・プライシングの紹介をされましたか。

岡野 いや、違いますね。あのときは、鉄道のピーク・ロードプライシングでした。

山田 79年に都市交通をとりあげていますが、このときは「都市交通の戦略」というテーマで、ロード・プライシングがかなり議論の対象になっています。

塩見 ミクロ的な経済的問題もふくまれるが、全体的には、経済的問題でもマクロ的なものを中心になっている。統一テーマとしても経営問題は少ない。それは、自由論題の個別報告としては現在でもみられますが。

山田 経営問題のテーマでは、70年の「交通事業経営の現代的課題」がある。

塩見 そのほかはございませんね。全体的に選定されたテーマも、比較的地味で、かなりの共通性がある。

岡野 1983年の「国鉄経営と交通政策」があったけれど、でもこれは特殊問題ですからね。そういう点では、交通学会はテーマを選ぶのにわりあい保守的だったと思います。ある程度出てこないで、我々の先輩の先生たちは先取りしてやるということをやらなかった。そういうところになるとあまり勇気がなかったようです。「勇気がなかった」と言うと怒られるでしょうが。(笑)

塩見 最近でも、私自身、世話役をやっていると思います。

岡野 ある程度出て来るとやろうということになる。それが一時は、60年代には未来論というか、未来学みたいなのを盛んにやったわけです。ところが、石油ショックとか何とかがあって安定期に入ってしまった、あんまり未来を語るということをしなくなった。坂本二郎さんも亡くなったものだから。

藤井 竹村さんとか。

岡野 少しやっていたけど。でも、坂本さんがやっていたところと全然違うもんね。

山田 未来学のほうは、あまり交通には影響を及ぼしていないように思いますね。

応用経済学としての交通研究

藤井 交通経済学のアプローチにしても、次第に変化を感じますね。

岡野 これを書くとなると難しい。

藤井 山田先生が1961年に、「交通学研究」で最初にホテリングを取りあげられたのですよね。あれは、恐らく、それ以前に大石泰彦先生の国鉄運賃に対する批判があって、そこで限界費用原理が議論に出てきた。あそこで、一つ学問の仕方として、応用経済学のスタンスで見えるようになった。それまでは、特殊交通論的なものがある、それが応用経済学的な考えに変わった。それは、1960年代以降ですかね。

山田 今、私もそれを言おうと思っておったのですが、大石先生が国鉄の運賃制度調査委員会で限界費用原理についての報告あるいは発言があったのではないですか。

岡野 それもあったのだけれども。大石さんには2つの論文がある。1956年の東大の『経済学論集』『有澤廣巳還暦記念論文集』のなかのホテリングを中心とする論文と、59年の「矢内原忠雄還暦記念論文集」のなかの国鉄運賃制度に関する論文の2つ。

山田 その論文は私も大いに勉強しました。

藤井 一つは公益事業料金についてだが、2本とも国鉄運賃に関連している。

岡野 国鉄の運賃制度委員会で研究会みたいな形で。大石さんがまだ助教授の時代。

藤井 そのときには関西では、富永先生が中心になられて話題になった。僕は別なところにそれをちょっと書いたのですが、『マージナル・コスト・プライシング・コントローラ

シー』の分厚いコピーがあって、それが増井先生のところへ送られてきて、私は1対1でそれを読めと言われて往生した。

山田 それは、国鉄の運賃制度の委員会で、大石先生がホテリングの論文を紹介され、富永先生もそれに参加していたのではないかと思います。それで、富永先生が、この問題は勉強しなきゃいけないということで関西で研究会を組織されたのです。私は、まだ本当に駆け出しだったんですけど。前田義信先生と秋山一郎さんと私とで取り組んだのです。東京からは、岡田清さんが来られた。それで運賃研究会というのをやったわけです。そのときにいろいろな人の限界費用原理と運賃に関する論争について検討した。限界費用原理に関する主要な論文をコピーし、1冊の本にして『マージナル・コスト・プライシング・コントロールシー』という題をつけたのです。そして、運賃研究会の成果を出そうということになって1961年の大会で、前田先生が総論をやり、私がホテリングの紹介をやるといった形で展開されたのです。私は、その後、ずっと限界費用原理にかかわってきて、最近のロード・プライシングまでずっと来ているわけですね。

藤井 そのときまでに、一方には、マルクス経済学の分析方法があったわけですね。一方、近代経済学側がよくわからなくて特殊交通論みたいにやってきて、それがあの付近から、要するに近代経済学の立場、分析手法を使った勉強に入ったと。そういう感じで、マルクス経済学のほうはさっきの「国鉄改革」の頃に力がなくなってしまった。

山田 そうですね。富永先生も、マルクス経済学が基礎としてあるわけですがけれども。マルクス経済学は基礎理論として、社会批判の学として重要だけれども、直接には現実の役に立たないと早くから達観しておられたように思います。ただし、運賃研究会を組織されたときは、むしろ限界費用原理を批判しようとしておられたんです。そして、我々の議論は自由にやらせてそれを聞いておられた。

岡野 僕は、66年に「学界展望」で、その限界費用原理について書いている。これは、たしか事務局のほうから、書けと言われて書いた。66年というとだれの論文が出たのかな。ホテリングから出発して、もうボワトウの論文も出ている。

藤井 ボワトウのは難し過ぎてわからなかった。

岡野 あれは初めフランス語だった。

藤井 『エコノメトリカ』に出て、英語版を「ジャーナル・オブ・ビジネス」か何かに出したんですね。

岡野 そうです。

山田 ボワトウの議論は、ラムゼー・プライシングが出て、理論的に明確になりますね。

藤井 ただ、あのときはボーモル・ブラッドフォードのラムゼー・プライシングみたいにきれいな形じゃないから、非常にわかりにくかった。ラムゼーそのものみたいな感じだったですね。あのときに僕が印象的だったのは、熊谷尚夫さんの『大阪大学経済学』にある論文で、それがもう一つあったわけですね。

山田 熊谷さんは限界費用原理を批判したわけです。

藤井 僕はそっちに傾いたんですけど。

山田 私も、限界費用原理はそのままでは適用できないから、セカンドベストの議論を考えなきゃいけないんじゃないかなとは思っています。近代経済学は、ファーストベストがだめだったら、セカンドベストということになるわけで。現在のロードプライシングに関連しても、やはりセカンドベストのアプローチを現実的にはやらなきゃいけないんじゃないかなと思っているんですけど。

岡野 僕、よく覚えているのは、熊谷先生が、実際に価格形成原理なんていうのは実際に行われないでいわゆるフルコストでやっている。それは常識の勝利であると彼が最後に書いていたのを。

藤井 僕も、マージナルコスト原理による資源配分上の効率というものは、自由企業の自立というメリットを覆すほど大きいメリットではないと。僕はそれに感心して。(笑)

逆に言うと、両先生に盾突くようですけども、僕は、マルクス経済学というものは、歴史

的な分析がとにかくできるというのでちょっと買っているところがあるのです。もう一つ、2年ほど前に学術会議の経済政策関係のシンポジウムがありまして、河野博忠さんが一般均衡論に立った基調報告をやった。その後で出てきたのがレギュラシオン、それから複雑系、ドイツの社会的市場主義と続いて、最後にNPO。ある意味で、近代経済学批判ばかりなんです。それでびっくりしたんです。そういう意味で、僕は、今の交通経済論が総余剰分析みたいな塊になっている印象をもっています。

岡野 すみません、申しわけございません。(笑) 私に大分責任がある。

藤井 僕自身もそうなんだけれども、何かそこら辺でもう一つ突破しなきゃならないんじゃないかという気がするのですが。

山田 近代経済学の立場から言えば、やはり、総余剰分析が基礎にあって、しかしそのままでは現実が適用できないから、現実的にはセカンドベストを考えましょうということになるんじゃないかと、これは私の立場なんですけどね。

藤井 私の立場は、今の我々の社会というのはハイブリッドの2階建てになっていて、ミニマムみたいなものがあって、その上を自由にやらせるという立場になって、その境目のところの議論が、どうもうまくいっていないという立場です。総余剰分析だけでやるなら効率論でいけるんだけれども。

岡野 実際、現実問題は効率論だけじゃ無理ですよ。

藤井 それを経済学の中でどう取り込めるかというとな難しい。

規制緩和を中心とする最近の研究動向

塩見 最近では政策展開において規制緩和が重要になり、学会での議論もこれを中心になされるようになっていますが、その辺の事情と経過について。

山田 規制緩和論を引っ張っていったのは岡野さんですからね。最初から主張していて、今、岡野さんの主張が、通りつつあるのではないですか。

岡野 最近では、もっとラジカルな人がいる。(笑) 規制緩和派の私を批判するぐらいラジカルな人が出てきた。規制緩和論について述べ、実際に、国鉄だとか、ほかのところでもそうですけど、実際に現場でいろいろ意見を求められたり何かしてつき合っているうちに、どうもおかしいのは規制ではないというふうに感じるようになったわけです。

国鉄の場合もそうで、やはり国鉄に課されている二重の規制が国鉄を非常にまずくしたので。だって国鉄内部の人たちが、制約の枠内でいろいろ考えたり何かしていることは結構よくわかる。いい考えがあっても、絶対実現しないわけです。なぜ実現しないのかというと、それは規制があって、その規制の枠の中での政策といいますか、行動しかとれないということにあると感じたわけです。

あと、もう一つの規制の問題があると考えたのは、バスの標準原価を運輸経済研究センターと一緒に検討したことによる。バスといっても、地域の中で路線を張っている事業者でも、山の中が多いのと街の中が多いのとはコストが違うわけです。そうすると、本当の標準原価をつくらうとしたら、これは競争の結果出てきた数字以外にない。そういう点から、どうも規制があってその下で動いている限りにおいては、我々が本当に欲しい情報も得られないし、それから彼らのパフォーマンスもよくはならないだろうと感じた。

ですから、要するにすべての規制を取っ払って自由競争にしてしまえというほどの規制緩和を自分では考えていなかったわけです。せめて、もう少し規制を緩めないで、がんじ絡めにしている部分をやめさせないとだめだと。効率性から言ってもね。そこまででした。

山田 サッチャー政権ができて、英国を中心として規制緩和がどんどん進行し始めましたね。その影響はかなりあるのではないですか。アメリカの場合は航空からですね。

塩見 アメリカの航空は規制緩和というより規制撤廃政策。

岡野 もっと前からあった。アメリカの鉄道で、ペン・セントラルが破産するでしょう。あの少し前あたりから、R.マイヤーあたりのグループが問題なのは鉄道の規制だと主張し

ていた。

塩見 凡そ、60年代に既に。

岡野 60年代の終わりぐらいからで。僕、それには随分影響されたんです。

塩見 いろいろな研究機関でもやっていますね。70年代に入ると、ブッキング研究所とか、多くの研究者の本格的な調査・研究が開始される。

岡野 A.フリーレンダーなんかも。それで実際に進んだのは、アメリカよりもむしろイギリスのほうです。アメリカが早かったのは航空だけです。鉄道などはむしろ遅い。

山田 イギリスは、バスから始まった。

岡野 あれは、僕が行ったときにやっていた。

藤井 60年代には、鉄道の運賃の設定を自由化した。公共運送人義務も外した。あそこは早かった。

岡野 そう、早かったですね。

藤井 保守党のコンペティションに対して、労働党の合言葉はインテグレーションですから。いまだにそうですね。

山田 労働党はインテグレイティッド・トランスポート・ポリシーですね。それが、日本では「総合交通政策」と翻訳されていて、日本で「総合交通政策」という形で議論されるのは、その影響ですね。

塩見 ただ日本は、総合政策論議でもレギュレーションは対象にない。レギュレーションというふうなところに焦点を当ててあまり議論されていない。レギュレーションの訳だって、昔の文献を見ていると、妙ないろいろな訳をしていますよね。どうもいまでいう規制の認識が希薄である。

藤井 特に参入規制というのはどっちかということ、経済学のテキストで言っているのは、自然独占による参入規制でしょう。独禁法もそうなっているけれども、実際にはむしろ内部補助システムとしての規制をやっていた。そういう意味では、外国の文献にそれがない。日本はある意味ではわりに独自に勉強してきた気もしますけどね。

だから、イギリスはパブリック・ユーティリティーとは言わないですね。あそこはレギュレイティッド・インダストリーでしょう。パブリック・ユーティリティーというのはアメリカ。だから最初からレギュレーションの頭があって、しかもそれはさっきのお話のインテグレーションやコーディネーションに対する考え方で出てきた。

山田 戦争直後に労働党が、政権をとって国有産業化を進めた。それに対してある段階から見直しが始まった。

藤井 でも、僕が留学したときに、1968年に行ったときは、あ那时的のトランスポート・アクトは労働党のもとで制定されて、トラックを自由化した。量的規制を完全に撤廃した。その前に48年に、国際的にみて非常に珍しいケースですが、トラックを国有化した。53年に保守党が政権に戻ったときにトラックの国有化は解除した。だけど民営化の途中の56年に民営化を中止して、トラックの一番大きなネットワークを国有のもとに残した。保守党が国有のもとに残す、労働党が規制緩和をやるというのは、我々から見るとよくわからなかった。

岡野 あれ、つくったのはバーバラ・カースルが交通相だった時代なんです。

藤井 68年のね。

岡野 あれは、初めの原案は非常にきつくて、まさにレーバー・プランと同じように直接制限があったわけです。ところが、途中で彼女は大臣を止めるのですよ。労働党右派の人で、その後を引き継いだR.マーシュが自叙伝を書いていて、全く交通のことを知らないで、議会へ行ったらPTAとか何とかいっている。そこで隣の席の者に「PTAって何だ、学校のやつではないだろう」なんて言ったとかいう話を書いてある。

ただ彼は、カースルの政策があまりにも規制的過ぎる、民主的ではないと。それだけしか書いてない。何で民主的でないかは書いてないけれども彼は緩めた。もちろん反論があった。緩めたときに、初めはトラックの参入規制ではやめようと思っていた。そのかわり鉄道との

関係で、レーバー・プラン的なものを入れようとした。そうしたらそっちが崩れて、参入規制だけがなくなってしまった。

藤井 長距離の自家用に対する規制は、68年法に入れた。行ってみたら、その実施は延期されている。それで僕は、留学した値打ちがなくなった。(笑)

岡野 ドイツの政策もそうですね。レーバー・プランが結構強い影響を与えた。日本はかなり影響を受けているわけですね。

藤井 恐らく日本の「総合交通政策論」というのは、そこら辺に影響を受けている。

岡野 レーバー・プランは一番最初に国鉄が持ってきた。後で国鉄は引っ込めたんです。

塩見 最初に国鉄が持ってきたんですか。

岡野 そう。翻訳を全部やっていた。大臣の談話の中に過疎路線へ行って、こんなところにどのぐらい需要があるかといったら、貨物がわずか数百キロだという。それだったら、職員がリュックに担いで行ったほうが健康的でいいだろうと言ったという話が出ている。(笑)それで、これはまずいやということになって引っ込めてしまったらしい。おもしろいですね。

レーバーという人はやはりすごくて、やはり過疎路線をやめようと言ったら、反対だという。自分が行ったときにみんな集まってきて、教会が、礼拝を日曜日以外やらないと言ったら、みんな教会の鐘が鳴らなくなると怒ったという話がある。それで、鉄道も廃止すべきではないと主張した。するとレーバーは君ら何で来た、車で来たよ。それでは要らないではないかと言ったという話も書いてあるんですよ。おもしろい。あれは演説の内容なのですが。

日本と言えば、大分ほかの先進国と比べたらおくられているが、交通市場が競争的になってきたから、二つの話が出てきた。一つは国鉄がおかしくなった。それに対してどうにか対策を立てねばならないという問題が出てきた。もう一つは、規制緩和ですね。それは、私は、大体、1990年ぐらいで終わったのでないかと思う。

藤井 規制緩和で残ったのは、地域のサービスをどうするかということだけ。

塩見 大体、最近の国際会議を見ていると、規制緩和を焦点として論じるというのは殆どないですね。むしろ国際的な自由化をどうするかとかいうレベルでとらえがち。

岡野 それは国際的な規制だもの。インターナショナル・マーケットの問題ですね。

塩見 あるいはアンティトラストの問題ですね。

藤井 インターナショナルなマーケットでレギュレーションがうまくないと、WTOみたいなのが交通にはうまく作用していないと。その問題ですね。

岡野 あとは規制緩和後のM&Aの問題で……。

藤井 むしろ問題なのかもしれないのは、規制緩和後に略奪的な運賃がどうなるかと。そんな話ですね。

塩見 今後、日本のこの学会も、そういうところに焦点が移っていくと。

岡野 これからはそうでしょうね。

藤井 これから交通論は何をやるかですよ。

岡野 日本は、どちらかというともまだその点では、交通の分野はあまり合併される事態に出合っていないですね。

藤井 世界的な資本が入ってくる問題はある。

岡野 日本でもその問題がこれからは出てくる可能性が十分ある。

塩見 いろいろところでカポタージュがその制約となっていたし、現在もその制約がある。

岡野 我々はそれを「サポタージュ」と言っていた。(笑)

藤井 イギリスの貨物鉄道は、結局アメリカの支配下ですよ。

今、そうなんですよ。

藤井 ああいう話が出てくる可能性はある。

岡野 ちょっと考えられなかったけれど。

山田 ドイツの地域交通で、一昨年、調査に行ったときに、フランスの資本が入ってく

るんじゃないかと非常に心配をしていましたね。

岡野 そうすると、新しい問題が起きるかもしれないですね。要するに、自国に有利にするために他国の企業に資本を投下して、そこを悪くして自国を有利にしようなんていう、昔の運河と鉄道との関係のようなのが起きる。

塩見 この点で大きな影響を与えたのは、EUの地域統合と交通の自由化政策でしょうね。航空だって、この関連で、企業権益がかなり優勢になっている。

藤井 そこら辺を考えると最後のところへ行くのは、ナショナル・インタレストは何だという話になっちゃって、もう全然何も見えなくなっちゃう可能性が。

交通工学と交通経済の接点

塩見 それと最近の傾向を見ますと、環境問題を中心とした都市交通政策、それに情報化の問題が重要になっている。しかしながら、情報化そのもののテーマは、少ないですね。

岡野 あとはITSなんて本当に実用化されれば別ですけどね。

藤井 一番大きかったのは、情報と交通が代替的になるのか、補完的なのかという話はかなりありましたね。もう大体決まったですよ。

岡野 僕は、もう結論が出たと思っていますけど。

山田 情報化によって都市が変わってくるとすれば、それに対応してどういうふうに変化が変わらなきゃいけないかという議論は、これからの課題としてあるんじゃないかと思うんですけどね。

藤井 そういう意味だと、交通論というのは工学系の人との結びつきをある程度重視しなければならない。それは、ほかの経済学とちょっと違う。しかし、交通論というよりレギュレーティッド・インダストリーだととらえて、交通論以外の先生方が皆さん入ってきて、次第に、交通論ではなくなる。

塩見 方法論もよく似通ってきていますけどね。

岡野 大分、そうなってきましたからね。

塩見 ただ、何か違いがございますか。

岡野 違いがあるのは、それは活躍する場が違って、具体的に計画をつくるような場面にしょっちゅう参加しているわけだから。それで違ってくるのだと思うんです。やはり、経済学の人にはもうちょっと現場に入ることが必要だと思うんです。経営についてもそうだし、もう少し経済的な問題でもね。

山田 交通工学の場合でも、何らかの形で最適化ということを考えないといけない。理論的根拠を求めるとすれば最適化だから。最適化とすると、社会的総余剰の分析などの経済学の議論が当然、入ってこざるを得ないですね。その点で、非常に接点ができているとは思いますが。

藤井 工学系の方は、効用関数なんてパッと出してしまおう。

岡野 それはね、現場で何かつくらなければならない必要性がある。それで、もうエッセイでもやる。こちらは言うだけだから。所詮、経済学者なんていうのは。(笑)

山田 経済学の場合は、政策変数の変化が、プラスの方向に動くのか、マイナスの方向に動くのかという、判断だけでも大変なだけけれども。工学系の分析は数量を出さなきゃいけないんですよ。プラスかマイナスかだけではいけない。だから、その辺をエッセイとやらざるを得ないですね。だけど、そこから進歩もするわけですけどね。

岡野 やっぱり経済学者は、結局、口説の徒だから。

藤井 そう言っちゃだめだ。(笑)

岡野 もう少し、口説の徒から一歩抜けなきゃいけないのではないかなと思うのですが。

山田 交通をやっていると、工学関係の人と随分つき合いますね。経済学部ほかの先生を見たら、ほかの分野の人と全然つき合いがないわけですよ。ところが交通に関しては、土木工学の人ともつき合いがあるし、建築の人ともつき合いがあるしね。いろいろな人

とつき合いがあるという点では、交通経済学のおもしろい面でもあるのですね。

藤井 やっぱりそこら辺をやっていかないと。変な話ですけど、公益事業学会というのが一方にあるわけですね。あそこはレギュレティッド・インダストリー全部だから、カバーする領域が広いわけですね。だから、うちの特色は何かというと、やっぱりマルチな見方というか、そこら辺に入れるしかない。

岡野 そう言えばそうだね。交通学会のほうには、行政学者がいないですね。公益事業学会のほうは、カビが生えそうな行政法の学者がいる。

藤井 新しい人もいるのです。

山田 財政学会も、私、ときどき出ますけど、ものすごく古いタイプの人があります。

岡野 カメラリズムというか、あれですか。

山田 僕は、そういう意味では、交通は、はるかに時代に即している面があるんじゃないかなと思うんです。

塩見 それから、ロード・プライシングを中心として今後の都市の研究といたしますか、都市交通のその辺はどうでしょうか。

岡野 角本さんに言わせたら、そんなことできないと。(笑)

藤井 岡野先生と『高速道路と自動車』に書いたでしょう。角本先生への返事。

山田 大分前に論争がありましたね。最近、またロード・プライシングが復活してきたと思うんですけどね。

岡野 それは不可能ではないです。多分、日本でも導入されるでしょうね。東京はちょっと大変だけど、いろいろなところで出てくるでしょう。

藤井 日本は、ある意味、先へ行ったのかもしれない。というのは、いわゆる環境ロードプライシング。今までのロード・プライシングは混雑が主ですよ。そういう意味ではちょっと違う。恐らく、これは政策としては実施せざるを得ない。尼崎訴訟などの和解の条件をクリアするには。そういう意味では、おもしろい。

塩見 環境負荷軽減のインパクト評価に関しては、いろいろありますが。燃料税、炭素税との比較とか。

岡野 だけど、その問題は、あと10年もたったら随分変わりますよ。車自体の燃料が変わってしまっているから。

塩見 そうですね。燃料と燃費改善が、一番直接的な効果がありますからね。

岡野 プリウスみたいなのが出てきたでしょう。

藤井 イギリスの労働党が、ロード・プライシング賛成にコロッと変わったでしょう。

山田 そうなんですよね。ロンドンの市長のリビングストーンが、一生懸命ロード・プライシングを導入しようと頑張っているんだから。

藤井 やっぱりロード・プライシングをやったほうが大量交通機関には有利だというような理解をしたのでしょうかね。

岡野 あんまり期待しないほうがいいけどね。

藤井 期待すればものすごく料金をかけないと動かないという感じもするけど。

岡野 だって東京では公共交通機関も混んでいる。これ以上混ぜるのかという話だ。本当にそう思いますよ。

藤井 ある意味で矛盾した話ですね。

研究者の役割と国鉄改革

塩見 次に、今のに関連するのですが、研究者の政策や社会への貢献とか、学会レベルでの政策への影響は、あったのかないのか、その辺はどうでしょうか。

山田 先ほどの「国鉄問題」についての議論を少し復活させましょう。(笑)「国鉄問題」に関してはいろいろな意見があって、それなりにいろいろな立場からの議論が展開されて、それぞれに社会的役割を果たされたのではないかなと思います。

岡野 そう思います。

山田 ここに国鉄の地域分割化、民営化賛成の方がお2人おられるから、その辺のところを少し聞かせていただくといいと思うのですが。

藤井 最初、あれは行革審が出したんですかね。臨調ですか。あのときは、率直に言って僕はすぐにはついていけなかったですね。あの場合、交通経済論の話のほかに労働問題とかいろいろな問題があったから、ちょっと入れなかったということがありました。どうしても、そこで入れなかった事情があります。でも、それでも一番はつきりしていたのは角本先生。僕は、もうちょっと後になって勉強してから、この道しかないなと思ったのですけど。

岡野 僕はね、分割には賛成だった。本州の分割の仕方だけがどうしたらいいかわからなくて。だけど、もう3島は完全に切り離す。それで「持参金方式」は僕が債権監理委員会で提案したわけですけど。あと民営化については、競争があれば必ずしも民営化しなくても大丈夫だと思っていたわけです。そのかわり、経営の自主性を完全に保証すると。それを前提にすれば、新しい経営者たちはちゃんとやるだろうと言ったら、再建監理委員会で、住田さんと加藤さんが、「岡野さん、それは無理だ」と。要するに、民営化されないで国営とか公社のままでしたら、必ずその公社に関する法律ができて、そこから政治権力が入ってくるチャンネルができる。だから民営化して、公的に介入できないというようにしないとだめだと言われて、それでは仕方がないですねと民営化を納得したのですけど。

藤井 僕も管理委員会に呼ばれる前に思ったのですが、もともと国鉄を公共企業体にしたというのは、経営と政策を分離するという話だったですね。だけど、結局公有だとどうしても政策の介入を排除できない。僕は、そこをはつきり分けるのは民営しかないかなという感じになった。分割のほうは、お話のように3島はわかる。あとは、新幹線の分け方だと。新幹線をどう分けるかで決まるという感じだったですね。

岡野 あのときは、まだ東北新幹線もできたばかりだし、上越はまだ。これらがちゃんと採算的に十分やっていると見通しがなかった時代でした。採算性の確保では、東海道新幹線しかなかったということで。それからもう一つ。藤井さんが指摘された政策と経営の関係というのは、その前の1969年か1970年かな、国鉄の中の諮問委員会で、線区分したときにやって、できなかったわけ。そのときに、もうだめなのかなと思ったのです。

山田 この問題は、大体、東京が舞台でしたから、関西ではあまり直接コミットする人はなかったと思うんですけど、中西健一さんを例外として。関西の立場としては、例えば、京大の私のゼミから非常に優秀な学生が国鉄を受けても、全然通らない。ですから、関西地域の事情が反映されるような形には、とても当時の国鉄はなっていないから、これは地域分割したほうがいいのではないかなと私は思っていましたけどね。ですから、地域の実情はあまり理解されていないという感じは、早くから持っていましたね。

岡野 東大の僕のゼミからは5人もいますものね。だけど、人のことを言うのは非常に言いにくいから言わないのだけど、やっぱりおもしろいのは関西の中西健一さんですね。中西さんと僕とは、学会へ入ったころはお互いに全く見向きもしなかった。だんだんそうでなくなってきた、最後はかなり似た考え方になった。あれは、彼の現実感覚なのかわからないですけど、勉強家ですからね。彼の現実の経験は、国労との関係だったのでしょうか。国労とは関係があったようでしたからね。ところが、国労を見てこれではだめだと思われたのは……。

審議会等と政策への影響

塩見 それと、政策へのコミットという点では、国鉄改革以後、あるいはその後、しばらくたって、審議会等を通しての研究者の役割、影響が変わってきたように思うのですが、その辺はいかがでしょうか。

岡野 審議会はもちろん前からあったんですけど、確かに少し対応するようになったことは間違いない。

藤井 五六答申のときに、自家用車の準公共用利用というのをやりかかったのですよ。あれは、やはり、学会のわれわれの議論を採ったのだと思います。あるいは、今、内部補助の議論があって、大体社会的に認知されてきたけれども、これは、交通論から言い出した。

岡野 僕は、多分、内部補助というのは交通問題から出てきたのだと思っている。だから「クロス・サブシディゼーション」という言葉をだれが一番最初に使ったかというのを、海外の何人かに手紙を出して聞いたのだけど出てこなかった。

藤井 私が増井先生のところでやったときには、ミルンのを使った。ミルンの『エコノミクス・オブ・インランド・トランスポート』、あれには出てくるのですよ。

岡野 1930年には出ている。

塩見 早い段階からある。

岡野 だけど、アーサー・ルイスの中では概念としては出てくるけど、そのものずばりの用語は出ていない。

藤井 少なくともああいう問題とか、あるいは最近の需給調整規制なんていう概念は、やっぱり交通論の話です。だから、派手じゃないけどじわじわと交通論で議論しているのが、やっぱり世の中にそれなりに影響を与えていると思うんです。中条さんたちも活躍しているし。だけど、具体的な制度設計のところまで交通の人たちが入り出したというのは、懇談会形式になったからかな。

山田 それ以前も、運輸政策審議会等には順番に入っていたとは思っただけけれども、大体筋書きがあって、それに乗せられていたという傾向が強いですね。最近は、かなり議論しているようですが。

藤井 部会の段階は、かなり議論をやりますね。

山田 地方のいろいろな審議会には交通学者もかなり入って、それなりに影響を与えているのではないのでしょうか。例えば関西ですと、大阪市交通局の運賃問題を論議する審議会に富永先生がずっと入っておられて、その後、私も入っているわけです。その点では、コミットしていると言っていいでしょう。それから高速道路公団の料金決定にも皆さんいろいろ入って、かなり議論しておられるでしょう。

藤井 道路審議会のほうでは、例えば永久有料論、ああいうのは、研究者の意見を反映した議論ですね。あそこら辺を何とかしなければ。企業会計と一緒にしろといったってできないですよ。

山田 あれには、交通学者がかなり影響を与えていますね。

藤井 前から言って全然だめなのが用地費論。

岡野 あれは工学系の人からは出てこなかった。

藤井 用地費を除外しろというのは。

規約改正と会員構成

塩見 それに、最近では、学生会員を入れるような規約改正もしております。その辺は当時の会長の藤井先生、いかがですか。

藤井 学生会員を入れるというのはちょっとアクシデントがありまして、学会の人と修士の学生が連名で報告を出して、その報告のときに会員のほうが欠席したというケースがあって、どう扱うかというので、これはこのままではまずいというので、ほかの学会がやっているような学生会員制度を考えたわけです。しかし、うまく動いているかというのと、それほど、学生会員は増えてはいません。

山田 現在、たしか7人でしょう。少ないのは、交通学会の場合は修士コースだけに限定しているからです。博士後期課程に入ると正会員にならねばならない。これはちょっと厳しいですね。ほかの学会は大体、学生ときは、社会人の学生でも全部学生会員です。学生会員を認めているところはね。これは、経過をみて、少し改善したほうがいいかもしれません。

藤井 会長をやっている時に理事会でもう一つ出てきたのは、年寄りに会費を安くする案。(笑)

塩見 あれはつぶれましたけど。

藤井 計算したら随分高齢化していて。

塩見 高齢化を反映し、65歳以上が100人ぐらいが該当。財政的には無理。高齢化し年金受給者が増えたようでもありますので、気持ちだけ少し考えようかと、理事から間から出した案でしたが。

岡野 そんなに甘やかさなくてもいい。私も該当する側だけ。(笑)

藤井 学会としては、若い人になるべく入ってもらおうという努力はしてきた。だから、ふえているのは若い人でしょう。

塩見 そうですね。「研究報告」もふえていますね。

山田 そうです。今、関西部会でも若い人がどんどんふえています。

研究の潮流と会員動向

塩見 それから研究報告の内容や領域について、最近、少し、変化がでていきますね。

山田 そうですね、やはり、若い人が環境問題に対する関心が強くて、環境問題に関する研究領域には、かなり若い人が入っていると思います。それから、もう一つは航空ですね。やはり、若い人は航空に興味があって、最近の航空研究の分野への参加は、若い人が多いのではないのでしょうか。今までは、航空をやる人は何か特殊な人で(笑)、限定されていたと思うのですが、急に広がってきたと思います。それから、最近では、物流領域の研究も活発となり、交通学会でもこの領域の報告が多くみられますが。ただし、物流学会が別にある。

岡野 そういえば、今野先生が航空学会をつくろうとしていた時期がありましたね。

藤井 当時は、いろいろ事情もあって、みんなで一生懸命になだめた。

塩見 交通関連では、ほかに海運経済学会、港湾経済学会がある。今では、航空研究者の数は増えてはいるが、しかし、個別に学会を作るほど全体の数は多くはない。

山田 会員については、関係学会ができましたので、一時期、会員数が伸び悩む傾向がありましたね。

塩見 だが、ここ数年は学会への入会者は増えており、現在、約460名になっている。新規参入は、若手の大学研究者が多いのかな。

藤井 やっぱりそうすると、実務の人とか官庁の人は、あまり入っていないんですね。どこかにバリエーションがあって。入会のときに、業績を出せと言うでしょう。だけど実務の人や官庁の人に文章の業績はそぐわないですね。だから、それをどういうふうに取り扱うか。

山田 それは、我々の先輩の先生方が、入会の審査にわりあい厳しかったんですね。もうそろそろ、その辺は緩くしてもいいのではないかと思うんです。ほかの学会ではあまり厳しいことは言わないもの。

塩見 エントリーは比較的自由な学会が多いですね。

山田 参入は自由にしないと。(笑)

岡野 これで、少子化の時代にそんなに厳しくやっていたらどうしようもない。昔は本当に厳しかった。

塩見 むしろ報告とかそういうのは、原稿のレフェリーをしっかりとすればいいわけで。

岡野 僕も今野先生にくっついてたときに、当時の細野さんとかは厳しくてね。先生だって大したことやってないのになんて、内心では思っていた。(笑)

塩見 それから、山田先生のときに学会賞の運用の変更をしましたね。

山田 論文賞というのがありながら、實際上、それが全然適用されていなかった。以前に、私も、この学会賞委員会の委員長をやったことがあるのですが、そのときに対象論文数が多すぎて、論文賞が出せなかったのが残念だったのです。何か方法がないか考えたのです。それで少し雑誌を限定して、その中から選ぶと。あとは推薦があればそれを入れるとい

う形だったらやれるのではないかということで、『交通学研究』と『運輸と経済』と、運輸政策研究機構から出している『運輸政策研究』に対象をしぼったわけです。

岡野 ある時期から、要するに発表する場所がふえたものだから、とても目が届かないので、やめてしまった。それで一時は、業績を送ってくださいとやっていたのだけど、やっぱり送ってくる人は少なくて、『運輸経済研究』というのは、投稿できるのですか。

藤井 できるのですが、投稿規定が厳しい。

山田 総合的にいろいろなものが載るわけですから、そういうものに限定すれば調べられるのではないかと。あと、どなたでも推薦していただくという形にして、推薦論文をその中に加えて議論すれば足りるということで、論文賞を復活させた。

岡野 『運輸と経済』は投稿できるわけですから。それはオープンになっていないとまずいですけど。

藤井 あえて問題にすれば、研究者だとやっぱり学校のジャーナルにまず出す。『運輸と経済』や『運輸政策研究』よりも、学校のジャーナルを優先する。今のところ推薦という形でしかやれないというそこら辺の工夫ですね。そこら辺がどう拾えるか楽しみですね。

塩見 選考する委員が少ないから、なかなか難しいところで。推薦しかないですね。

山田 レフェリー雑誌と、ハウスジャーナルとに関する一般的な評価がはっきりしていますので、レフェリー雑誌にしぼって、あとは推薦をまつということです。

塩見 それから、今後、外国の学術ジャーナルに投稿する若手も増える可能性もありますね。

山田 それは大変望ましいことで、そう数は多くないでしょうから推薦して頂けるのではないかと思います。

塩見 その辺も、考えなければならぬ。

藤井 もう一つは、今の外国のお話だと、英語のサマリーをつける。それは復活してもらったんだけど、どこにあるかわからないような。あのサマリーの位置というのは、ちょっと考えたほうがいい。

塩見 外国向けに発信することが必要ですね。

藤井 サマリーだけでいいのかどうかも問題ですが。インターネットPRともう一つ、アメリカのアメリカン・エコノミック・ソサエティーの中にあるわけですね、「交通と公益事業」のセクション。あれは太田和博君に言われて向こうとコンタクトをとったのですが。AERを取れば、あれは自動的に会員になっちゃうわけですね。あの特別の部会に年間10ドル払うかどうかというシステムです。しかし、面倒くさくて入らないという。あれは、あまりうまくいかなかった。

塩見 総会を通じて会員に呼びかけたのですが。あまり効果がなかった。

岡野 これから必要かもしれないね。

部会の研究活動

塩見 学会活動の重要な一環として、部会活動があるわけですが、関東と関西とでは、少し傾向が違うように思います。関東の場合には、昔は大学の研究者だけじゃなくて、事業者の方々にも報告をご依頼してやってきた経過があったのですが、最近是比较的若手の研究者の報告を奨励しつつ、事業者の方々の報告は少ない傾向があります。それに関西と違うところでは、年に5、6回、40、50名規模の会場で平日に開催している。だから、学会の小さな会を開くという雰囲気ですが、役員はうまく揃わない。今後は、事業者の報告も増やし、交通にこだわらず交通に関連する多様な領域での報告を増やしてもよいように思います。

それから、繰越金にも余裕がでてきたので、フォーラムなんかをやったらどうかかなと思います。それを徹底的にやる。モード別、トピックス別に、連続して、一回につき3人ほどの報告で徹底的にやる。これを、企画委員会などを立ち上げてやる。今後の課題です。

それから若手の報告奨励という意味で、運輸調査局の太田さんと会長が相談したこともあ

ります。その辺の事情については、当時の会長の藤井先生から。

藤井 『運輸と経済』に関東部会で報告したものを載せてもらったかどうかということで、関東部会ということじゃなくて、交通学会の動向を喜んで協力させてもらいますと、そういうお話をいただきました。けれども実情は、今、塩見さんからは非常に前向きなお話をされたけれども、関東部会に関する限りは、常務理事の塩見さんにおんぶしている。

山田 関西でも平日に開催し、基本的には常務理事が企画を担当しています。

岡野 平日にやっているでしょう、なかなか時間のやり繰りがつかなくてね。

藤井 関東では、今のところ、報告者との交渉など、常務理事のネットワークでやっている。これは問題がある。

塩見 やはり、企画委員会とか、あるいは関東部会レベルでちょっと小さな役員会をつくって、そこで担当する方式が望ましいと思われます。

山田 関西の場合は、実は都市交通研究所というのがありまして、そこが関西部会の事務局を引き受けてくれているわけです。この研究所は富永先生が大阪市大をリタイヤされたときにできた研究所でして、20 数年の歴史があるわけです。富永先生が、業界と学界は絶えず交流しなくなければならないという趣旨でできた研究所でして、そこで、いろいろな研究委員会をやって、報告書も出すという形になっています。それがありますので、関西部会は活発にやれているのです。場所等のアレンジも都市交通研究所で全部取ってもらっていますので、おかげで事務的には楽ですね。しかも最近、もう10年以上たっていると思うのですが、午前も午後もやっています、午前は交通理論研究会をやっています、これは参加者が順番に外国の論文を紹介するようになっていました。それから報告のほうも、大学にいる者も大学院生も大体若手と少し年を取ったのと両方やるという方向でやっています、かなり活発にやられているなという感じはするのですね。それだけ関西のほうが忙しくないと言えれば忙しくないということがあるのではないかと思うのですが。

塩見 関東も、以前は、確か、早稲田大学の杉山雅洋先生が常務理事で担当していたときに、一時、翻訳研究会をやっていましたが、途中でやらなくなった。

藤井 やっぱり一番違うのは、関西の都市交通研究所みたいにみんなが集まる場所がない。関東では、コモンルームみたいなものがないから。

国際シンポジウムの開催と国際的な連携

塩見 学会も国際的な連携が今までの経過でも見られますけれども、いろいろこれからも連携が必要だと思うのですが。今回、記念行事とあわせて国際シンポジウムの取り組みをするという企画を立てましたが、その辺の経過について。

山田 国際的な連携については、従来は廣岡治哉さんが熱心で。広岡さんが会長のときに50周年記念で国際シンポをやっています。それから韓国や中国の学会との交流もやっておられますね。だけど、学会との交流は長続きしてないですね。

藤井 それに、中国の場合は、国の抱えている学会ですよ。財源的に全然違う。

岡野 とことんつき合い切れない。

山田 中国とのつき合いは、幅広さはあるけれども。

塩見 それから世界交通学会がありますが。

岡野 あれは学会の連携というより個人参加ですね。

山田 今回の記念行事の国際シンポ開催の件ですが。今年が60周年になりますよという話は、塩見さんから聞いてびっくりして、何かやらなければいけないかなということで、関西の方で相談をしました。それで、国際シンポジウムをしたらどうかという話になりました。関西では、例えば神戸大学その他で近頃、宮下国生さん、正司健一さん、水谷文俊さんなど国際的に活躍している学者が増えてきていると言っているでしょう。

それから斎藤峻彦さんも、最近、オランダに留学しましたので、これまた国際的な人脈がある。そこで、水谷さんが交渉を引き受けてくれて、外国からはスモール、ウーム、プレスト

ン、学会からは東大の金本良嗣さんが報告してくれることになった次第です。

寄附についてもいろいろお願いをしましたところ、おかげさまで、予想以上の協力が得られて、余裕を持ってやれそうだという状況になりました。これも役員の方、特別会員、それに一般会員の皆さんのご協力によるもので、是非成功させたいと思っています。

運輸調査局の協力体制

塩見 最後に、この60年の経過を見ますと、この学会は、運輸調査局や特別会員の協力によって大きく支えられていることが分かります。この点では、感謝しなければなりませんね。

山田 運輸調査局で交通学会の事務局を引き受けていただいているから、こういうふうには交通学会の運営が非常にうまくいっていると思いますね。

岡野 特に財政的につらいときにやっていただいたので。

塩見 何度も、財政的に苦しいときに支援を得て乗り越えてきたことがございます。それに、ほかの学会が大学で事務局をローテーションで持ち回っているのと違って、運輸調査局に事務局がある点で我々、大学研究者は労力が軽減され随分と助かっている。印刷費、電話連絡等でもお世話になっている。

山田 そういうことで、この機会に運輸調査局には厚く感謝の意を表するとともに、また、特別会員の方々のこれまでのご支援にも感謝申し上げたいと思います。

塩見 では、時間になりましたのでこの辺で終わりたいと思います。この座談会では、学会の論議の展開を含め学会の多様な面について語りあうことができました。学会の60周年記念にふさわしい有意義なものになったように思います。本日はありがとうございました。

3. 研究報告にみる日本交通学会の50年

(1) 研究報告のテーマと報告者 (年次別一覧)

第1回研究報告会

(1942年3月28, 29日、学会主催、神田如水会館)

東亜交通論集 1

(昭和17年10月刊、A5判、358頁、附録23頁、価3円50銭、東亜交通学会刊、国際文化協会発売)

《研究》

戦時陸運統制問題	鉄道省貨物課長	加賀山之雄
戦時統制経済における鉄道運賃政策	京都帝国大学	小島昌太郎
鉄道における全国均一貨物運賃について	同	小島昌太郎
郵便幹線と飛行機	元通信省	三宅 福馬
大東亜共栄圏における交通の新体制	高岡高商	細野日出男
一主として交通経済的見地よりする交通行政機構改革の研究一		
わが国海運統制の発展に関する一考察	辰馬汽船社長	山県 勝見
都市交通政策	大阪商大	金谷 重義
東亜交通政策の歴史性	名古屋高商	郡 菊之助
現代における交通資本の性質	明治大学	麻生平八郎
現代戦における電気通信	電気通信協会会長	中山 竜次

《資料》

一般交通理論の成立	大阪商大	富永 祐治
-----------	------	-------

第2回研究報告会

(昭和17年10月24, 25日、学会主催、鉄道省にて)

生産力拡充に関する諸問題	通信省工務局長	松前 重義
自動車事業の統制	鉄道省陸運課長	志鎌 一之
東亜国防経済と交通機関	同志社大学	松山 斌
戦時海運政策論	海務院輸送課長	岡田 修一
大東亜交通政策の構造	鉄道省連絡運輸課長	藪谷 虎芳
戦争と交通	大阪商大	富永 祐治
船舶運営会の性格	関西学院大学	小泉 貞三

東亜交通論集 2

(A5判、昭和19年7月刊、207頁、解題62頁、附録10頁、価4円64銭、発行所 国際文化協会)

《研究》

大東亜交通政策の構想	鉄道省連絡運輸課長	藪谷 虎芳
東亜国防経済と交通機関	同志社大学	松山 斌
戦争と交通	大阪商大	富永 祐治
戦時海運政策	海務院輸送課長	岡田 修一
船舶運営会の性質	関西学院大学	小泉 貞三
自動車交通事業の統制	鉄道省陸運課長	志鎌 一之

《資料》

独米英における鉄道運賃理論	鉄道省業務局	川越八郎(訳)
交通文献解題(昭和16, 17年分)	高岡高商	細野日出男

第3回研究報告会

(昭和18年5月1, 2日、神田如水会館)

航空運輸について	航空書記官	久保 威夫
海運統制の現状および将来の見通し	海務院監督課長	松井 一郎
貨物自動車運送事業の統制	鉄道省監督局	今泉 秀夫
貨物輸送の統制	鉄道省	小沢 輝
アメリカ型海運について	京都帝大	佐波 宣平
交通事業の経営と経営形態	早稲田大学	島田 孝一
印度海運史概要	日本大学	松葉 栄重
物資調整と道路輸送	大分高商	田中 喜一

第4回研究報告会

(昭和18年10月16, 17日、神戸、辰馬汽船本社にて)

総力戦経済と交通 (総合課題)

総論	東京帝大	三輪清一郎
交通労務問題		
陸運関係	大阪商大	富永 祐治
海運関係	海務院	関 係 官
通信関係	逓信省	関 係 官
運賃および輸送統制		
鉄道、旅客	高岡高商	細野日出男
〃、貨物	慶応大学	増井 幸雄
海 運	京都帝大	佐波 宣平
通 信	大阪商大	竹中 竜雄
アメリカ国防計画と交通	横浜専門学校	大森 一二

第5回研究報告会

(昭和19年4月下旬)

戦災にて記録焼失し、ここに採録できないが関係者で記録御保存の向きがあったら御報を得たい。また、第3, 4, 5回の研究大会報告書は印刷事情悪化と戦災により印刷所にて原稿焼失したため、発行不能となった。

第6回研究報告会

(昭和22年10月24, 25日、於運輸省)

諸国鉄道創始と百年祭	運輸調査局	城宝 正治
農業企業と交通機関	神戸経済大学	野村寅三郎
—地代を中心として、チューネンとクーラー—		
経営合理化の分析	鉄道総局調査課長	松本浩太郎
戦後自動車交通政策の基調	東京帝大	今野源八郎
英国労働党の交通政策	横浜専門学校	大森 一二
海運最近の問題	海運総局輸送課長	林 坦
観光政策の基本問題	大分経専	田中 喜一

第7回研究報告会

(昭和23年11月19, 20日、於東鉄、運輸省)

わが国における資本主義の発達と		
鉄道との関連について	慶応大学	増井 健一

経営合理化のマクロ的展開・・・・・・・・・・	鉄道総局統計調査課長	松本浩太郎
倉庫業の現状・・・・・・・・・・	前高岡高商	向井 梅次
—営業倉庫と非営業倉庫との関係—		
最近の国有鉄道論について・・・・・・・・・・	大阪商大	富永 祐治
わが国における私設鉄道草創期と大阪・・・・・・・・	同志社大	吉川 貫二
海運理論体系・・・・・・・・・・	京都帝大	佐波 宣平
国营企業形態の改革・・・・・・・・・・	神戸経済大学	竹中 竜雄
国有鉄道の機構と経営の改革・・・・・・・・・・	運輸調査局	高橋 秀雄

第 8 回研究報告会

(昭和 24 年 11 月 18, 19 日、国鉄本庁にて)

経済圏と交通・・・・・・・・・・	運輸調査局	江沢 譲爾
自由港について・・・・・・・・・・	日本海事振興会	矢野 剛
公私営交通事業の料金と公正戦争・・・・・・・・	運輸調査局	細野日出男
私鉄事業と税制改革案・・・・・・・・・・	私鉄経営者協会	藤川 福衛
米国における道路交通の史的発展・・・・・・・・	東京大学	今野源八郎
自動車事業の経営合理化・・・・・・・・・・	国鉄自動車局長	津田 弘孝
—主として国営自動車について—		
日本海運の問題・・・・・・・・・・	関西学院大学	小泉 貞三
国鉄機構改革について・・・・・・・・・・	国鉄文書課長	磯崎 叡
電信事業の経営合理化・・・・・・・・・・	電気通信省経営分析課長	山下 武

第 9 回研究報告会

(昭和 25 年 11 月 17, 18 日、国鉄本庁にて)

観光交通の観光事業の関連・・・・・・・・・・	早稲田大学	三輪清一郎
国際文化観光都市建設法について・・・・・・・・	関西大学	河村 宜介
交通業の適正規模・・・・・・・・・・	大阪経済大学	稲原 康雄
国鉄の経営管理組織の検討・・・・・・・・・・	運輸調査局	高宮 晋
国有鉄道地方税課税問題・・・・・・・・・・	運輸省国鉄部長	石井 昭正
鉄道における管理分析の方法・・・・・・・・	国鉄業務運営調査室長	石田 武雄
公企業の公正報酬論・・・・・・・・・・	神戸大学	竹中 竜雄
交通系絡の類型と総合開発の課題・・・・・・・・	富山大学	城宝 正治
江戸時代の社会と海運・・・・・・・・・・	商船大学	加地 照義
世界海運の動向と日本海運当面の問題・・・・・・・・	運輸省海運調査課長	伊藤 鍾雄
倉庫の位置に関する若干の考察・・・・・・・・	神戸大学	野村寅三郎

第 10 回研究報告大会

(昭和 26 年 10 月 30, 31 日、国鉄本庁にて)

交通経済学の基本問題・・・・・・・・・・	元満鉄調査役	田中 文信
—経済学と交通経済学の関係—		
わが国交通の特異性について・・・・・・・・・・	早稲田大学	瓜生 卓爾
—交通と文化の関係—		
交通社会学的考察の一問題・・・・・・・・・・	横浜市大	早瀬 利雄
—交通と文化の関係—		
国有鉄道財政と運賃問題・・・・・・・・・・	運輸調査局	高橋 秀雄
鉄道事業の経済性の世界的趨勢・・・・・・・・	同	細野日出男
鉄道事業の内部統制・・・・・・・・・・	同	本山 実
港湾運送並びに倉庫の趨勢・・・・・・・・・・	前高岡高商	向井 梅次

商船の経済的速力の算定・・・・・・・・・・・・・・・・・・	海事文化研究所	前田 義信
—燃料費と運航利益の関係—		
米国の自動車事情について・・・・・・・・・・・・・・・・	運輸省自動車局	中村 豊
電気通信事業の原価計算について・・・・・・・・・・	電通省統計課長	森 直治

第 1 1 回研究報告会

(1952年10月28, 29日、明治大学主催)

これまでの10回の大会はすべて日本交通学会自体の主催であったが、この年から、各大学等の持廻り主催となった。

交通調整の理論的基盤・・・・・・・・・・・・・・・・・・	運輸調査局	工藤 和馬
固定費と運賃理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・	早稲田大学	河辺 旨
トロリー・バスの展望・・・・・・・・・・・・・・・・	近畿大学	金谷 重義
西欧鉄道公共企業体における経営協議会		
—労働者の経営参加の実状—・・・・・・・・・・	国鉄職業局長	吾孫子 豊
米国鉄道定職年金法の改正について・・・・・・・・	健保組合理事	松本浩太郎
私鉄の経営規程について・・・・・・・・・・	京王帝都電鉄	猪狩知之進
わが国における航空経営の盲点・・・・・・・・	日本航空常務	児島 義人
港湾労働における封建性・・・・・・・・・・	中央大学	大島藤太郎
現代海運経営における国際競争力・・・・・・・・	関東学院大学	伊坂 市助
海運経営における適正規模・・・・・・・・・・	神戸商科大学	加地 照義
戦後の海運政策について・・・・・・・・・・	明治大学	麻生平八郎
観光温泉地の経済的価値・・・・・・・・・・	大分大学	田中 喜一
—別府・熱海・伊東の比較研究—		

第 1 2 回研究報告会

(1953年11月6, 7日、神戸大学主催)

アルフレッド・マーシャルおける交通論・・・・・・・・	慶応大学	増井 健一
交通経済学の本質に関する管見・・・・・・・・	名古屋商大	田中 文信
マクロ経済学と交通・・・・・・・・・・	早稲田大学	河辺 旨
国鉄・電電両公社の経営学的比較・・・・・・・・	神戸大学	占部 都美
電信電話について・・・・・・・・・・	近畿電気通信局長	横田 信夫
国鉄財政と鉄道債券・・・・・・・・・・	国鉄・債券課長	中西 幸雄
私鉄経営の将来について・・・・・・・・・・	京阪神急行専務	森 薫

陸 運 部 会

交通事業のインセンティブ・プラン・・・・・・・・	運輸調査局	本山 実
日本における交通技術の特質・・・・・・・・	中央大学	大島藤太郎
—特に配車のそれについて—		
中共の鉄道政策について・・・・・・・・・・	明治大学	清水 義汎
ペリー百年祭と献進の蒸気車について・・・・・・・・	富山大学	城宝 正治
鉄道賃率批判・・・・・・・・・・	運輸調査局	本山 実
—自動車対抗の立場から—		

海 運 部 会

用船および用船料の本質・・・・・・・・・・	一橋大学	地田 知平
日本資本主義の発達と海運・・・・・・・・	神戸商科大学	加地 照義
わが国戦後の海運補助政策・・・・・・・・	日本郵船	坂東不二彦
港湾労務者の収入安定施策・・・・・・・・	神奈川大学	向井 梅次
海運同盟と運賃水準・・・・・・・・・・	甲南大学	前田 義信

第 1 3 回研究報告会

(1954 年 10 月 7, 8, 9 日、明治大学主催)

公益事業学会と連合大会 (第 1 日のみ、茅野氏まで)

交通事業と公益事業の関渉について	中央大学	細野日出男
臨時公共企業体合理化審議会と問題点	電電公社調査役	山下 武
企業と公益概念	明治大学	北 久一
公益事業の統制と国策	神戸大学	占部 都美
鉄道事業における公共性	国債・債券課長	中西 幸雄
社会主義交通経営の計画化	運輸調査局	八雲 香俊
首都交通における都心の役割と 交通問題対策への構想	千葉大学	清水馨八郎
通信事業の社会的役割	電電公社	茅野 健

交通学会単独 (第 2 日)

わが国連絡船輸送の重要性	香川大学	植村 福七
海運の合理化について	明治大学	麻生平八郎
航空交通需要の測定について	同志社大学	吉川 貫二
最近における荷役の進歩について	荷役研究所	平原 直

注：公益事業学会の第 1 日 (単独) は 10 月 6 日に行われた。10 月 9 日は、両学会合同で、東京港、火力発電所、東京ガス鶴見製造所見学を行った。

第 1 4 回研究報告会

(1995 年 10 月 12, 13 日、早稲田大学主催)

戦後における日本海運の性格	日本船主協会	米田富士雄
米国における航空事業の近況	関東学院大学	白山源三郎
鉄道運輸量と経費の変動	日本国有鉄道	中島 勇次
機帆船輸送の現状と対策	香川大学	植村 福七
社外船概念の史的考察	神戸大学	佐々木讓治
海運同盟とオーヴァー・トンネージ	甲南大学	前田 義信
一手運送契約制をめぐる若干の問題	長崎大学	高村 忠也
国際海上荷動きの近況と船腹問題	関東学院大学	伊坂 市助
ハイヤー・タキシード業における労働問題	明治大学	石井 常雄

統一論題「総合交通政策の樹立」

総合交通政策の問題点	中央大学	大島藤太郎
総合交通政策の意義とその中心問題	運輸調査局	工藤 和馬
交通政策から見た競争と独占	神奈川大学	大森 一二
道路交通の近代化	東京大学	今野源八郎

公益事業学会と連合大会

日本交通学会・公益事業学会

連合大会について	公益事業学会理事長	蠟山 政道
鉄道と経済変動	京阪神急行電鉄	加納 直人
国鉄車両の民有について	日本国有鉄道	斎藤 博
電話料金論の考察	慶応大学	増井 健一
公益事業の固定資産会計思想について	一橋大学	西川 義朗
公益事業会計統制における		

廃棄単位の意義とその理論構造

通産省公益事業局 峰村 信吉

公益事業学会第 2 日 (単独大会) —参考—

第16回研究報告会は、1957年10月17、18日に中央大学主催で開催された。

この会以後の研究報告会の開催日時、主催校、統一論題は、別個に一覧表として掲載してあるので、それを参照してください。

1957年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

《研究》

- 総合交通政策の樹立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・細野日出男
—総合交通政策主体の合理化について—
輸送力問題に関する基礎的考察・・・・・・・・・・・・・・・・鶴見 勝男
—戦後の国内輸送力問題解明のための覚書—
運賃における二つの見解・・・・・・・・・・・・・・・・蔵園 進
—価格論と配分論—
交通機関原子力推進の経済性・・・・・・・・・・・・・・・・植村 福七
—特に原子力機関車と原子力商船について—
鉄道の経営経済的特質・・・・・・・・・・・・・・・・高橋 秀雄
フランス鉄道政策の特質・・・・・・・・・・・・・・・・大森 一二
戦後アメリカ道路政策・・・・・・・・・・・・・・・・今野源八郎
—13ヵ年計画を中心として—
イギリス資本主義と海運・・・・・・・・・・・・・・・・伊坂 市助
運賃延戻制と契約運賃制・・・・・・・・・・・・・・・・高村 忠也
民間航空補助政策・・・・・・・・・・・・・・・・吉川 貫二

《文献紹介》

- ソヴィートの運輸経済学・・・・・・・・・・・・・・・・八雲 香俊
M. ベックマンの交通研究文献・・・・・・・・・・・・・・・・秋山 一郎
R. デーヴィス「船員の六ペンス税」・・・・・・・・・・東海林 滋
—1697～1828年における経済活動の一指標—
アイナルゼン著「再投資景気循環」・・・・・・・・前田 義信
—ノルウェー海運業に現われたる—

《学会展望》

- 戦後におけるわが国の交通学研究・・・・・・・・・・佐竹 義昌
ドイツ交通学界展望・・・・・・・・・・・・・・・・麻生平八郎
日本交通学会創立16年の歩み・・・・・・・・日本交通学会事務局
—研究報告大会の記録—

1958年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

《研究》

- 交通学の本質と構造・・・・・・・・・・・・・・・・田中 文信
交通輸送力経済における一元的空間媒介制・・・・・・・・小泉 貞三
交通地理学の形成と課題・・・・・・・・・・・・・・・・梶 幸雄
—最近の経済地理学の思潮—
経済成長と輸送力・・・・・・・・・・・・・・・・植村 福七
鉄道不採算線問題・・・・・・・・・・・・・・・・工藤 和馬
米州州際商業法の差別運賃規定と
イギリス初期鉄道立法について・・・・・・・・前田 義信
道路並びに道路運送経済について・・・・・・・・秋山 一郎
道路の交通労働生産性・・・・・・・・・・・・・・・・佐竹 義昌

—特に高速道路について—	
自動車運送資本再編成過程	石井 常雄
—トラック業系列化の現状と方向—	
自動車賃貸制度	小田垣光之輔
海運業における交通革命	山田 浩之
—帆船から蒸気船への移行過程について—	
日本港湾の性格について	中西 睦
—港湾経済論組み立てのための—考察—	
《資料》	
鉄道営業法改正の焦点	本山 実
《文献紹介》	
西林忠俊編著「通信と経済」	細野日出男

1959年研究年報

序	島田 孝一
---	-------

第1部 技術革新と交通経営

《研究》

技術革新と国鉄経営	滝山 養
道路交通における技術革新	片山 信貴
—技術革新と交通経営—	
商船と技術革新	伊坂 市助
技術革新と航空経営	白山源三郎
陸・海・空運の三つの技術革新	細野日出男
—モノレール・ハイδροフォイラー・ロートダインについて—	
電気通信における技術革新と経営	茅野 健

第2部 一般研究・紹介

《研究》

ザックス交通論の研究序説	石井彰次郎
国有鉄道と差別運賃制度に関する若干の問題	廣岡 治哉
運賃決定機構	里見昭二郎
明治時代の電鉄労働者	中西 健一
—電気鉄道における賃労働の形成過程—	
定期船同盟とオーバー・トンネージ	前田 義信
江戸時代の国内海運発展の背景	加地 照義
—日本海運発達史序説—	

《紹介》

ギイ・ショメル著「フランス鉄道労働史」	内海 文雄
---------------------	-------

1960年研究年報

序	島田 孝一
---	-------

第1部 交通における競争と独占

《研究》

交通における独占的競争	植村 福七
同・コメント (佐竹義昌)	
競争および独占と運送配置	秋山 一郎
交通における競争と独占	蔵園 進
同・コメント (増井健一)	
交通における競争と独占	高橋 秀雄

—ユツテの競争運賃理論—	
国鉄における「競争」と「独占」	大島藤太郎
同・コメント（高橋秀雄）	
鉄道経営を繞る競争と独占の問題点	加納 直人
海運における競争と独占	伊坂 市助
民間航空事業における競争と独占	榑原 胖夫
同・コメント（今野源八郎）	
第2部 一般研究・資料・紹介	
《研究》	
国土計画と運賃政策	真島 和男
同・コメント（高橋秀雄）	
定期乗車客と地域との関連	加賀谷一良
同・コメント（塚原重利）	
海運補助政策の効果	麻生平八郎
海運金融における融資の法則	岡庭 博
同・コメント（伊坂市助）	
米貨物優先積取制と適正かつ妥当なレート	高村 忠也
輸送と荷役そして荷造り包装	宮村 武雄
同・コメント（大島藤太郎）	
《資料》	
道路運送業の運転労働	佐竹 義昌
ソヴェト貨物運賃政策の問題点	八雲 香俊
《紹介》	
プレデール「交通政策」	増井 健一
C. モネタ「国際貿易における運送費の見積」	東海林 滋
1961年研究年報	
序	島田 孝一
第1部 運賃理論と運賃政策	
《研究》	
限界費用運賃決定原理について	前田 義信
交通調整の見地より観た運賃理論と運賃政策	工藤 和馬
新しい運賃形成理論の性格と問題点	小泉 貞三
限界費用価格決定原理の意義と限界	山田 浩之
—ホテルリングを中心として—	
運賃制度の検討によせて	秋山 一郎
限界費用価格設定原理と鉄道旅客賃率制度	稲原 康雄
ソ同盟鉄道貨物運賃の決定原理について	平井都士夫
都市交通における運賃理論と運賃政策	角本 良平
大都市及びその周辺における通勤通学輸送に対する運賃政策	藤川 福衛
海運における長期契約の運賃	岡庭 博
海運同盟と定期運賃	東海林 滋
欧州共同市場と運賃政策	細田 繁雄
第2部 資料・紹介	
《資料》	
東独貨物自動車における運送賃率と原価について	石井彰次郎
《紹介》	
J. C. Bombright 著「公共事業料金原理」	細野日出男

1962年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

第1部 経済成長と交通

《研究》

経済成長と資本の蓄積・・・・・・・・・・・・・・・・赤堀 邦雄

—資本の配分問題と用地問題を中心として—

経済成長と交通資本の蓄積・・・・・・・・・・・・・・・・岡田 清

—資本・産出高比率の推定をめぐって—

経済成長と交通業の再編成・・・・・・・・・・・・・・・・高橋 秀雄

輸送問題に対する産業連関の分析の応用・・・・河辺 旨・太田 正樹・徳永 健一

経済成長と鉄道輸送・・・・・・・・・・・・・・・・廣岡 治哉

経済成長と道路輸送・・・・・・・・・・・・・・・・佐竹 義昌

経済成長と都市交通・・・・・・・・・・・・・・・・富永 祐治・角本 良平

経済成長と海運・・・・・・・・・・・・・・・・岡庭 博

経済成長と港湾・・・・・・・・・・・・・・・・北見 俊郎

経済成長と航空・・・・・・・・・・・・・・・・榊原 胖夫

—超音速旅客機と航空市場—

経済成長と通信・・・・・・・・・・・・・・・・細野日出男

第2部 一般研究・紹介

《研究》

経済科学としての交通学・・・・・・・・・・・・・・・・小泉 貞三

アメリカ鉄道労働の断面・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木 順一

列車運行の地域的差異について・・・・・・・・加賀谷一良

九州における近代通信の発達・・・・・・・・高橋 善七

—主として基礎確立期について—

《紹介》

フォグト教授著「交通の国民経済的意義」・・・・・・・・関野 唯一

榊原胖夫著「経済成長と交通政策」・・・・・・・・松山 斌

1963年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

第1部 交通における公共投資

《研究》

交通における公共投資・・・・・・・・・・・・・・・・小泉 貞三

交通における公共投資・・・・・・・・・・・・・・・・蔵園 進

国鉄投資をめぐる問題点・・・・・・・・・・・・・・・・鶴見 勝男

—国鉄における公共投資の検討のために—

道路における公共投資・・・・・・・・・・・・・・・・河野 博忠・蔵下 勝行

海運における公共融資と補助・・・・・・・・麻生平八郎

民間航空における補助・・・・・・・・吉川 貫二

公共投資と通信・・・・・・・・・・・・・・・・竹中 竜雄

第2部 一般研究・資料

《研究》

旅客賃率の基本構造・・・・・・・・・・・・・・・・田中 文信

地域経済開発と海運・・・・・・・・・・・・・・・・岡庭 博

—南九州農産物海上輸送計画—

ソヴェト総合交通体系の構想について・・・・・・・・八雲 香俊

イギリスの運輸国有化と公共投資・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木 順一
 農民革命前のロシア交通・・・・・・・・・・・・・・・・前谷 清
 —ロシア近代交通生成過程—

《資料》

トラック事業の現状と動向・・・・・・・・・・・・・・・・羽田 昇史
 —経営規模・設備投資の変化を中心として—
 北前船一航路と絵馬・・・・・・・・・・・・・・・・牧野 隆信

第3部 書評・展望

《書評》

スターミー著「英国海運と国際競争」・・・・・・・・東海林 滋
 田中時彦著「明治維新の政局と鉄道建設」・・・・廣岡 治哉

《展望》

最近の国鉄批判について・・・・・・・・・・・・・・・・佐竹 義昌
 海運論の新方向・・・・・・・・・・・・・・・・山田 浩之
 —東海林滋著「海運経済論」を中心として—
 伊藤重信郎先生を囲んで・・・・・・・・細野日出男・大森 一二
 増井 健一・蔵園 進

1964年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

第1部 地域開発と交通

《研究》

地域開発と交通計画・・・・・・・・・・・・・・・・植村 福七
 地域開発と港湾経済・社会・・・・・・・・北見 俊郎
 —港湾都市問題をふくめて—
 大都市再開発と交通問題・・・・・・・・中西 健一
 —大阪の場合について—
 九州地域開発と交通・・・・・・・・田原 栄一
 —大分地区を中心として—
 東北開発と交通・・・・・・・・佐竹 義昌・小野田 操・岡野 行秀

第2部 一般研究

《研究》

結合費用運賃論に関する若干の反省・・・・・・・・丸茂 新
 鉄道運賃と運送距離・・・・・・・・山田 亮
 —距離基準運賃における新しい傾向について—
 国鉄労働者の性格について・・・・・・・・大島藤太郎
 —実態調査報告—
 道路整備の財源・・・・・・・・藤川 福衛
 積雪地域の開発と除雪による道路交通確保の効果について・・・・小川 博三
 海運の特殊原価研究・・・・・・・・中西 睦
 —Out - of - pocket costs について—
 野蒜築港論・・・・・・・・寺谷 武明
 —明治前期の東北開発と港湾素描—
 産業能率と交通価値・・・・・・・・加納 直人

第3部 書評・回顧

《書評》

中西健一著「日本私有鉄道史研究」・・・・・・・・佐竹 義昌
 ペクラム著「交通・その経済学と公共政策」・・・・工藤 和馬

「ブギヤナン報告」に寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木 順一

《回顧》

小島昌太郎先生を囲んで・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐波 宣平・加地 照義
佐々木誠治・前田 義信
山田 浩之

1965年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

第1部 経済計画と交通

《研究》

《経済計画における交通の地位》

序 説・・・・・・・・・・・・・・・・・・富永 祐治

第1章 交通資源の配分と価格機構・・・・・・・・・・・・・・・・・・中西 健一

第2章 公共投資の経済基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・辻 和夫

第3章 交通投資と外部経済・・・・・・・・・・・・・・・・・・山田 浩之

《流通構造および流通費用》

国内物資流動構造の変革および流通の近代化・・・・・・・・・・米田 博・中沢 弘

港湾の流通機構と流通費用・・・・・・・・・・・・・・・・・・中西 睦

第2部 一般研究

《研究》

競争交通市場よりみた鉄道運賃政策と産業立地・・・・・・・・・・真島 和男

総合輸送活動指数について・・・・・・・・・・・・・・・・・・米田 博

輸送手段選好について・・・・・・・・・・・・・・・・・・村尾 質

—その社会経済的側面の考察—

遠洋一般貨物船の船型選定問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・松本 一郎

日本横断運河計画地域における運送構造・・・・・・・・・・沢田 清

第3部 資料

《諸外国における交通投資の事情》

《資本主義国》

米国における経済計画と交通・・・・・・・・・・・・・・・・・・細野日出男

—連邦政府の道路計画を中心として—

イギリスの交通投資・・・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木 順一

西ドイツにおける交通投資の問題点・・・・・・・・・・真島 和男

《社会主義国》

ソヴェトの交通投資と交通政策・・・・・・・・・・・・・・・・・・八雲 香俊

ソヴェト計画経済における交通投資の二、三の問題について・・・・・・・・平井都士夫

東独における経済計画と交通投資・・・・・・・・・・・・・・・・・・石井彰次郎

中国における鉄道投資とその現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・清水 義汎

第4部 学界展望・書評・回顧

《学界展望》

増分費用運賃決定政策論の新展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・細田 繁雄

《書評》

寺尾晃洋著「独立採算制批判」・・・・・・・・・・・・・・・・・・蔵園 進

—公共料金の問題の基本視角—

《回顧》

片岡譚郎氏を囲んで・・・・・・・・・・・・・・・・・・高橋 秀雄・細野日出男・増井 健一

1966年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

第1部 産業構造と交通

《研究》

〈交通経営〉

長期交通投資計画とその経済性・・・・・・・・・・・・・・・・・・細野日出男
—国鉄・道路公団・電電の大投資と運賃料金・収支採算—

〈流通革命と交通〉

市場構造の変化と交通・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・蔵園 進
港湾における輸送体制の近代化・・・・・・・・・・・・・・・・・・北見 俊郎
—その基本的問題を中心に—

〈交通計画と交通経営〉

交通投資の形態とその特性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岡田 清
—長期計画に関連して—

海運政策と労務管理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・東海林 滋

第2部 一般研究

《研究》

東京湾における海運・港湾事情の変貌・・・・・・・・・・・・伊坂 市助

資本主義交通生産論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・赤堀 邦雄

輸送サービスの公共的性格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤井弥太郎

英国鉄道運賃形成への序説的一考察・・・・・・・・・・・・丸茂 新

1921年イギリス鉄道法の経済的帰結・・・・・・・・・・・・雨宮 義直

—両大戦間イギリス交通政策史序説—

道路交通政策の系譜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・池田 博行

第3部 資料

交通革命期における運送原価と運賃についての動態的考察・・・・・・・・伊藤 允博

物的流通の近代化と流通経費の節減・・・・・・・・・・・・斎藤 清一

航空旅客需要とその季節変化について・・・・・・・・・・・・小川 博三

大都市港湾の現状と問題点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今野 修平

第4部 学界展望・回顧

《学界展望》

「限界費用価格形成原理」の展開・・・・・・・・・・・・・・岡野 行秀

《回顧》

島田孝一先生を囲んで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・細野日出男・増井 健一・蔵園 進

故 片岡譚郎氏追悼記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中村 英男

学会記事・会員業績リスト・編集記

1967年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

第1部 交通経済の諸問題・一般研究

《研究》

公営交通企業に対する2種の要請・・・・・・・・・・・・・・・・工藤 和馬
—独立採算と公共負担—

欧州交通統合の理論的基礎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・真島 和男

鉄道と自動車における Common Carrier・・・・・・・・・・・・鈴木 順一

経済成長のなかにおける交通・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・榊原 胖夫

—フォーゲルの貢献とその批判—

交通サービスと地域の統合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・加賀谷一良

第3部

《学界展望》

戦後のわが国における交通経済理論の歩み・・・・・・・・山田 浩之
—故佐波宣平著「交通概論」を中心として—

《書評》

佐波宣平博士還暦記念論文集・・・・・・・・増井 健一
—「現代日本の交通経済」について—

D. J. Reynold. Economics, Town Planning and Traffic・・・・・・・・雨宮 義直
Flows in Networks, by L. R. Fords, Jr and D. R. Fulkerson・・小林 清晃
学会記事・会員業績リスト・編集記

1969年研究年報

序・・・・・・・・島田 孝一

第1部 交通政策の基本問題

高度経済成長と交通 —交通問題の発生する統一的条件—・・・・・・・・大島藤太郎

交通政策への要請 —その総合性と合理性—・・・・・・・・増井 健一

都市と交通と投資基準としての外部経済論・・・・・・・・榊原 胖夫

第2部 一般研究

地域間物資輸送構造の安定性の測定・・・・・・・・鈴木 啓祐

社会主義的都市計画と交通・・・・・・・・平井都士夫

マクロ的観光流動の観光旅行パターン別

流動への編成替手法の開発・・・・・・・・河野 博忠

通路費用分析の方法論上の問題・・・・・・・・真島 和男

貨物自動車輸送のコスト分析・・・・・・・・細田 繁雄

—米国における若干の展開—

通運事業法の改正問題・・・・・・・・高橋 秀雄

船舶輸入税撤廃の歴史的意義・・・・・・・・岡庭 博

第3部

《学界展望》

交通における便益費用分析・・・・・・・・岡田 清

《書評》

Derek H. Aldcroft British Railway in Transition・・・・・・・・大森 一二

飯田秀雄著「コンテナ輸送の理論と実際」・・・・・・・・加地 照義

B. A. Scheriever, and W. W. Seitert, Air Transportation

1975 and Beyond : A Systems Approach.・・・・・・・・吉川 貫二

学会記事・会員業績リスト・編集記

1970年研究年報

序・・・・・・・・島田 孝一

第1部 交通事業経営の現代的課題

公社の企業成長論 —国鉄と電電の分析—・・・・・・・・大島 国雄

鉄道業における経営問題・・・・・・・・前田 義信

道路事業における経営的視点・・・・・・・・武田 文夫

空運事業の経営を制約する内的・外的要因 (序説)・・・・・・・・津崎 武司

—主として日本の空運を中心に—

航空と海運の経済性比較 —物流コスト比較を中心として—・・・・・・・・中西 睦

第2部 一般研究

鉄軌道規制立法の陳腐性とその近代化・・・・・・・・細野日出男

—鉄道営業法・地方鉄道法・軌道法を中心に—	
運輸における情報処理の近代化	米田 博
交通需要および交通の便益の推計モデルに関する一考察	塚原 重利
—「新幹線鉄道」の費用便益分析の体験に基づく反省—	
日本経済の発展と港湾の本質的課題	北見 俊郎
アメリカにおけるローカル航空政策の新展開	吉川 貫二

第3部

《学界展望》

発展途上国と交通	榊原 胖夫
----------	-------

《書評》

平井都士夫編「都市交通問題」	伊勢田 穆
—島・西川・西山・宮本編『講座：現代日本の都市問題』第4巻—	

B. M. Deakin and T. Seward Productivity in Transport.

A study of Employment, Capital, Output, Productivity
and Technical Change.

	三上 宏美
ミハルスキー著「社会的費用論」	蔵下 勝行
学会記事・会員業績リスト・編集後記・英文要約	

1971年研究年報

序	島田 孝一
---	-------

第1部 総合交通政策の展望

総合交通政策の基本的視点 —競争と規則—	岡野 行秀
総合交通政策の課題 —先進国の政策論をかえりみて—	今野源八郎
総合交通政策をめぐる若干の問題点	岡田 清
総合交通政策の問題点 —社会主義国交通との関連からみた—	平井都士夫
総合交通体系の問題点 —道路運送労働力について—	佐竹 義昌
総合交通政策の前提と課題 —土地政策の提唱—	赤堀 邦雄
総合交通体系と港湾	北見 俊郎
交通整備論の展望	田原 栄一

第2部

《学界展望》

不採算サービスの問題 —英国における研究を中心に—	藤井弥太郎
---------------------------	-------

《書評》

角本良平著「都市交通論」	増井 健一
蔵園 進著「地方公営企業の研究」	宇野 耕治

学会記事

学会動静

1. 第29回研究報告会
2. 研究部会開催状況
3. 会員業績リスト

追悼記・編集後記

1972年研究年報

序	島田 孝一
---	-------

第1部 公共交通の諸問題

公共交通の位置づけ	蔵下 勝行
公共運賃政策の基本問題	中村 貢
公衆交通機関と公共補助	鈴木 順一

地方公共交通とナショナル・ミニマム・・・・・・・・・・・・・・・・・・廣岡 治哉
—地方バスの問題をとおして—

マイカーと公共交通 —1956年ハイウェイ法批判—・・・・・・・・・・ 稲原 康雄

大都市におけるトラック輸送 —その実態と問題点—・・・・・・・・・・ 森田 稔

座談会「公共交通のあり方」・・・・・・・・・・・・・・・・・・大島 国雄・岡田 清
角本 良平・(司会) 増井 健一

第2部 一般研究

時間価値論 —交通と文化—・・・・・・・・・・・・・・・・・・榊原 胖夫

道路の労働力人口分布に及ぼす影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木 啓祐

物的流通の社会的費用に関する問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・寺田 禎之

—わが国の国際海上コンテナの国内輸送を事例として—

長距離フェリー動態と構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・土居 靖範

—長距離フェリーの再編成に関する一考察—

第3部 書評

池田博行著「交通資本の論理」・・・・・・・・・・・・・・・・・・前谷 清

平井都士夫著「社会主義交通論」・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐竹 義昌

第4部 学会記事

学会動静・会員業績リスト・追悼記・編集記

1973年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・島田 孝一

第1部 交通と環境問題

交通をめぐる交通問題の原点・・・・・・・・・・・・・・・・・・中島 勇次

環境と交通：覚書・・・・・・・・・・・・・・・・・・岡田 清

環境容量と社会的費用・・・・・・・・・・・・・・・・・・尾上 久雄

交通企業と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹中 竜雄

環境騒音公害について・・・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木 順一

第2部 一般研究

指数関数を用いた地域交通量モデル

(ローレンツ型機会モデル)の構築とその適用・・・・・・・・小林 喜一・鈴木 啓祐

タクシーの料金基準とタクシーの実車率との関係について・・・・・・・・小泉 貞三

米国の都市交通の現状 —住民の価値と交通—・・・・・・・・・・本多 繁

海運と多国籍企業・・・・・・・・・・・・・・・・・・麻生平八郎

海運産業の発達と海員組合の政策について・・・・・・・・・・篠原 陽一

航空時代の交通需要の構造変化 —分析と展望—・・・・・・・・今野源八郎

第3部

《学界展望》

西ドイツにおける公共近距離旅客交通事業の運賃問題・・・・・・・・秋山 一郎

《書評》

William E. O'connor, Economic Regulation

of the World's Airlines : A Political Analysis. 1971・・・・・・・・吉川 貫二

第4部 学会記録

学会動静・会員業績リスト・追悼記・編集記

1974年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・麻生平八郎

第1部 運賃問題の再検討

交通運賃と厚生分配・・・・・・・・・・・・・・・・・・坂下 昇

運賃問題の再検討	角本 良平
物流サービスの価格決定原則とその政策	細田 繁雄
—輸送と保管を中心として—	
共通運賃制度論	秋山 一郎
社会的費用とトラック運賃	村尾 質
船費、運航費の高騰と海上運賃	下条 哲司
国際航空運賃の動向	津崎 武司

第2部 一般研究

国際比較手法による東京問題へのアプローチ	武田 文夫
都市交通の運営組織について —英国における再編成のケース—	藤井弥太郎
1947年イギリス運賃法の展開とその帰結	小池 郁雄
朝鮮における鉄道の創設と国有	佐藤 豊彦
アメリカにおける航空会社合併をめぐる問題点	吉川 貫二
戦後における電信電話料金改訂の回顧と展望	岩井 真

第3部

《学界展望》

交通問題への公共経済学的視角	斎藤 峻彦
—伝統的な「公共性」議論との関連—	

《書評》

E. Bahke : Transportsysteme heute und morgen	山岸 寛
--	------

第4部 学会記事

学会動静・会員業績リスト・追悼記・編集記

1975年研究年報

序	麻生平八郎
---	-------

第1部 運輸産業の課題 —現代交通産業の課題—

運輸産業の課題 —問題提起—	岡田 清
交通政策と国鉄	岡野 行秀
バスの市場と需要の動向	佐竹 義昌
ハイ・タク事業の衰退化とハイ・タク企業	伊勢田 穆
トラック運送産業の構造と競争	宇野 耕治
海運業の課題 —海運経営環境の変化と海運政策の基調—	織田 政夫
わが国国内航空輸送市場 —その検討と若干の政策提言—	増井 健一

第2部 一般研究

交通市場の発展と交通政策論 —道路交通の成長等を中心として—	今野源八郎
資本主義先進国における総合交通政策進展の歴史的考察	工藤 和馬
現代アメリカ定期海運業の動態と構造	土居 靖範
—コンテナ化による構造変化と再編成の展望—	
わが国航空労働の実態分析	松下 正弘
—急成長下における矛盾と定航労働者—	
発展途上国における農業と予想問題	堀 芳男

第3部

《学界展望》

自動車の社会的費用	杉山 雅洋
—宇沢弘文教授の主張をめぐって—	

《書評》

大島藤太郎・蔵園 進著「日本交通政策の構造」	池田 博行
------------------------	-------

第4部 学会記事

1976年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・麻生平八郎

第1部 交通における労使関係

交通問題にたいする経営者と労働者・・・・・・・・大島藤太郎

交通における労働条件と労使関係・・・・・・・・河越 重任

国鉄における労使関係・・・・・・・・高橋 秀雄

海運合理化と海運業の労使関係・・・・・・・・山本 泰督

第2部 一般研究

対都市道路供給量の定量的考察・・・・・・・・鈴木 啓祐

地方交通政策の課題 ―非交換原理の浸透過程分析―・・・・・・・・小池 郁雄

米国の交通計画策定における住民参加・・・・・・・・本多 繁

都市旅客交通のあり方についての一考察・・・・・・・・矢田 誠治

―欧州諸国の都市交通の現状分析を参考として―

「対談」国鉄問題と交通学の反省・・・・・・・・増井 健一・角本 良平・山田 浩之

第3部

〈学界展望〉

「ターミナル論」の形成と問題意識・・・・・・・・北見 俊郎

〈書 評〉

池田博行著「帝政ロシア交通政策史」・・・・・・・・中西 健一

第4部 学会記事

学会動静・会員業績リスト・追悼記・編集後記―学会30年の回顧をかねての―

1977年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・麻生平八郎

第1部 統一論題研究

I 「地方交通の諸問題」

地方閑散線の存廃に関する理論的考察・・・・・・・・河野 博忠

地方交通路線の評価法に関する研究・・・・・・・・佐藤 馨一・五十嵐日出夫・山形 耕一

地方交通の運営システムについて・・・・・・・・中条 潮

―ルーラル・トランスポート改善のための基礎施策―

地方都市の交通事業経営と交通計画・・・・・・・・上条 悦司

II 「交通部門における財政問題」

交通における財政の柔構造・・・・・・・・岡田 清

公共交通財政政策への理論的提言・・・・・・・・村尾 質

国鉄の財政問題 ―再建への基本戦略―・・・・・・・・大島 国雄

第2部 一般研究

交通政策における政治と経済・・・・・・・・榊原 胖夫

経路網の特定点と新施設の位置・・・・・・・・鈴木 啓祐

港湾の管理運営問題に関する一考察・・・・・・・・山村 学

アメリカ開発経済と鉄道建設 ―アメリカ鉄道経済の成立―・・・・・・・・生田 保夫

第3部 紹 介

イギリスの交通政策白書(1977年)・・・・・・・・廣岡 治哉

道路の最適通行料金 ―Strotz モデルの検討―・・・・・・・・姫野 侑

第4部 学会記事

学会動静・会員業績リスト・追悼記・編集後記・交通学研究総目次

1978年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・麻生平八郎

第1部 統一論題研究

「公共補助の経済学 ―交通における公共補助の根拠、形態、効果等の検討」

交通における公共補助の諸問題・・・・・・・・・・・・・・・・藤井弥太郎

「公共補助の経済学」の可能性と役割・・・・・・・・角本 良平

財政からみた交通補助の諸問題・・・・・・・・中桐 宏文

「足の確保」政策と公共補助 ―乗合バス輸送の事例―・・・・・・・・斎藤 峻彦

海運助成の本質と現代的意義・・・・・・・・柴田 悦子

第2部 一般研究

地域交通の形成と費用負担・・・・・・・・今城 光英

―「共同施設」と補助をめぐって―

高速道路に対する需要の構造変化の分析・・・・・・・・武田 文夫

―東名・名神高速道路の物流の実態を中心に―

国有鉄道事業経営について・・・・・・・・石田 武雄

便宜置籍船とその分析について・・・・・・・・篠原 陽一

オープン・スカイとグランドファーマー・クローズ・・・・・・・・榊原 胖夫

―民間航空市場と航空政策―

第3部

《書評》

地田知平著「海運産業論」・・・・・・・・織田 政夫

国鉄改革論の展望・・・・・・・・鈴木 順一

《回顧》

麻生平八郎先生を囲んで・・・・・・・・清水 義汎・鈴木 繁・増井 健一（司会）

第4部 学会記事

学会動静・会員業績リスト・追悼記・編集後記

1979年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・麻生平八郎

第1部 統一論題研究 「都市交通の戦略」

都市交通政策の課題・・・・・・・・・・・・・・・・秋山 一郎

大東京圏総合交通体系の最適編成・・・・・・・・河野 博忠

都市交通の構造・・・・・・・・・・・・・・・・姫野 侑

自動車時代の都市交通政策・・・・・・・・小淵 洋一

都市交通の戦略・・・・・・・・・・・・・・・・角本 良平

第2部 一般研究

交通サービスとしての公共性 ―公共経済学的アプローチ―・・・・・・・・山田 浩之

派生需要としての交通サービスと消費者行動・・・・・・・・丸茂 新

民営鉄道の運賃制度 ―大手民鉄を中心として―・・・・・・・・前田 義信

国鉄経営組織に関する一考察・・・・・・・・石井 武俊

第3部

《学会展望》

総合交通政策における目標と手段・・・・・・・・蔵下 勝行

《書評》

池田博行著「ドイツ鉄道小史」・・・・・・・・石井彰次郎

《回顧》

今井源八郎先生を囲んで・・・・・・・・ききて：増井 健一・藤井弥太郎

第4部 学会記事

学会動静・会員業績リスト・追悼記・編集後記

1980年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今井源八郎

《統一論題研究》

エネルギー問題と交通・・・・・・・・・・・・・・・・中村 貢
鉄道とエネルギー・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤 金司
道路交通における省エネルギー政策・・・・・・・・武田 文夫
石油エネルギー問題と貨物輸送産業・・・・・・・・野村 宏
エネルギー不足時代の内航海運・・・・・・・・小川 武
航空とエネルギー・・・・・・・・・・・・・・・・津崎 武司

《一般研究》

交通弱者問題への政策論的接近・・・・・・・・衛藤 卓也
地方部における自家用車の共同利用について・・・・・・・・中条 潮
地方中核都市におけるバス交通対策の需要促進に関する研究・・・・・・・・定井 喜明
内航海上労働者の労働と生活・・・・・・・・土居 靖範

《学会展望》

ドイツにおける交通政策の動向と交通学会の対応・・・・・・・・杉山 雅洋
都市交通計画の新しい発想・・・・・・・・佐藤 豊彦
対談 一富永先生とともに一・・・・・・・・角本 良平

《学会記録》

学会動静・会員業績・追悼記

《編集後記》

1981年研究年報

序に代えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今井源八郎

《統一論題研究》 総合交通政策再論 一政策と介入のあり方一

開題 一総合交通政策論の回顧と展望一・・・・・・・・増井 健一
総合交通体系論の「構造」・・・・・・・・岡田 清
総合交通政策における旅客輸送・・・・・・・・藤井弥太郎
運政審答申の総合交通体系論 一新答申の読み方と若干の批判一・・・・・・・・伊勢田 穆
シンポジウムのまとめ・・・・・・・・岡野 行秀

《自由論題研究》

総合交通体系とターミナル 一交通論における論理の転換一・・・・・・・・北見 俊郎
都市交通体系の最適化と価値づけ政策・・・・・・・・小淵 洋一
筑豊の交通問題 一「国鉄ローカル線問題」を契機に一・・・・・・・・野田 秋雄
首都高速道路交通の料金弾力性の計測・・・・・・・・河野 博忠・吉田 雅俊・松村 有二
交通需要分析の新展開 一活動連結メカニズムの解明一・・・・・・・・近藤 勝直
トラック輸送産業の現状と諸問題 一規制・非規制論議をふまえて一・・・・・・・・長峰 太郎
都市鉄道整備の資金調達について 一経営形態別資金調達法の比較一・・・・・・・・斎藤 峻彦

《学会展望・書評》

世界海運経済の動態と技術進歩・・・・・・・・宮下 国生
「海運業の設備投資行動」(宮下国生著)・・・・・・・・国領 英雄
「日本の空港」(津崎武司著)・・・・・・・・鈴木 順一

《学会記事》

活動記録・会員業績リスト・追悼記

1982年研究年報

序に代えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今野源八郎

《統一論題》 国民生活と交通

交通と情報 ―無形財の経済学序説―・・・・・・・・・・榊原 胖夫
国民生活と交通補助 ―通学補助の目的と効果―・・・・・・・・中条 潮
家計構造からみた交通費支出 ―マイカー維持費を中心に―・・・・柴田 悦子
国民生活と物流 ―川下からのアプローチを中心として―・・・・谷本 谷一
「国民の交通費に関する研究」・・・・・・・・・・佐竹 義昌・鈴木 順一

《自由論題》

西ドイツ交通政策の方向 ―連邦交通路計画を中心として―・・・・杉山 雅洋
ロンドンの運賃問題について・・・・・・・・・・丸茂 新
運輸産業における経済的規制をめぐる若干の問題点・・・・・・・・片山 邦彦
―欧米におけるトラック運送業を中心として―
交通企業のマーケティング戦略・・・・・・・・・・細田 繁雄
交通企業とサービス水準 ―その社会的評価を中心として―・・・・松澤 俊雄
交通サービスの性質と私的交通の拡大・・・・・・・・・・生田 保夫
1920年代東武鉄道の経営発展とその市場条件・・・・・・・・老川 慶喜

《学会展望》

物流研究の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・野村 宏

《書評》

太田正樹著「航空輸送の経済学」・・・・・・・・・・増井 健一
生田保夫著「アメリカ経済の生成と鉄道建設」・・・・・・・・小池 郁雄

《回顧》

高橋秀雄先生を囲んで・・・・・・・・・・中島 勇次・(司会)大島 国雄

《学会》

活動記録・会員業績リスト・会員計報

1983年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・増井 健一

《統一論題》 国鉄経営と交通政策

公有鉄道と公共サービス義務・・・・・・・・・・石井 武俊
今後における国鉄貨物輸送の利用価値・・・・・・・・崎山 一雄
公企業の経営 ―イギリスの経験―・・・・・・・・岡田 清
臨調行革と国鉄問題・・・・・・・・・・平井都士夫
行政改革と国鉄再建・・・・・・・・・・加藤 寛

《自由論題》

米国航空政策の新展開と輸送構造変化・・・・・・・・塩見 英治
総合交通体系モデルと料金シミュレーション・・・・・・・・三友 仁志・河野 博忠
―機会費用原理による交通サービスの評価―
輸送量決定メカニズムの定量的解析：最近における輸送量の動向分析・・鈴木 啓祐
鉄道事業における『第3セクター』の動向と課題・・・・・・・・土居 靖範
―国鉄赤字線・新線の『第3セクター』を中心に―
青函トンネルの有効利用方策について・・・・佐藤 馨一・野焼 計史・五十嵐日出夫
鉄道助成の根拠と助成構造の新展開・・・・・・・・真島 和男
陸運・人間交通市場の特殊的性格への一考察・・・・・・・・村尾 質
―モータリゼーションと市場機構―

《学会展望》

米国の航空市場規制をめぐる論議・・・・・・・・佐藤 治正・山内 弘隆・中条 潮

《書評》

村尾 質「貨物輸送の自動車化」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 雨宮 義直

《回顧》

大島藤太郎先生にきく ―研究の展開と日本の特質―・・・・池田 博行・松尾 光芳

《学会記事》

活動記録・会員業績リスト・会員計報

1984年研究年報

序・・ 増井 健一

《統一論題》 戦後交通政策の展開

戦後日本交通政策試論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 廣岡 治哉

戦後交通政策と交通調整論議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 斎藤 峻彦

規制政策のパラドックス ―規制の意図と結果―・・・・・・・・・・・・ 岡野 行秀

国土計画と交通政策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 今野 修平

地域交通政策の展開と課題 ―九州の事例を中心として―・・・・ 田原 栄一

産業政策の視点からみた都市間交通市場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 鈴木 順一

《自由論題》

高速路線バスの社会的役割と発展可能性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 武田 文夫

地域交通体系の効率的再構築・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 菅原 操

交通産業における生産性分析の研究動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 中村 清

地域航空サービスの需要推計方法について・・森地 茂・田村 亨・近藤 淳一

航空輸送の実証分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 石井 信博

時間の経済的価値に関する計量化への試み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 畠平 徹

物流産業の質的変貌 ―流通機能の分担再構築への試み―・・・・ 羽田 昇史

高齢者の交通挙動とその特性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・清水浩志郎・本木 正直・石井 寿典

《学会展望》

鉄道経営に関する研究の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 細田 繁雄

《書評》

野尻俊明著「規制改革と競争政策

―アメリカ運輸事業のディレギュレーション―」・・・・ 山野辺義方

笹木 弘ほか共著「機帆船海運の研究 ―その歴史と構造―」・・・・ 柴田 悦子

《学会記事》

活動記録・会員業績リスト・会員計報・追悼記

1985年研究年報

序・・ 増井 健一

《統一論題》 地域交通

I 大都市圏

首都圏における交通問題と交通政策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 伊東 光晴

京阪神都市圏における都市化と交通問題 ―通勤交通と都市鉄道―・・・・ 山田 浩之

大都市の交通戦略と公共交通 ―アジア諸国を中心に―・・・・ 廣岡 治哉

II 地方圏

国鉄ローカル線の活性化の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 菅原 操

地域計画と交通計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 堀 芳男

過疎地域における交通手段選択行動に関する調査・分析・・折田 仁典・清水浩志郎

III 地域航空

地域航空と地域開発・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 榊原 胖夫

わが国におけるコンピューター航空成立の条件と課題・・・・・・・・ 今野 修平

北海道における地域航空システムの

フィジビリティ・スタディについて・・・佐藤 馨一・五十嵐日出夫

《自由論題》

中国交通体系に関する計量分析・・・張 風波
ネットワーク均衡配分手法による道路交通量の推計・・・松村 有二
クラブ財の理論の交通混雑への適用・・・竹内 建蔵
運輸業におけるサービス競争について・・・寺田 一薫
—便数競争とその厚生上の帰結—

《学会展望》

最近の英国交通学会における研究動向・・・正司 健一

《書評》

「大島藤太郎著作集」全6巻（自潮社）の完結に寄せて・・・松尾 光芳

《学会記事》

活動記録・訃報・会員業績リスト

1986年研究年報

序・・・増井 健一

《統一論題》 鉄道再編と交通政策

幹線旅客輸送と鉄道市場の展望・・・秋葉 明
再編期の都市・都市間鉄道・・・藤井弥太郎
地方における鉄道輸送の現況と課題・・・井原 健雄
地域振興と地方鉄道の再編に関する諸問題・・・田原 栄一
—九州における鉄道再編を中心として—
赤字ローカル線への補助金政策の社会的意義について・・・坂下 昇・平尾 元彦
物流需要の変化からみた鉄道貨物輸送の問題点・・・野村 宏
鉄道サービスと費用負担の政策的展開・・・真島 和男
計画編成モデルによる

国鉄経営形態の比較検討・・・三友 仁志・石黒 道人・河野 博忠
総合列車網構想をめぐる交通政策論・・・鈴木 順一

《自由論題》

ラムゼー価格について —交通サービスとの関連において—・・・丸茂 新
交通産業の全要素生産性と費用構造 —民営乗合バス事業を例として—・・・千葉 芳雄
西ドイツの運輸連合 —交通企業の協力と調整—・・・青木 真美
一般均衡および複数交通機関のそんざいにおける交通政策
あるいはシステムの変更に係わる経済・財務便益の計測モデル・・・土井 正幸
プリズム効用モデルによる交通行動分析・・・近藤 勝直

《学会展望》

「国鉄改革」をめぐる研究動向・・・雨宮 義直

《書評》

中西健一著「戦後国有鉄道論」・・・佐竹 義昌
杉山雅洋著「西ドイツ交通政策研究」・・・秋山 一郎

《学会記事》

活動記録・訃報会員・業績リスト

1987年研究年報

序・・・増井 健一

会長報告・・・増井 健一

《統一論題》 現代交通と規制緩和

規制の経済理論・・・山内 弘隆

「参入規制+内部補助」体制の不当性・・・中条 潮
 国際海運の規制緩和とコンスタビリティ・・・宮下 国生
 交通政策論と政策目標手段 —1つの見方—・・・衛籐 卓也
 交通網整備の理念と〈数字の評価方法〉・・・田村 亨・五十嵐日出夫・佐藤 薫一

《自由論題》

地域経済活性化と交通・・・木谷 直俊
 北海道北部地域における

公共交通機関の役割と課題・・・谷口 君雄・佐藤 馨一・五十嵐日出夫
 地域旅客交通モデル —中規模都市のバスと路面電車の需要—・・・新納 克広
 地方都市交通における二輪車交通の役割・・・清水浩志郎・木村 一郎
 有料道路の国民経済的位置づけとその制度・経営の国際比較・・・武田 文夫
 アメリカ道路政策の新局面と課題 —岐路に立つアメリカ道路政策—・・・西村 弘
 開発途上国の交通開発と対策・・・鳥山 正光
 テレコム・モビリティ試論・・・今橋 隆
 経済政策の判断基準としての補償原理・・・太田 和博
 —補償テストの経済学的含意と問題点—

《回顧》

増井健一先生・佐竹義昌先生を囲んで・・・杉山 雅洋・中条 潮

《追悼の辞》

故島田孝一先生に捧ぐ・・・増井 健一

《学会記事》

活動記録・訃報・会員業績リスト

1988年研究年報

序・・・廣岡 治哉

《統一論題》 交通費用と運賃政策

輸送用役の価格、取引形態、および費用 —学説史的方法による断章—・伊勢田 穆
 交通費用と路線間内部補助 —都市高速道路のケース—・・・正司 健一
 交通事業におけるレート・ベース方式の問題点・・・菅田 昭正・稲田 隆司
 交通社会資本整備に関わる費用負担と資金調達・・・杉山 武彦
 —現状認識と問題提起—

規制緩和下の運賃政策・・・岡野 行秀

《自由論題》

鉄道建設と地域社会 —三重県下の一事例—・・・武知 京三
 都市鉄道の相互直線本数の考え方・・・奥 猛
 第3セクター鉄道の現状と今後の展望についての調査研究・・・井上 信昭
 —甘木鉄道（佐賀県基山町～福岡県甘木市）を例として—

コンテナ港の競争と港湾選択に関する研究・・・宮嶋 勝・郭 圭錫
 高速道路も利用による流通経済の合理化効果の計測・・・三友 仁志・宮台 洋二
 —在庫管理理論に依拠して—

最近における空港整備財源政策に関する一考察・・・楠木 行雄
 通し運賃の費用配分とその経済的意義・・・陶 怡敏
 交通学への提言・・・角本 良平

《学会展望》

規制緩和以降の米国空運研究にみられる新潮流・・・高橋 望
 —経営問題の発生と空運経営論の構築を目指して—

《書評》

武田文夫著「交通の計画と経営 —市場構造への変化への対応」・・・近藤 勝直

廣岡治哉著「市民と交通」・・・・・・・・・・・・・・・・三上 宏美

《学会記事》

活動記録・訃報・会員業績リスト

1989年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・廣岡 治哉

《統一論題》 国際化時代の交通

西欧の内航海運政策とわが国内航海運政策に関する一考察・・・・・・・・小野 芳計

—E C統合に伴う構造的過剰船腹消滅施策と

わが国船腹調整事業の比較を中心として—

新しい国際分業の形式と海運業・・・・・・・・山本 泰督

違法格安航空券と方向別格差の基本的問題点・・・・・・・・中条 潮・山内 弘隆

—国際航空における市場の力 V S 強制の力—

国際航空のグローバル化・・・・・・・・山本雄二郎

《自由論題》

料金・投資政策再考・・・・・・・・金本 良嗣

産業連関表による高速道路のストック効果の計測と評価・・定井 喜明・裕 茂樹

バス産業における複数産出構造と範囲の経済性・・・・・・・・千葉 芳雄

公営バスの地域交通に果す公共的機能についての研究・・宮嶋 勝・渡邊 篤郎

宅配便の成長とその社会的影響・・・・・・・・斎藤 實

—無店舗販売の発展を通じた流通への影響—

メタノール自動車導入に関する研究・・・・・・・・和平 好弘

—各国の導入政策と研究開発状況—

中国における交通・運輸改革の現状と政策的課題に関する考察・・・・・・・・香川 正俊

—深圳経済特別区の港湾改革を中心に—

国際化時代に交通政策の新傾向とわが国の課題・・・・・・・・今野源八郎

《学会展望》

E C統合と共通運輸政策・・・・・・・・青木 真美

《書評》

近藤勝直著「交通行動分析」・・・・・・・・太田 勝敏・原田 昇

「富永 祐治著作集」(全3巻)・・・・・・・・増井 健一

《回顧》

前田義信先生を囲んで・・・・・・・・山田 浩之・下条 哲司・小林 清晃

—佐波交通論の継承と発展—

《学会記事》

活動記録・訃報・会員業績リスト

1990年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・廣岡 治哉

《統一論題》 地域交通体系と地域活性化

「地域と交通」への政策哲学・・・・・・・・衛藤 卓也

地域活性化からの交通への期待と課題・・・・・・・・今野 修平

地域格差を考慮した道路ネットワークの

選定法に関する一考察・・・・・・・・木村 一裕・清水浩志郎

〈特別講演〉日本の交通と地域活性化・・・・・・・・平松 守彦

《自由論題》

旧特定地方交通線沿線地域のバス利用の実態と今後の課題についての

調査研究—旧矢部線におけるケーススタディー・・・・・・・・井上 信昭・堤 香代子

北海道における鉄道廃止政策の展開と沿線地域社会	武田 泉
—名寄線、池北線の事例を中心に—	
特定地方交通線の転換後の現状と課題	宇野 耕治
ドイツ連邦鉄道の経営改善計画と経営戦略	堀 雅道
—鉄道活性化のための課題と展望—	
地方中小都市のバス交通市場について	伊藤 規子
都市間中長距離バス輸送発達と都市間旅客交通市場の変化	新納 克広
道路資源の配分方法の比較	竹内 健蔵
—時間による支払いと金銭による支払い—	
土地利用の変化とインフラの整備	芦田 誠
—アメリカ鉄道インパクトスタディから学ぶもの—	
国際物流におけるコンテナ港間競争と地域的独占	山上 徹
SUREモデルによる交易障壁の計測	平尾 元彦
—九州地域国際化の進展計測を例として—	
観光・リゾートの動向と交通	秋葉 明
《学会展望》	
米国航空産業における規制緩和後の労使関係	高橋 望
《書評》	
奥野正寛・篠原総一・金本良嗣編「交通政策の経済学」	斎藤 峻彦
《回顧》	
角本良平先生を囲んで	藤井弥太郎・谷利 亨・杉山 雅洋
《学会記事》	
活動記録・会員業績リスト	
《編集後記》	

50周年記念講演会・記念パーティ

開式の辞	岡野 行秀
会長講演 高密度社会のディレンマ	廣岡 治哉
来賓講演 —実務家の立場から—	住田 正二
外国来賓講演 ヨーロッパにおける交通政策	K. M. Gwilliam
—環境問題を中心に—	
閉式の辞	山田 浩之
記念パーティ	

国際シンポジウム

《テーマ》 現代の交通政策

開式の辞	雨宮 義直
フランスにおける交通政策	E. Quinet
統一後のドイツにおける交通の展開	W. Rothengatter
交通政策における政府の役割	岡野 行秀
韓国の鉄道輸送のための政策的条件	Kang-Won-Lim
中国鉄道の現状と未来	季 令
日本の都市交通問題と交通政策	山田 浩之
パネル討論	(議長) 榊原 胖夫
閉式の辞	杉山 武彦

1991年研究年報

序	廣岡 治哉
---	-------

《統一論題》 交通体系の整備と交通社会資本の充実

- マクロ経済制約下の交通社会資本整備・・・・・・・・今橋 隆・太田 和博
- 北海道新幹線の整備目標とその課題・・・・・・・・佐藤 馨一・五十嵐日出夫
- 新幹線基礎施設公有論・・・・・・・・奥 猛
- 新時代に向けての交通施設の整備制度・・・・・・・・武田 文夫

《自由論題》

- 隅田川における河川交通実態調査と分析・・・・・・・・山田 猛敏・庄司 邦昭
渡辺 豊・平野 勇
- 地域交通資本の整備と公共交通機関の運営の調整・・・・・・・・青木 真美
- ドイツの例からの提言—
- 九州における第三セクター鉄道の実状と展望に関する一考察（序論）・・香川 正俊
- 熊本県南阿蘇鉄道を中心に—
- 米国道貨物輸送市場における経営環境変化と戦略展開・・・・・・・・林 克彦
- エリア・マネジメントシステム導入による
- 交通社会資本の整備に関する研究・・・・・・・・石井 晴夫
- 幹線交通体系の整備と工業立地・・・・・・・・小林 茂・今野 修平
- 最近における北海道、東北地域の工場立地動向と交通のかかわりあい—
- モーダルシフトの検証・・・・・・・・谷利 亨
- 高齢化社会の交通政策・・・・・・・・中村 実男
- 欧米諸国におけるモビリティ・ハンディキャップ対策の展開と現状—
- わが国の消費生活における交通支出について・・・・・・・・丸茂 新

《書 評》

- 谷利 亨著「道路貨物輸送政策の軌跡」・・・・・・・・今橋 隆
- 増井健一・山内弘隆著「航空輸送」・・・・・・・・高橋 望

《学会記事》

活動記録・会員業績リスト

《編集後記》

1992年研究年報

- 序・・・・・・・・岡野 行秀

《統一論題》 大都市交通の諸問題

- 発展途上国における大都市の交通問題とその対策・・・・・・・・土井 正幸
- 大都市交通問題への物流面からのアプローチ・・・・・・・・谷本 谷一
- 高齢社会と公共交通の整備改善・・・・・・・・花房 信夫
- 二四時間化と大都市交通問題・・・・・・・・中条 潮
- 京阪神圏における都市交通政策の諸問題・・・・・・・・斎藤 峻彦

《自由論題》

- 国際交通における自由化の流れ・・・・・・・・東海林 滋
- LNGの輸入とその輸送・・・・・・・・米田 博
- 代替交通機関の存在下における都市交通の投資・補助政策について・・竹中 健蔵
- 大都市交通問題とロード・プライシングの現代的意義・・・・・・・・小淵 洋一
- 定期旅客輸送と都市化・・・・・・・・姫野 侑
- 地域交通の運賃政策 —公正の視点から—・・・・・・・・寺田 一薫
- 大都市交通問題と政策・・・・・・・・松澤 俊雄
- 札幌市における都心交通政策について・・・・・・・・佐藤 馨一

《学会展望》

- 最近の交通学研究の視点・・・・・・・・石井 晴夫

《追 悼》

高橋 秀雄・・・・・廣岡 治哉
佐竹 義昌・・・・・前田 義信
中村 英男・・・・・事務局

《学会記事》

活動記録・業績リスト

《編集後記》

1993年研究年報

序・・・・・岡野 行秀

《統一論題》 社会環境の変化と交通のあり方

身体障害者・高齢者のための交通・・・・・和平 好弘
高齢化社会における交通計画学的視点とその課題・・・・・清水浩志郎
年における自動車交通適正化政策の考察・・・・・太田 勝敏
都市化と自立・共生と交通システム・・・・・雨宮 義直
「社会環境の変化と交通のあり方」総論・・・・・角本 良平

《自由課題》

わが国の道路整備役割の変遷と意義および課題・・・・・金沢 哲雄
転換期を迎える軽自動車規制・・・・・今橋 隆
路線トラック産業組織における同時的關係・・・・・千葉 芳雄
交通条件改善はオフィス立地分散に有効か・・・・・須田 昌弥
交通超混雑の経済理論・・・・・坂下 昇
ネットワークの経済効果と航空規制緩和の政策評価・・・・・村上 英樹
二地点交通量のルート間配分モデル・・・・・鈴木 武
鉄道投資における開発利益の還元・・・・・青木 亮
鉄道の「上下分離」に関する国際比較研究・・・・・堀 雅道
高齢者の自動車事故対策・・・・・芦田 誠
基幹定型輸送サービスは公共財か・・・・・陶 怡敏
大量公衆（公共）交通への公共的補助の根拠・・・・・村尾 質

《学会記事》

活動記録・業績リスト

《編集後記》

1994年研究年報

序・・・・・岡野 行秀

《統一論題》 交通における規制緩和と地方分権

規制から規制の緩和・撤廃へ・・・・・谷利 亨
地方部の乗合型交通における規制緩和と補助政策・・・・・寺田 一薫
公共料金の情報公開と規制緩和・・・・・中条 潮
国土軸構想と地方交通政策の課題・・・・・田原 栄一

《自由論文》

プライス・キャップ規制下の交通投資政策・・・・・太田 和博
高速道路の料金のあり方、整備制度および経営の効率化・・・・・武田 文夫
特定地方交通線の廃止・転換に伴う代替交通システムの評価・・・・・高橋 清
鉄道旅客運賃について・・・・・奥 猛
アジア諸国の河川交通の課題・・・・・赤塚 雄三
通勤費の企業負担と住宅立地・・・・・姫野 侑
「Downs-Thomsonのパラドックス」に関する実証的研究・・・・・宮島 勝

《学会展望》

近年のフランスの道路貨物運送業の動向・・・・・・・・・・・・・・・・中村 徹

《書評》

斎藤峻彦著「交通市場政策の構造」・・・・・・・・・・・・・・・・青木 眞美

角本良平著「交通の未来の展望」・・・・・・・・・・・・・・・・三上 宏美

《学会記事》

活動記録・業績リスト

《編集後記》

1995年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・岡野 行秀

《統一論題》 21世紀の交通システム

道路財源制度の改善に関する一考察・・・・・・・・・・・・・・・・今橋 隆

交通整備・運営効率化の新たな要請・・・・・・・・・・・・・・・・土井 正幸

競争促進政策と空港システムの再検討・・・・・・・・・・・・・・・・塩見 英治

震災と交通体系・・・・・・・・・・・・・・・・正司 健一・近藤 勝直

《自由論題》

都市鉄道に対する公正報酬率規制とプライス・キャップ規制・・・・・・・・城所 幸弘

道路混雑・環境問題と交通需要マネジメント政策・・・・・・・・小淵 洋一

都市における駐車マネジメント政策についての考察・・・・・・・・太田 勝敏

国内航空運賃の実証分析 一決定因と市場別改定効果一・・・・・・・・村上 英樹

費用・距離分析からみたモーダルシフトの可能性・・・・・・・・山田 猛敏・武田 健吾

一関東～北海道、北九州間の長距離輸送分析一

米国交通社会資本の現状と問題点・・・・・・・・・・・・・・・・和田 憲昌

フランス交通政策の背景と論理・・・・・・・・・・・・・・・・凶師 雅脩

EU 共通鉄道政策の展開にみるフランス国鉄 (SNCF) の対応・・・・・・・・中村 徹

整備新幹線の諸問題 一九州新幹線・鹿児島ルートを中心に一・・・・香川 正俊

都市鉄道需要の計量分析・・・・・・・・・・・・・・・・山田 浩之・綿貫伸一郎

一交通需要の運賃弾力性の計測一

《学会展望》

プライス・キャップ規制の有効性を巡って・・・・・・・・・・・・・・・・太田 和博

《学会記事》

活動記録・業績リスト

《編集後記》

1996年研究年報

序・・・・・・・・・・・・・・・・藤井弥太郎

《統一論題》 民営化と市場化の成果と課題

鉄道事業の生産性分析と運賃規制への示唆・・・・・・・・・・・・・・・・井口 典夫

インターモーダルリズムと消費者指向型の交通計画・・・・・・・・加藤 一誠

交通産業における民営化の意義と限界・・・・・・・・・・・・・・・・斎藤 峻彦

《自由論題》

エッセンシャル・ファシリティとオープンアクセス理論

一その意義と適用可能性一・・・・・・・・醜醐 昌英・堀 雅道

地方都市における公共交通対策と課題 一富山県を例として一・・・・青木 亮

東京における道路混雑の損失額と最適混雑料金・・・・・・・・長尾 重信

通信と航空交通

一コミューター航空と多空港・少量多頻度運航への提言一・・・・酒井 正子

海外観光旅行の発生および

目的地選択の国内地域格差	森地 茂・轟 朝幸・西村 徹
交通施設整備と市場経済	奥 猛
ISTEA 以後のアメリカ地域交通政策の展開	西村 弘
高速鉄道整備の地域システムに与える影響	佐々木公明・大橋 忠宏・安藤 朝夫
—新幹線ネットワークは地域分散を促進させるか—	
私鉄経営者協会期（1948～1967年）の民鉄業界活動	和久田康雄
《学会展望》	
最近の都市交通問題に関する若干の議論	木谷 直俊
《追 悼》	
今野源八郎先生を偲んで	岡野 行秀
《学会記事》	
活動記録・業績リスト	
《編集後記》	

1997年研究年報

序	藤井弥太郎
《統一論題》 交通分野における規制改革のあり方	
運輸産業における規制改革の方向	山内 弘隆
規制改革と補助に関する再検討	今橋 隆
英国域内バス事業の規制改革について	松澤 俊雄
規制緩和後のハブ・システムの展開と空港制約の処理	高橋 望
《自由論題》	
博物館施設の需要に関する一考察	岡野 英伸
—神戸市立須磨海浜水族館のケース—	
航空事業新規参入と安全規制	岩淵 正風
米国オープンスカイ政策とそれに伴う市場の変化についての研究	遠藤 伸明
地方空港の国際化の進展と	
そのネットワーク化に関する研究	石井 伸一・高野 伸栄・佐藤 馨一
国際物流と戦略的ネットワーク	陶 怡敏
地方における社会資本投資の妥当性	中村 彰宏
高齢社会における歩行空間整備に関する	
基礎的考察	横山 哲・清水浩志郎・木村 一裕
今後における公共流通拠点の機能展開 —行政機能統合化の方向—	忍田 和良
《追 悼》	
オビチュアリー：富永祐治先生	伊勢田 穆
《学会記事》	
活動記録・業績リスト	
《編集後記》	

1998年研究年報

序	藤井弥太郎
《統一論題》 運輸新時代における地域交通のあり方	
ドイツにおける鉄道近距離旅客輸送の地域化	青木 真美
地域交通計画の策定主体としての都市圏計画機構	太田 和博
—米国アイオワ州デモイン都市圏を例として—	
都心交通対策における循環バス実験の	
成果と課題	高野 伸栄・加賀屋誠一・赤澤 義遵
都市鉄道における距離別運賃構造	新納 克広

過疎地域交通維持の必要性和需給調整規制廃止問題・・・香川 正俊
—第三セクター鉄道の維持と過疎地域「再生」製作の密接不可分性を中心に—

《自由論題》

都市化の集積水準に関する空間的収入モデル・・・神頭 広好
—東京首都圏の私鉄沿線周辺地区を対象にして—

密集市街地における交通空間確保と地震防災性の改善に関する提言

—市場メカニズムによる土地利用変化に着目して—・・・森地 茂・山縣 弘樹
利用者意識からみた航空会社が提供する

サービスの評価・・・岸 邦弘・石井 伸一・佐藤 馨一

国内線旅客のアクセス手段選択の分析・・・榊原 胖夫・加藤 一誠

イギリスにおける空港の料金対策・・・松本 秀賜・大野 泰資
—BAAplc の事例を中心に—

地方空港への国際定期路線就航の可能性 —計量的手法による分析—・・・辻本 勝久

交通サービスの自発的供給は可能か? —理論的フレームワーク—・・・湧口 清隆

社会資本整備における民間参画の経済分析・・・手塚広一郎

EUにおける自動車諸税をめぐる議論の動向について・・・中村 徹

ロード・プライシング政策と市民の合意形成の方策・・・小淵 洋一

ロード・プライシングの都市間比較 —シンガポールとノルウェー—・・・兒山 真也

仮想的市場法による高速道路サービスの便益評価・・・井口 典夫

地方私鉄における経営多角化 —北陸地方を例として—・・・青木 亮

《回顧》

秋山一郎先生を囲んで・・・宮下 國生・伊勢田 穆・正司 健一

《追悼》

麻生平八郎先生を偲んで・・・松尾 光芳

《学会記事》

活動記録・業績リスト

《編集後記》

1999年研究年報

序・・・藤井弥太郎

《統一論題》 情報通信時代の交通

情報通信時代の交通と交通政策・・・小淵 洋一

料金自動收受システム導入時の都市高速道路交通管理についての考察・・・秋山 孝正

テレワーク/テレコミュニケーションによる交通混雑低減効果とその実現可能性

—日米比較を通じて—・・・三友 仁志

情報利用の高度化と交通の変貌・・・今橋 隆

《自由論題》

政府規制と規制環境 —インセンティブ規制との関連において—・・・白神 昌也

鉄道事業における垂直的分離と経済厚生・・・山根 智仁

—上下分離への産業組織論的アプローチ—

低成長期における交通整備制度のあり方・・・醍醐 昌英

引き当て営業権価格に基づく日本の内航海運業界の理論的考察・・・中泉 拓也

鉄道事業におけるネットワークと組織に関する考察・・・山田 徳彦

地域コミュニティによる交通サービス供給の可能性・・・高橋 愛典

—利用可能性確保の観点から—

高速道路沿線住民の高速バス利用可能性について・・・今野 恵喜

英国バス市場における品質協定の政策的意義・・・寺田 一薫

—最近の域内バス規制の変化—

ロード・プライシング —一つの研究ノート— 庭田 文近・關 (金澤) 哲雄
 地球温暖化問題と自動車交通 二村真理子
 —税制のグリーン化と二酸化炭素排出削減—
 航空におけるカボタージュ禁止問題 岩淵 正風
 —自由化は国境の壁を超えられるか—

《回顧》

廣岡先生を囲んで 雨宮 義直・今橋 隆
 塩見 英治・野村 宏

《学会記事》

活動記録・業績リスト

《編集後記》

2000年研究年報

序 山田 浩之

《統一論題》 交通政策の展開と環境制約

環境負荷の少ないロジスティックスをめざして 根本 敏則
 都市経済の変貌と都市交通・都市環境 西村 弘

《自由論題》

BAA 民営化の成果に関する一考察 横見 宗樹
 —商業政策の変遷における視点から—
 複数空港における機能分担規則の国際比較 花岡 伸也
 —欧州を事例として—

ハブモデルを用いたニセコ・洞爺地域における

空港立地計画に関する研究 坂野 匡弘・岸 邦宏・佐藤 馨一
 国際航空分野におけるハブ・アンド・スポークシステム 松本 秀暢
 —日本・ソウル間の航空ネットワークからの考察を中心に—
 株式市場に見る経済的規制の緩和による影響 手塚広一郎
 —航空産業を事例として—

国際物流拠点としてみた地方空港の現状 青木 亮
 わが国航空会社の供給・費用構造の一考察 遠藤 伸明
 —トランスログ型費用関数による計量的分析を中心に—

物流業における取引形態と企業間関係 小澤 茂樹
 —長期継続取引を中心に—

中国における港湾システムの

技術効率性の計測 伊藤 秀和・土井 正幸・河上 哲
 —DEA(Data Envelopment Analysis)手法の応用—
 日本のインパンド・ツーリズムの需要分析 麻生 憲一
 —経済時系列データから捉えた訪日外国人旅行者数の動向—
 「背伸び観光」と「身の丈観光」 玉村 和彦
 —日本とイギリスのパッケージ・ツアーの比較—

違法駐車防止条例が及ぼす政策効果に関する定量的研究・橋爪 崇・宮嶋 勝
 都市・交通体系とエネルギー消費 小川 雅司・山田 浩之
 —自動車とガソリン消費を中心に—

英国バス市場における入札制度と契約 田邊 勝巳
 事前購入割引制度に関する一考察 湧口 清隆
 —需要サイドのオプション価格に基づく分析—

明治20～30年代における交通論の形成過程 藤井 秀登
 大手私鉄の多角化戦略に関する一考察 正司 健一・Killeen, B. J.

—多角化の過程と収益性の関係—

トラック運送会社の環境問題への取り組みと評価

—日・米・韓を中心として— 芦田 誠・ホン ジンウォン

空間的構造変化を考慮した

都市環状道路整備の便益評価 武藤 慎一・秋山 孝正・高木 朗義

鉄道運賃規制と次善の道路料金形成との関連性について 竹内 健蔵

—数値例によるシミュレーションを中心に—

(2) 報告者 (研究年報執筆者) 別索引

- 【あ】
- 青木 真美 1986年(第44回) 自由論題研究
 1989年(第47回) 学会展望
 1991年(第50回) 自由論題研究
 1994年(第53回) 書評
 1998年(第57回) 統一論題研究
- 青木 亮 1993年(第52回) 自由論題研究
 1996年(第55回) 自由論題研究
 1998年(第57回) 自由論題研究
 2000年(第59回) 自由論題研究
- 赤澤 義遵 1998年(第57回) 統一論題研究
- 赤塚 雄三 1994年(第53回) 自由論題研究
- 赤堀 邦雄 1962年(第20回) 研究(第1部)
 1966年(第24回) 研究(第2部)
 1968年(第26回) 研究(第1部)
 1971年(第29回) 研究(第1部)
- 秋葉 明 1986年(第44回) 統一論題研究
 1990年(第48回) 自由論題研究
- 秋山 一郎 1956年(第15回) 研究
 1957年(第16回) 文献紹介
 1958年(第17回) 研究
 1960年(第19回) 研究(第1部)
 1961年(第20回) 研究
 1973年(第31回) 学会展望
 1974年(第32回) 研究(第1部)
 1979年(第37回) 統一論題研究
 1986年(第44回) 書評
- 秋山 孝正 1999年(第59回) 統一論題研究
 2000年(第59回) 自由論題研究
- 芦田 誠 1990年(第48回) 自由論題研究
 1993年(第52回) 自由論題研究
 2000年(第59回) 自由論題研究
- 麻生 憲一 2000年(第59回) 自由論題研究
- 麻生平八郎 1942年3月(第1回) 研究
 1952年(第11回) 研究
 1954年(第13回) 研究
 1956年(第15回) 研究
 1957年(第16回) 学会展望
 1960年(第19回) 研究(第2部)
 1963年(第21回) 研究(第1部)
 1973年(第31回) 研究(第2部)
 1974年(第32回) 序
 1975年(第33回) 序
 1976年(第34回) 序
 1977年(第35回) 序
 1978年(第36回) 序
 1978年(第36回) 回顧
 1979年(第37回) 序
- 吾孫子 豊 1952年(第11回) 研究
- 雨宮 義直 1966年(第24回) 研究(第2部)
 1968年(第26回) 書評
 1983年(第41回) 書評
- 1986年(第44回) 学会展望
 1993年(第52回) 統一論題研究
 1999年(第58回) 回顧
- 安藤 朝夫 1996年(第55回) 自由論題研究
- 五十嵐日出夫 1977年(第35回) 統一論題研究
 1985年(第43回) 統一論題研究(Ⅲ)
 1987年(第45回) 統一論題研究
 1991年(第50回) 統一論題研究
- 猪狩知之進 1952年(第11回) 研究
- 生田 保夫 1977年(第35回) 一般研究
 1982年(第40回) 自由論題研究
- 井口 典夫 1996年(第55回) 統一論題研究
 1998年(第57回) 自由論題研究
- 池田 博行 1966年(第24回) 研究(第2部)
 1968年(第26回) 研究(第2部)
 1975年(第33回) 書評
 1983年(第41回) 回顧
- 伊坂 市助 1950年(第9回) 研究
 1952年(第11回) 研究
 1955年(第14回) 研究
 1956年(第15回) 研究
 1957年(第16回) 研究
 1959年(第18回) 研究(第1部)
 1960年(第19回) 研究(第1部)
 1960年(第19回) コメント(第2部)
 1966年(第24回) 研究(第2部)
 1967年(第25回) 座談会
- 石井 伸一 1997年(第56回) 自由論題研究
 1998年(第57回) 自由論題研究
- 石井彰次郎 1959年(第18回) 研究(第2部)
 1961年(第20回) 資料
 1965年(第23回) 資料
 1979年(第37回) 書評
- 石井 武俊 1979年(第37回) 一般研究
 1983年(第41回) 統一論題研究
- 石井 常雄 1955年(第14回) 研究
 1958年(第17回) 研究
- 石井 晴夫 1991年(第50回) 自由論題研究
 1992年(第51回) 学会展望
- 石井 寿典 1984年(第42回) 自由論題研究
- 石黒 道人 1986年(第44回) 統一論題研究
- 石田 武雄 1978年(第36回) 一般研究
- 石田 信博 1984年(第42回) 自由論題研究
- 伊勢田 穆 1970年(第28回) 書評
 1975年(第33回) 研究(第1部)
 1981年(第39回) 統一論題研究
 1988年(第46回) 統一論題研究
 1997年(第56回) 追悼の辞
 1998年(第57回) 回顧
- 磯崎 叡 1949年(第8回) 研究
- 一ノ瀬智司 1955年(第14回) 研究
- 伊藤 鍾雄 1950年(第9回) 研究
- 伊藤重治郎 1963年(第21回) 回顧
- 伊藤 規子 1990年(第48回) 自由論題研究

伊藤 秀和	2000年(第59回)	自由論題研究		1969年(第27回)	研究(第1部)
伊東 光晴	1985年(第43回)	統一論題研究(I)		1976年(第34回)	研究(第1部)
伊藤 允博	1966年(第24回)	資料		1983年(第41回)	回顧
稲田 隆司	1988年(第46回)	統一論題研究	太田 和博	1987年(第45回)	自由論題研究
稲原 康雄	1950年(第9回)	研究		1991年(第50回)	統一論題研究
	1961年(第20回)	研究		1994年(第53回)	自由論題研究
	1972年(第30回)	研究(第1部)		1995年(第54回)	学会展望
井上 信昭	1988年(第46回)	自由論題研究		1998年(第57回)	統一論題研究
	1990年(第48回)	自由論題研究	太田 勝敏	1989年(第47回)	書評
井原 健雄	1986年(第44回)	統一論題研究		1993年(第52回)	統一論題研究
今泉 秀夫	1943年5月(第3回)	研究		1995年(第54回)	自由論題研究
今城 光英	1978年(第36回)	一般研究	太田 正樹	1962年(第20回)	研究
今橋 隆	1987年(第45回)	自由論題研究	大野 泰資	1998年(第57回)	自由論題研究
	1991年(第50回)	統一論題研究	大橋 忠宏	1996年(第55回)	自由論題研究
	1991年(第50回)	書評	大森 一二	1943年10月(第4回)	研究
	1993年(第52回)	自由論題研究		1947年(第6回)	研究
	1995年(第54回)	統一論題研究		1955年(第14回)	研究
	1997年(第56回)	統一論題研究		1957年(第16回)	研究
	1999年(第58回)	統一論題研究		1963年(第21回)	回顧
	1999年(第58回)	回顧		1969年(第27回)	書評
岩井 真	1974年(第32回)	研究(第2部)	岡田 清	1962年(第20回)	研究(第1部)
岩淵 正風	1997年(第56回)	自由論題研究		1966年(第24回)	研究(第1部)
	1999年(第58回)	自由論題研究		1967年(第25回)	書評
植村 福七	1954年(第13回)	研究		1969年(第27回)	学会展望
	1955年(第14回)	研究		1971年(第29回)	研究(第1部)
	1956年(第15回)	研究		1972年(第30回)	座談会
	1957年(第16回)	研究		1973年(第31回)	研究(第1部)
	1960年(第19回)	研究(第1部)		1975年(第33回)	研究(第1部)
	1964年(第22回)	研究(第1部)		1977年(第35回)	統一論題研究
内海 文雄	1959年(第18回)	紹介		1981年(第39回)	統一論題研究
宇野 耕治	1971年(第29回)	書評		1983年(第41回)	統一論題研究
	1975年(第33回)	研究(第1部)	岡庭 博	1956年(第14回)	研究
	1990年(第48回)	自由論題研究		1960年(第18回)	研究(第2部)
占部 都美	1953年(第12回)	研究		1961年(第19回)	研究
	1954年(第13回)	研究		1962年(第20回)	研究(第1部)
	1955年(第14回)	研究		1963年(第21回)	研究(第2部)
瓜生 卓爾	1951年(第10回)	研究		1969年(第27回)	研究(第2部)
江沢 譲爾	1949年(第8回)	研究	岡野 英伸	1997年(第56回)	自由論題研究
江藤 和馬	1952年(第11回)	研究	岡野 行秀	1964年(第22回)	研究(第1部)
	1955年(第14回)	研究		1966年(第24回)	学会展望
衛藤 卓也	1980年(第38回)	一般研究		1968年(第26回)	研究(第1部)
	1987年(第45回)	統一論題研究		1971年(第29回)	研究(第1部)
	1990年(第48回)	統一論題研究		1975年(第33回)	研究(第1部)
遠藤 伸明	1997年(第56回)	自由論題研究		1981年(第39回)	統一論題研究
	2000年(第59回)	自由論題研究		1984年(第42回)	統一論題研究
老川 慶喜	1982年(第40回)	自由論題研究		1988年(第46回)	統一論題研究
大島 國雄	1970年(第28回)	研究(第1部)		1991年(第50回)	シンポジウム
	1972年(第30回)	座談会		1992年(第51回)	序
	1977年(第35回)	統一論題研究		1993年(第52回)	序
	1982年(第40回)	回顧		1994年(第53回)	序
大島藤太郎	1952年(第11回)	研究		1995年(第54回)	序
	1953年(第12回)	研究		1996年(第55回)	追悼の辞
	1955年(第14回)	研究	小川 武	1980年(第38回)	統一論題研究
	1960年(第19回)	研究(第1部)	小川 博三	1964年(第22回)	研究(第2部)
	1960年(第19回)	コメント(第2部)		1966年(第24回)	資料
	1964年(第22回)	研究(第2部)	小川 雅司	2000年(第59回)	自由論題研究

- 奥 猛 1988年(第46回)自由論題研究
1991年(第50回)統一論題研究
1994年(第53回)自由論題研究
1996年(第55回)自由論題研究
- 小沢 輝 1943年5月(第3回)研究
- 小澤 茂樹 2000年(第59回)自由論題研究
- 忍田 和良 1997年(第56回)自由論題研究
- 小田垣光之輔 1958年(第17回)研究
- 織田 政夫 1975年(第33回)研究(第1部)
1978年(第36回)書評
- 尾上 久雄 1973年(第31回)研究(第1部)
- 小野田 操 1964年(第22回)研究(第1部)
- 小野 芳計 1989年(第47回)統一論題研究
- 小淵 洋一 1979年(第37回)統一論題研究
1981年(第39回)自由論題研究
1992年(第51回)自由論題研究
1995年(第54回)自由論題研究
1998年(第57回)自由論題研究
1999年(第58回)統一論題研究
- 折田 仁典 1985年(第43回)統一論題研究(Ⅱ)
- 【か】
- 加賀谷一良 1960年(第19回)研究(第2部)
1962年(第21回)研究(第2部)
1967年(第25回)研究
- 加賀屋誠一 1998年(第57回)統一論題研究
- 加賀山之雄 1942年3月(第1回)研究
- 香川 正俊 1989年(第47回)自由論題研究
1991年(第50回)自由論題研究
1995年(第54回)自由論題研究
1998年(第57回)統一論題研究
- 郭 圭錫 1988年(第46回)自由論題研究
- 角本 良平 1961年(第19回)研究
1962年(第21回)研究(第1部)
1968年(第26回)研究(第1部)
1972年(第30回)座談会
1974年(第32回)研究(第1部)
1976年(第34回)鼎談
1978年(第36回)統一論題研究
1980年(第38回)統一論題研究
1988年(第46回)自由論題研究
1990年(第48回)回顧
1993年(第52回)統一論題研究
- 加地 照義 1950年(第9回)研究
1952年(第11回)研究
1956年(第15回)シンポジウム
1959年(第18回)研究(第2部)
1964年(第22回)回顧
1969年(第27回)書評
- 片岡 譚郎 1965年(第23回)回顧
- 片平 信貴 1956年(第15回)シンポジウム
1959年(第18回)研究(第1部)
- 片山 邦彦 1982年(第40回)自由論題
- 加藤 一誠 1996年(第55回)統一論題研究
1998年(第57回)自由論題研究
- 加藤 寛 1983年(第41回)統一論題研究
- 金谷 重義 1942年3月(第1回)研究
1952年(第10回)研究
- 金本 良嗣 1989年(第47回)自由論題研究
- 加納 直人 1955年(第13回)研究
1960年(第18回)研究
1964年(第22回)研究(第2部)
- 上条 悦司 1977年(第35回)統一論題研究
- 河上 哲 2000年(第59回)自由論題研究
- 川越 八郎 1942年10月(第2回)研究
- 河越 重任 1976年(第34回)研究(第1部)
- 河辺 旨 1952年(第11回)研究
1953年(第12回)研究
1955年(第14回)研究
1962年(第20回)研究(第1部)
- 河村 宣介 1950年(第9回)研究
1956年(第15回)研究
- 季 令 1991年(第50回)シンポジウム
- 岸 邦宏 1998年(第57回)自由論題研究
2000年(第59回)自由論題研究
- 北久 一 1954年(第13回)研究
1955年(第14回)研究
- 城所 幸弘 1995年(第54回)自由論題研究
- 城宝 正治 1947年(第6回)研究
1953年(第12回)研究
- 木谷 直俊 1987年(第45回)自由論題研究
1996年(第55回)学会展望
- 北見 俊郎 1962年(第20回)研究(第1部)
1964年(第22回)研究(第1部)
1966年(第24回)研究(第1部)
1970年(第28回)研究(第2部)
1971年(第29回)研究(第1部)
1976年(第34回)学会展望
1981年(第39回)自由論題研究
- 木村 一裕 1987年(第45回)自由論題研究
1990年(第48回)統一論題研究
1997年(第56回)自由論題研究
- 楠木 行雄 1988年(第46回)自由論題研究
- 工藤 和馬 1958年(第17回)研究
1961年(第20回)研究
1964年(第22回)書評
1967年(第25回)研究
1975年(第33回)研究(第2部)
- 久保 威夫 1943年5月(第3回)研究
- 蔵下 勝行 1963年(第21回)研究(第1部)
1967年(第25回)書評
1970年(第28回)書評
1972年(第30回)研究(第1部)
1979年(第37回)学会展望
- 蔵園 進 1956年(第15回)研究
1957年(第16回)研究
1960年(第19回)研究(第1部)
1963年(第21回)研究(第1部)
1963年(第21回)回顧
1965年(第23回)書評
1966年(第24回)研究(第1部)
1966年(第24回)回顧

1967年(第25回)座談会
 郡 菊之助 1942年3月(第1回)研究
 小池 郁雄 1974年(第32回)研究(第2部)
 1976年(第34回)研究(第2部)
 1982年(第40回)書評
 小泉 貞三 1942年10月(第2回)研究
 1949年(第8回)研究
 1956年(第15回)シンポジウム
 1958年(第17回)研究
 1961年(第20回)研究
 1962年(第21回)研究(第2部)
 1963年(第22回)研究(第1部)
 1973年(第32回)研究(第2部)
 神頭 正俊 1998年(第57回)自由論題研究
 河野 博忠 1963年(第22回)研究(第1部)
 1969年(第28回)研究(第2部)
 1977年(第35回)統一論題研究
 1979年(第37回)統一論題研究
 1981年(第39回)自由論題研究
 1983年(第42回)自由論題研究
 1986年(第45回)統一論題研究
 国領 英雄 1981年(第39回)書評
 小島昌太郎 1942年3月(第1回)研究
 1964年(第22回)回顧
 児島 義人 1952年(第11回)研究
 小林 清晃 1968年(第26回)書評
 1989年(第47回)回顧
 小林 茂 1991年(第50回)自由論題研究
 小林 八一 1973年(第31回)研究(第2部)
 兒山 真也 1998年(第57回)自由論題研究
 近藤 勝直 1981年(第39回)自由論題研究
 1986年(第44回)自由論題研究
 1988年(第46回)書評
 1995年(第54回)統一論題研究
 近藤 淳一 1984年(第42回)自由論題研究
 今野源八郎 1947年(第6回)研究
 1949年(第8回)研究
 1955年(第14回)研究
 1957年(第16回)研究
 1960年(第19回)コメント(第1部)
 1971年(第29回)研究(第1部)
 1973年(第31回)研究(第2部)
 1975年(第33回)研究(第2部)
 1979年(第37回)回顧
 1980年(第38回)序
 1981年(第39回)序
 1982年(第40回)序
 1989年(第47回)自由論題研究
 今野 修平 1966年(第24回)資料
 1968年(第26回)研究(第2部)
 1984年(第42回)統一論題研究
 1985年(第43回)統一論題研究(III)
 1990年(第48回)統一論題研究
 1991年(第50回)自由論題研究
 今野 恵喜 1999年(第58回)自由論題研究

【さ】

齊藤 清一 1966年(第24回)資料
 齊藤 峻彦 1974年(第32回)学会展望
 1978年(第36回)統一論題研究
 1981年(第39回)自由論題研究
 1984年(第42回)統一論題研究
 1990年(第48回)書評
 1992年(第51回)統一論題研究
 1996年(第55回)統一論題研究
 齊藤 保 1955年(第14回)研究
 齊藤 實 1989年(第47回)自由論題研究
 酒井 正子 1996年(第55回)自由論題研究
 榊原 胖夫 1960年(第19回)研究(第1部)
 1962年(第20回)研究(第1部)
 1967年(第25回)研究
 1969年(第27回)研究(第1部)
 1970年(第28回)学会展望
 1972年(第30回)研究(第2部)
 1977年(第35回)一般研究
 1978年(第36回)一般研究
 1982年(第40回)統一論題研究
 1985年(第43回)統一論題研究(III)
 1998年(第57回)自由論題研究
 裕 茂樹 1989年(第47回)自由論題研究
 坂下 昇 1974年(第32回)研究(第1部)
 1986年(第44回)統一論題研究
 1993年(第52回)自由論題研究
 坂野 匡弘 2000年(第59回)自由論題研究
 崎山 一雄 1983年(第41回)統一論題研究
 佐々木公明 1996年(第55回)自由論題研究
 佐々木誠治 1955年(第14回)研究
 1964年(第22回)回顧
 定井 喜明 1980年(第38回)一般研究
 1989年(第47回)自由論題研究
 佐竹 義昌 1957年(第16回)学会展望
 1958年(第17回)研究
 1960年(第19回)コメント(第1部)
 1960年(第19回)資料
 1962年(第20回)研究(第1部)
 1963年(第21回)展望
 1964年(第22回)研究(第1部)
 1964年(第22回)書評
 1971年(第29回)研究(第1部)
 1972年(第30回)書評
 1975年(第33回)研究(第1部)
 1982年(第40回)統一論題研究
 1986年(第44回)書評
 1987年(第45回)回顧
 佐藤 金司 1980年(第38回)統一論題研究
 佐藤 馨一 1977年(第35回)統一論題研究
 1985年(第43回)統一論題研究(III)
 1987年(第45回)統一論題研究
 1987年(第45回)自由論題研究
 1991年(第50回)統一論題研究
 1992年(第51回)自由論題研究
 1997年(第56回)自由論題研究

- 1998年(第57回)自由論題研究
2000年(第59回)自由論題研究
- 佐藤 豊彦 1974年(第32回)研究(第2部)
1980年(第38回)書評
- 佐藤 治正 1983年(第41回)学会展望
- 里見昭二郎 1959年(第18回)研究(第2部)
- 佐波 宣平 1943年5月(第3回)研究
1943年10月(第4回)研究
1964年(第22回)回顧
- 沢田 清 1965年(第23回)研究(第2部)
1967年(第25回)研究
- 塩見 英治 1983年(第41回)自由論題研究
1995年(第54回)統一論題研究
1999年(第58回)回顧
- 志鎌 一之 1942年10月(第2回)研究
- 篠原 陽一 1973年(第31回)研究(第2部)
1978年(第36回)一般研究
- 柴田 悦子 1978年(第36回)統一論題研究
1982年(第40回)統一論題研究
1984年(第42回)書評
- 島田 孝一 1943年5月(第3回)研究
1957年(第16回)序
1958年(第17回)序
1959年(第18回)序
1960年(第19回)序
1961年(第20回)序
1962年(第21回)序
1963年(第22回)序
1964年(第23回)序
1965年(第24回)序
1966年(第25回)序
1967年(第26回)序
1967年(第26回)座談会
1968年(第27回)序
1969年(第28回)序
1970年(第29回)序
1971年(第30回)序
1972年(第31回)序
1973年(第32回)序
- 清水馨八郎 1954年(第13回)研究
- 清水浩士郎 1984年(第42回)自由論題研究
1985年(第43回)統一論題研究(Ⅱ)
1987年(第45回)自由論題研究
1990年(第48回)統一論題研究
1993年(第52回)統一論題研究
1997年(第56回)自由論題研究
- 清水 義汎 1953年(第12回)研究
1965年(第23回)資料
1978年(第36回)回顧
- 下条 哲司 1974年(第32回)研究(第1部)
1989年(第47回)回顧
- 庄司 邦昭 1991年(第50回)自由論題研究
- 正司 健一 1985年(第43回)学会展望
1988年(第46回)統一論題研究
1995年(第54回)統一論題研究
1998年(第57回)回顧
- 東海林 滋 2000年(第59回)自由論題研究
1956年(第15回)研究
1957年(第16回)文献紹介
1960年(第19回)紹介
1961年(第20回)研究
1963年(第21回)書評
1966年(第24回)研究(第1部)
1968年(第26回)研究(第2部)
1992年(第51回)自由論題研究
- 白山源三郎 1955年(第14回)研究
1959年(第18回)研究(第1部)
- 白神 昌也 1999年(第58回)自由論題研究
- 菅田 昭正 1988年(第46回)統一研究論題
- 菅原 操 1984年(第42回)自由論題研究
1985年(第43回)統一論題研究(Ⅱ)
- 杉山 武彦 1988年(第46回)統一論題研究
- 杉山 雅洋 1975年(第33回)学会展望
1980年(第38回)学会展望
1982年(第40回)自由論題研究
1987年(第45回)回顧
1990年(第48回)回顧
- 鈴木 啓祐 1969年(第27回)研究(第2部)
1972年(第30回)研究(第2部)
1973年(第31回)研究(第2部)
1976年(第34回)研究(第2部)
1977年(第35回)一般研究
- 鈴木 繁 1978年(第36回)回顧
- 鈴木 順一 1962年(第20回)研究(第2部)
1963年(第21回)研究(第2部)
1964年(第22回)書評
1965年(第23回)資料
1967年(第25回)研究
1972年(第30回)研究(第1部)
1973年(第31回)研究(第1部)
1978年(第36回)書評
1981年(第39回)書評
1982年(第40回)統一論題研究
1984年(第42回)統一論題研究
1986年(第44回)統一論題研究
- 鈴木 武 1993年(第52回)自由論題研究
- 須田 昌弥 1993年(第52回)自由論題研究
- 凶師 雅脩 1995年(第54回)自由論題研究
- 關(金沢)哲雄 1993年(第52回)自由論題研究
1999年(第58回)自由論題研究
- 関野 唯一 1962年(第20回)紹介

【た】

- 醍醐 昌英 1996年(第55回)自由論題研究
1999年(第58回)自由論題研究
- 高木 朗義 2000年(第59回)自由論題研究
- 高野 伸栄 1997年(第56回)自由論題研究
1998年(第57回)統一論題研究
- 高橋 愛典 1999年(第58回)自由論題研究
- 高橋 善七 1962年(第20回)研究(第2部)
- 高橋 清 1994年(第53回)自由論題研究
- 高橋 達夫 1955年(第14回)研究

高橋 望	1988年(第46回) 学会展望	1982年(第40回) 統一論題研究
	1990年(第48回) 学会展望	1992年(第51回) 統一論題研究
	1991年(第50回) 自由論題研究	田原 栄一 1964年(第22回) 研究(第1部)
	1997年(第56回) 統一論題研究	1971年(第29回) 研究(第1部)
高橋 秀雄	1948年(第7回) 研究	1984年(第42回) 統一論題研究
	1951年(第10回) 研究	1986年(第44回) 統一論題研究
	1956年(第15回) 研究	1994年(第53回) 統一論題研究
	1957年(第16回) 研究	玉村 和彦 2000年(第59回) 自由論題研究
	1960年(第19回) 研究(第1部)	田村 亨 1984年(第42回) 自由論題研究
	1960年(第19回) コメント(第1部)	1987年(第45回) 統一論題研究
	1960年(第19回) コメント(第2部)	地田 知平 1953年(第12回) 研究
	1962年(第20回) 研究(第1部)	茅野 健 1954年(第13回) 研究
	1965年(第23回) 回顧	1959年(第18回) 研究(第1部)
	1967年(第25回) 座談会	千葉 芳雄 1986年(第44回) 自由論題研究
	1969年(第27回) 研究(第2部)	1989年(第47回) 自由論題研究
	1976年(第34回) 研究(第1部)	1993年(第52回) 自由論題研究
	1982年(第40回) 回顧	中条 潮 1977年(第35回) 統一論題研究
高宮 晋	1950年(第9回) 研究	1980年(第38回) 一般研究
高村 忠也	1955年(第14回) 研究	1982年(第40回) 統一論題研究
	1957年(第16回) 研究	1983年(第41回) 学会展望
	1960年(第19回) 研究(第2部)	1987年(第45回) 統一論題研究
	1967年(第25回) 研究	1987年(第45回) 回顧
滝山 養	1959年(第18回) 研究(第1部)	1989年(第47回) 統一論題研究
竹内 健蔵	1985年(第43回) 自由論題研究	1992年(第51回) 統一論題研究
	1990年(第48回) 自由論題研究	1994年(第53回) 統一論題研究
	2000年(第59回) 自由論題研究	張 風波 1985年(第43回) 自由論題研究
武田 泉	1990年(第48回) 自由論題研究	塚原 重利 1960年(第19回) コメント(第2部)
武田 健吾	1995年(第54回) 自由論題研究	1970年(第28回) 研究(第2部)
武田 文夫	1967年(第25回) 研究	塚原俊一郎 1953年(第12回) 研究
	1970年(第28回) 研究(第1部)	津崎 武司 1970年(第28回) 研究(第1部)
	1974年(第32回) 研究(第2部)	1974年(第32回) 研究(第1部)
	1978年(第36回) 一般研究	1980年(第38回) 統一論題研究
	1980年(第38回) 統一論題研究	辻 和夫 1965年(第23回) 研究(第1部)
	1984年(第42回) 自由論題研究	辻本 勝久 1998年(第57回) 自由論題研究
	1987年(第45回) 自由論題研究	津田 弘孝 1949年(第8回) 研究
	1991年(第50回) 統一論題研究	堤 香代子 1990年(第48回) 自由論題研究
	1994年(第53回) 自由論題研究	鶴見 勝男 1956年(第15回) 研究
武知 京三	1988年(第46回) 自由論題研究	1957年(第16回) 研究
竹中 健蔵	1992年(第51回) 自由論題研究	1963年(第21回) 研究(第1部)
竹中 竜雄	1943年10月(第4回) 研究	手塚広一郎 1998年(第57回) 自由論題研究
	1948年(第7回) 研究	2000年(第59回) 自由論題研究
	1963年(第21回) 研究(第1部)	寺田 一薫 1985年(第43回) 自由論題研究
	1973年(第31回) 研究(第1部)	1992年(第51回) 自由論題研究
田中 喜一	1943年10月(第4回) 研究	1994年(第53回) 統一論題研究
	1947年(第6回) 研究	1999年(第58回) 自由論題研究
	1952年(第11回) 研究	寺田 禎之 1972年(第30回) 研究(第2部)
田中 文信	1951年(第10回) 研究	寺谷 武明 1964年(第22回) 研究(第2部)
	1953年(第12回) 研究	1967年(第25回) 研究
	1958年(第17回) 研究	土井 正幸 1986年(第44回) 自由論題研究
	1963年(第21回) 研究(第2部)	1992年(第51回) 統一論題研究
田邊 勝巳	2000年(第59回) 自由論題研究	1995年(第54回) 統一論題研究
谷利 亨	1990年(第48回) 回顧	2000年(第59回) 自由論題研究
	1991年(第50回) 自由論題研究	土居 靖範 1972年(第30回) 研究(第2部)
	1994年(第53回) 統一論題研究	1975年(第33回) 研究(第2部)
谷口 君雄	1987年(第45回) 自由論題研究	1980年(第38回) 一般研究
谷本 谷一	1968年(第26回) 研究(第2部)	陶 怡敏 1988年(第46回) 自由論題研究

1993年(第52回)自由論題研究
 1997年(第56回)自由論題研究
 徳永 健一 1962年(第20回)研究(第1部)
 富永 祐治 1942年3月(第1回)資料
 1942年10月(第2回)研究
 1943年10月(第4回)研究
 1948年(第7回)研究
 1956年(第15回)シンポジウム
 1962年(第20回)研究(第1部)
 1965年(第23回)研究(第1部)
 1980年(第38回)対談
 轟 朝幸 1996年(第55回)自由論題研究
 鳥山 正光 1987年(第45回)自由論題研究

【な】

長尾 重信 1996年(第55回)自由論題研究
 中泉 拓也 1999年(第58回)自由論題研究
 中桐 宏文 1978年(第36回)統一論題研究
 中沢 宏 1965年(第23回)研究(第1部)
 中島 勇次 1955年(第14回)研究
 1973年(第31回)研究(第1部)
 1982年(第40回)回顧
 永田 元也 1968年(第26回)研究(第2部)
 中西 健一 1959年(第18回)研究(第2部)
 1964年(第22回)研究(第1部)
 1965年(第23回)研究(第1部)
 1967年(第25回)書評
 1968年(第26回)研究(第1部)
 1976年(第34回)書評
 中西 睦 1958年(第17回)研究
 1964年(第22回)研究(第2部)
 1965年(第23回)研究(第1部)
 1970年(第28回)研究(第1部)
 中西 幸雄 1953年(第12回)研究
 1954年(第13回)研究
 長峰 太郎 1981年(第39回)自由論題研究
 中村 彰宏 1997年(第56回)自由論題研究
 中村 豊 1951年(第10回)研究
 中村 鼎 1955年(第14回)研究
 中村 清 1984年(第42回)自由論題研究
 中村 実男 1991年(第50回)自由論題研究
 中村 徹 1994年(第53回)学会展望
 1995年(第54回)自由論題研究
 1998年(第57回)自由論題研究
 中村 英夫 1966年(第24回)回顧
 中村 貢 1972年(第30回)研究(第1部)
 1980年(第38回)統一論題研究
 中山 竜次 1942年3月(第1回)研究
 新納 克広 1987年(第45回)自由論題研究
 1990年(第48回)自由論題研究
 1998年(第57回)統一論題研究
 西川 義朗 1955年(第14回)研究
 西村 徹 1996年(第55回)自由論題研究
 西村 弘 1987年(第45回)自由論題研究
 1996年(第55回)自由論題研究
 2000年(第59回)統一論題研究

日本交通学会
 事務局 1957年(第16回)学会展望
 1992年(第51回)追悼の辞
 庭田 文近 1999年(第58回)自由論題研究
 根本 敏則 2000年(第59回)統一論題研究
 野田 秋雄 1981年(第39回)自由論題研究
 野村寅三郎 1947年(第6回)研究
 1950年(第9回)研究
 1956年(第15回)シンポジウム
 野村 宏 1980年(第38回)統一論題研究
 1982年(第40回)学会展望
 1986年(第44回)統一論題研究
 1999年(第58回)回顧

【は】

橋爪 崇 2000年(第59回)自由論題研究
 羽田 昇史 1963年(第21回)資料
 1967年(第25回)研究
 1984年(第42回)自由論題研究
 梶平 徹 1984年(第42回)自由論題研究
 花岡 伸也 2000年(第59回)自由論題研究
 花房 信夫 1992年(第51回)統一論題研究
 林 克彦 1991年(第50回)自由論題研究
 林 坦 1947年(第6回)研究
 早瀬 利雄 1951年(第10回)研究
 原田 昇 1989年(第47回)書評
 坂東不二彦 1953年(第12回)研究
 姫野 侑 1977年(第35回)紹介
 1979年(第37回)統一論題研究
 1992年(第51回)自由論題研究
 1994年(第53回)自由論題研究
 平井都士夫 1961年(第20回)研究
 1965年(第23回)資料
 1969年(第27回)研究(第2部)
 1971年(第29回)研究(第1部)
 1983年(第41回)統一論題研究
 平尾 元彦 1986年(第44回)統一論題研究
 1990年(第48回)自由論題研究
 平原 直 1954年(第13回)研究
 平野 勇 1991年(第50回)自由論題研究
 平松 守彦 1990年(第48回)統一論題研究
 廣岡 治哉 1959年(第18回)研究(第2部)
 1962年(第20回)研究(第1部)
 1963年(第21回)書評
 1972年(第30回)研究(第1部)
 1977年(第35回)紹介
 1984年(第42回)統一論題研究
 1985年(第43回)統一論題研究(I)
 1988年(第46回)序
 1989年(第47回)序
 1990年(第48回)序
 1991年(第50回)序
 1992年(第21回)追悼の辞
 藤井 秀登 2000年(第59回)自由論題研究
 藤井弥太郎 1966年(第24回)研究(第2部)
 1971年(第29回)学会展望

	1974年(第32回)研究(第2部)				1958年(第17回)研究
	1978年(第36回)統一論題研究				1959年(第18回)研究(第2部)
	1979年(第37回)回顧				1961年(第20回)研究
	1981年(第39回)統一論題研究				1964年(第22回)回顧
	1986年(第44回)統一論題研究				1970年(第28回)研究(第1部)
	1990年(第48回)回顧				1979年(第37回)一般研究
	1997年(第56回)序				1989年(第47回)回顧
	1998年(第57回)序				1992年(第51回)追悼の辞
	1999年(第58回)序		牧野 隆信	1963年(第21回)資料	
二村真理子	1999年(第58回)自由論題研究		梶 幸雄	1958年(第17回)研究	
藤川 福衛	1949年(第8回)研究		真島 和男	1960年(第19回)研究(第2部)	
	1961年(第20回)研究			1965年(第23回)研究(第2部)	
	1964年(第22回)研究(第2部)			1965年(第23回)資料	
古西 信夫	1968年(第26回)研究(第2部)			1967年(第25回)研究	
細田 繁雄	1961年(第20回)研究			1983年(第41回)自由論題研究	
	1965年(第23回)学会展望			1986年(第44回)統一論題研究	
	1967年(第25回)学会展望		増井 健一	1948年(第7回)研究	
	1969年(第27回)研究(第2部)			1953年(第12回)研究	
	1974年(第32回)研究(第1部)			1955年(第14回)研究	
	1982年(第40回)自由論題研究			1960年(第19回)コメント(第1部)	
	1984年(第42回)学会展望			1960年(第19回)紹介	
細野日出男	1942年3月(第1回)研究			1963年(第21回)回顧	
	1942年10月(第2回)資料			1965年(第23回)回顧	
	1943年10月(第4回)研究			1966年(第24回)回顧	
	1949年(第8回)研究			1968年(第26回)書評	
	1951年(第10回)研究			1969年(第27回)研究(第1部)	
	1954年(第13回)研究			1971年(第29回)書評	
	1955年(第14回)研究			1972年(第30回)座談会	
	1956年(第15回)シンポジウム			1975年(第33回)研究(第1部)	
	1957年(第16回)研究			1976年(第34回)鼎談	
	1958年(第17回)文献紹介			1978年(第36回)回顧	
	1959年(第18回)研究(第1部)			1979年(第37回)回顧	
	1961年(第20回)紹介			1981年(第39回)統一論題研究	
	1962年(第20回)研究(第1部)			1982年(第40回)書評	
	1963年(第21回)資料			1983年(第41回)序	
	1965年(第23回)回顧			1984年(第42回)序	
	1966年(第24回)研究(第1部)			1985年(第43回)序	
	1967年(第25回)座談会			1986年(第44回)序	
	1970年(第28回)研究(第2部)			1987年(第45回)序	
堀 雅道	1990年(第48回)自由論題研究			1987年(第45回)会長報告	
	1993年(第52回)自由論題研究			1987年(第45回)追悼の辞	
	1996年(第55回)自由論題研究			1989年(第47回)書評	
堀 芳男	1975年(第33回)研究(第2部)		増井 幸雄	1943年10月(第4回)研究	
	1985年(第43回)統一論題研究(Ⅱ)		松井 一郎	1943年5月(第3回)研究	
ホン ジンウォン	2000年(第59回)自由論題研究		松尾 光芳	1967年(第25回)研究	
本多 繁	1973年(第31回)研究(第2部)			1983年(第41回)回顧	
	1976年(第34回)研究(第2部)			1985年(第43回)書評	
				1998年(第57回)追悼の辞	
			松澤 俊雄	1982年(第40回)自由論題研究	
				1992年(第51回)自由論題研究	
				1997年(第56回)統一論題研究	
【ま】				1975年(第33回)研究	
前田 清	1972年(第30回)書評		松下 正弘	1943年5月(第3回)研究	
前谷 清	1963年(第21回)研究(第2部)		松葉 栄重	1942年10月(第2回)研究	
	1967年(第25回)研究		松前 重義	1981年(第39回)自由論題研究	
前田 義信	1951年(第10回)研究		松村 有二	1985年(第43回)自由論題研究	
	1953年(第12回)研究				
	1955年(第14回)研究				
	1957年(第16回)文献紹介				

- 松本 一郎 1947年(第6回)研究
1948年(第7回)研究
1952年(第11回)研究
1965年(第23回)研究(第2部)
- 松本 秀賜 1998年(第57回)自由論題研究
2000年(第59回)自由論題研究
- 松山 斌 1942年10月(第2回)研究
1962年(第20回)紹介
- 丸茂 新 1964年(第22回)研究(第2部)
1966年(第24回)研究(第2部)
1979年(第37回)一般研究
1982年(第40回)自由論題研究
1986年(第44回)自由論題研究
1991年(第50回)自由論題研究
- 三上 宏美 1970年(第28回)書評
1988年(第46回)書評
1994年(第53回)書評
- 三友 仁志 1999年(第58回)統一論題研究
- 峰村 信吉 1955年(第14回)研究
- 三宅 福馬 1942年3月(第1回)研究
- 宮下 国生 1981年(第39回)学会展望
1987年(第45回)統一論題研究
1998年(第57回)回顧
- 宮嶋 勝 1988年(第46回)自由論題研究
1989年(第47回)自由論題研究
1994年(第53回)自由論題研究
2000年(第59回)自由論題研究
- 宮台 洋二 1988年(第46回)自由論題研究
- 宮野 武雄 1956年(第15回)研究
1960年(第19回)研究(第2部)
- 三輪清一郎 1943年10月(第4回)研究
1950年(第9回)研究
- 向井 梅次 1948年(第7回)研究
1951年(第10回)研究
1953年(第12回)研究
- 武藤 慎一 2000年(第59回)自由論題研究
- 村尾 質 1965年(第23回)研究(第2部)
1968年(第26回)研究(第1部)
1974年(第32回)研究(第1部)
1977年(第35回)統一論題研究
1983年(第41回)自由論題研究
1993年(第52回)自由論題研究
- 村上 英樹 1993年(第52回)自由論題研究
1995年(第54回)自由論題研究
- 本木 正直 1984年(第42回)自由論題研究
- 本山 実 1951年(第10回)研究
1953年(第13回)研究
1958年(第17回)資料
- 森 直治 1951年(第10回)研究
- 森 薫 1953年(第12回)研究
- 森田 稔 1972年(第30回)研究(第1部)
- 森地 茂 1984年(第42回)自由論題研究
1996年(第55回)自由論題研究
1998年(第57回)自由論題研究
- 八木 利真 1956年(第15回)研究
- 八雲 香俊 1954年(第13回)研究
1957年(第16回)文献紹介
1960年(第19回)資料
1963年(第21回)研究(第2部)
1965年(第23回)資料
- 矢田 誠治 1976年(第34回)研究(第2部)
- 矢野 剛 1949年(第8回)研究
- 藪谷 虎芳 1942年10月(第2回)研究
- 山内 弘隆 1983年(第41回)学会展望
1987年(第45回)統一論題研究
1989年(第47回)統一論題研究
1997年(第56回)統一論題研究
- 山県 勝見 1942年3月(第1回)研究
- 山縣 弘樹 1998年(第57回)自由論題研究
- 山形 耕一 1977年(第35回)書評
- 山岸 寛 1974年(第32回)書評
- 山口 亮 1964年(第22回)研究(第2部)
- 山下 武 1949年(第8回)研究
1954年(第13回)研究
1956年(第15回)研究
- 山上 徹 1990年(第48回)自由論題研究
- 山田 猛敏 1991年(第50回)自由論題研究
1995年(第54回)自由論題研究
- 山田 浩之 1958年(第17回)研究
1961年(第20回)研究
1963年(第21回)展望
1964年(第22回)回顧
1965年(第23回)研究(第1部)
1968年(第26回)学会展望
1976年(第34回)鼎談
1979年(第37回)一般研究
1985年(第43回)統一論題研究(I)
1989年(第47回)回顧
1991年(第50回)シンポジウム
1995年(第54回)自由論題研究
2000年(第59回)自由論題研究
- 山田 徳彦 1999年(第58回)自由論題研究
- 山根 智仁 1999年(第58回)自由論題研究
- 山野辺義方 1984年(第42回)書評
- 山村 学 1977年(第35回)一般研究
- 山本 泰督 1976年(第34回)研究(第1部)
1989年(第47回)統一論題研究
- 山本雄二郎 1989年(第47回)統一論題研究
- 湧口 清隆 1998年(第57回)自由論題研究
2000年(第59回)自由論題研究
- 横見 宗樹 2000年(第59回)自由論題研究
- 横山 哲 1997年(第56回)自由論題研究
- 横田 信夫 1953年(第12回)研究
- 吉川 貫二 1954年(第13回)研究
1956年(第15回)研究
1957年(第16回)研究
1963年(第21回)研究(第1部)
1969年(第27回)書評
1970年(第28回)研究(第2部)
1973年(第31回)書評

【や】

1974年(第32回)研究(第2部)
吉田 雅敏 1981年(第39回)自由論題研究
米田 博 1965年(第23回)研究(第1部)
1965年(第23回)研究(第2部)
1967年(第25回)研究
1970年(第28回)研究(第2部)
1992年(第51回)自由論題研究
米田富士雄 1955年(第14回)研究

【ら】

蠟山 正道 1955年(第14回)研究

【わ】

和久田康雄 1996年(第55回)自由論題研究

渡邊 篤郎 1989年(第47回)自由論題研究
渡辺 豊 1991年(第50回)自由論題研究
綿貫伸一郎 1995年(第54回)自由論題研究
和田 憲昌 1995年(第54回)自由論題研究
和平 好弘 1989年(第47回)自由論題研究
1993年(第52回)統一論題研究

【A】

E. Quinet 1991年(第51回)シンポジウム
Kang-Won-Lim 1991年(51回)シンポジウム
Killeen, B. J. 2000年(第59回)自由論題研究
W. Rothengatter 1991年(51回)シンポジウム

※ 報告内容の類型(研究、統一論題研究等)は、各年の研究報告の目次にしたがった。

(3) 研究報告会開催月日、主催校(会場)と統一論題の年次別一覧

- 第1回 1942年(昭和17)(3/28・29)神田如水会館
第2回 1942年(昭和17)(10/24・25)鉄道省
第3回 1943年(昭和18)(5/1・2)神田如水会館
第4回 1943年(昭和18)(10/16・17)神戸辰馬汽船本社
第5回 1944年(昭和19)(4月下旬・戦災のため記録焼失)
第6回 1947年(昭和22)(10/24・25)運輸省
第7回 1948年(昭和23)(10/24・25)東鉄、運輸省
第8回 1949年(昭和24)(11/18・19)国鉄本庁
第9回 1950年(昭和25)(11/17・18)国鉄本庁
第10回 1951年(昭和26)(10/30・31)国鉄本庁
第11回 1952年(昭和27)(10/28・29)明治大学
第12回 1953年(昭和28)(11/6・7)神戸大学
第13回 1954年(昭和29)(10/7・8)明治大学
第14回 1955年(昭和30)(10/12・13)早稲田大学
第15回 1956年(昭和31)(10/19・20)同志社大学
第16回 1957年(昭和32)(10/17・18)中央大学
第17回 1958年(昭和33)(10/28・29)関西大学
第18回 1959年(昭和34)(11/13・14)東京大学
統一論題「技術革新と交通経営」
第19回 1960年(昭和35)(10/6・7)明治大学
統一論題「交通における競争と独占」
第20回 1961年(昭和36)(11/16・17)大阪市立大学
統一論題「運賃理論と運賃政策」
第21回 1962年(昭和37)(10/19・20)青山学院大学
統一論題「経済成長と交通」
第22回 1963年(昭和38)(11/9・10)慶応大学
統一論題「交通における公共投資」
第23回 1964年(昭和39)(11/29・30)大分大学
統一論題「地域開発と交通」
第24回 1965年(昭和40)(10/30・31)運輸調査局
統一論題「経済計画と交通」
第25回 1966年(昭和41)(10/15・16)関西学院大学
統一論題「産業構造と交通」
第26回 1967年(昭和42)(10/28・29)中央大学
統一論題「交通経済の諸問題・一般研究」
第27回 1968年(昭和43)(10/26・27)関東学院大学
統一論題「都市交通の諸問題」
第28回 1969年(昭和44)(10/11・12)甲南大学
統一論題「交通政策の基本問題」
第29回 1970年(昭和45)(10/1・3)流通経済大学
統一論題「交通事業経営の現代的課題」
第30回 1971年(昭和46)(10/14・15)北海道大学
統一論題「総合交通政策の展望」
第31回 1972年(昭和47)(10/28・29)立正大学
統一論題「公共交通の諸問題」
第32回 1973年(昭和48)(10/26・27)神戸商科大学
統一論題「交通と環境問題」
第33回 1974年(昭和49)(10/26・27)拓殖大学
統一論題「運賃問題の再検討」
第34回 1975年(昭和50)(10/28・29)日通総合研究所
統一論題「運輸産業の課題
—現代交通政策の課題—」

- 第 35 回 1976 年(昭和 51)(10/26・27)大阪市立大学
統一論題「交通における労使関係」
- 第 36 回 1977 年(昭和 52)(10/28・29)法政大学
統一論題「地方交通の諸問題」
「交通部門における財政問題」
- 第 37 回 1978 年(昭和 53)(10/28・29)日本大学
統一論題「公共補助の経済学 ―交通における
公共補助の根拠、形態、効果等の検討―」
- 第 38 回 1979 年(昭和 54)(10/11・12)神戸大学
統一論題「都市交通の戦略」
- 第 39 回 1980 年(昭和 55)(10/11・12)学習院大学
統一論題「エネルギー問題と交通」
- 第 40 回 1981 年(昭和 56)(10/17・18)慶応大学
統一論題「総合交通政策再論
―政策と介入のあり方」
- 第 41 回 1982 年(昭和 57)(10/16・17)大阪産業大学
統一論題「国民生活と交通」
- 第 42 回 1983 年(昭和 58)(10/14・15)中央大学
統一論題「国鉄経営と交通政策」
- 第 43 回 1984 年(昭和 59)(10/20・21)成城大学
統一論題「戦後交通政策の展開」
- 第 44 回 1985 年(昭和 60)(11/ 6・ 7)京都大学
統一論題「地域交通 ―地域航空
・ 地方圏・大都市圏―」
- 第 45 回 1986 年(昭和 61)(10/23・24)運輸調査局
統一論題「鉄道再編と交通改革」
- 第 46 回 1987 年(昭和 62)(10/17・18)北海道大学
統一論題「現代交通と規制緩和」
- 第 47 回 1988 年(昭和 63)(10/15・16)近畿大学
統一論題「交通費用途運賃政策」
- 第 48 回 1989 年(平成元)(9/30・10/ 1)東京大学
統一論題「国際化時代の交通」
- 第 49 回 1990 年(平成 2)(9/29・30)大分大学
統一論題「地域交通体系と地域活性化」
- 第 50 回 1991 年(平成 3)記念大会(11/7・8・9)
一橋大学
「記念講演会」
「国際シンポジウム ―現代の交通政策―」
法政大学
統一論題「交通体系の整備と交通社会資本の充実」
- 第 51 回 1992 年(平成 4)(10/30・31)関西大学
統一論題「大都市交通の諸問題」
- 第 52 回 1993 年(平成 5)(11/12・13)立正大学
統一論題「社会環境の変化と交通のあり方」
- 第 53 回 1994 年(平成 6)(10/28・29)國學院大学
統一論題「交通における規制緩和と地方分権」
- 第 54 回 1995 年(平成 7)(11/11・12)関西学院大学
統一論題「21 世紀の交通システム」
- 第 55 回 1996 年(平成 8)(11/18・19)東京商船大学
統一論題「民営化と市場化の成果と課題」
- 第 56 回 1997 年(平成 9)(10/24・25)大東文化大学
統一論題「交通分野における規制改革のあり方」
- 第 57 回 1998 年(平成 10)(10/16・17)愛知大学
統一論題「運輸新時代における地域交通のあり方」
- 第 58 回 1999 年(平成 11)(10/29・30)早稲田大学

- 統一論題「情報通信時代の交通」
第 59 回 2000 年(平成 12)(10/14・15)明治大学
統一論題「交通政策の展開と環境制約」
第 60 回 2001 年(平成 13)記念大会(7/29・30・31)大阪市立大学
「国際シンポジウム—規制改革と交通政策— (統一論題)」

4. 日本交通学会の回顧

増井健一

この「日本交通学会の回顧」は、「日本交通学会の50年顧みる」のテーマで『日本交通学会50年の歩み』のなかに掲載されたものであります。筆者のご承諾とご好意のもとにここに転載させていただくことになりました。

あたかも太平洋戦争勃発の昭和16(1941)年12月8日に創立総会を開いて発足した東亜交通学会は、戦後の昭和21(1946)年5月、日本交通学会と改称し、それまでの財団法人格を新設の運輸調査局に譲って、任意団体として再出発した。運輸調査局には、学会の事務局の仕事が委嘱された。そこで、東亜交通学会の創設から数えると、平成3(1991)年12月で、ちょうど五十年となる。たまたま、その1か月前の11月に、東京で日本交通学会の研究報告会が開催されるので、これを機会に、五十周年記念行事が開催される。それも、東亜交通学会の第1回の研究報告会が開かれた神田の如水会館で行われることになっている。

東亜交通学会の発足の昭和16(1941)年当時、経済学関係の学会が、つぎつぎに設立される機運にあった。すでに作られていた社会政策学会、日本農業経済学会、日本経営学会、社会経済史学会、日本統計学会などに続いて、昭和15(1940)年になると、日本保険学会や日本財政学会などが出来、さらに日本経済政策学会が発足した。この日本経済政策学会は、同年秋および翌年秋の、第1回、第2回の研究報告会に際し、いずれも、その中に交通政策部会を設け、そこで、交通政策に関する報告、討論が行われた。交通学会の形成される下地が出来つつあった。

しかし、実際に、交通学会創設のために努力し、それを実現に導いたのは、当時高岡高商におられた細野日出男、東京商大出身で華北塩業株式会社に一時籍をおかれた伊坂市助、鉄道省の貨物課におられた高橋秀雄の諸氏であった。三氏は、一方で、当時の諸大学・高商の交通(経済)論研究者に呼び掛け、他方、鉄道省、逓信省にも働きかけて、「学者及び事業者相共に提携して」(交通の)「総合的・実証的研究を行ひ、その完璧を期する為」「財団法人東亜交通学会を設立」することとし(学会設立の趣旨)、まず、昭和15(1940)年12月、設立準備会を開催した。その後、これら三氏の奔走と、鉄道監察官片岡譚郎氏の大きな助力が実を結んで、上述の、東亜交通学会創立にまで漕ぎ着けることができた。まさに、時と人を得ての学会設立であった。

東亜交通学会が、鉄道大臣・逓信大臣共同出捐(それぞれ5,000円)にかかる財団法人として設立されたことにも注目されてよからう。当時、わが国では、幹線鉄道や通信(郵便・電気通信)は官業であり、海運においても国家管理への移行が目前にせまっていたし、道路交通は未熟という状態であった。そこで、東亜交通学会は、形の上では官・学の組織であったとはいえ、実質的に、官・産・学をつらねるといふ、いわば時代を先取りした研究組織という側面をもっていた。

ちなみに、設立当初の役員名簿を見ると、理事長に前鉄道次官の喜安健次郎氏、副理事長は前に逓信省航空局長官を勤められた藤原保明氏、理事は3人で、そのうち研究者を代表して早稲田大学の島田孝一氏、参与として、研究者側からは、三輪清一郎、伊坂市助、小島昌太郎、野村寅三郎、富永祐治、増井幸雄、渡辺輝一、田中喜一、細野日出男の各氏、また、評議員としても、研究者側から11人(市原章則、北村五良、金谷重義、太田黒敏男、松葉栄重、伊藤重治郎、植崎敏雄、小泉貞三、松山斌、郡菊之助、石津漣)の方々を選任されている。これらの中で、参与の、伊坂市助、富永祐治の両氏が、今日、御健在、そのほか、設立準備会への出席者では、麻生平八郎、高橋秀雄の両氏が御健在である。さらに、上述、日

本経済政策学会第1回研究報告会の交通政策部会報告者では、今野源八郎氏が元気に活躍しておられる。これらの先輩に、心から敬意を払い、いっそうの御長寿を祈るとともに、今後も、引続き、私達を御指導くださるようお願いする。

以下、東亜交通学会および日本交通学会の五十年を概観してみる。

東亜交通学会は、昭和17(1942)年3月28、29の両日、東京神田の如水会館で、第1回の研究報告会を開いた。そこでは、戦時統制下の交通についての報告が目立った。同年10月、鉄道省において第2回の研究報告会。昭和18(1943)年5月には、再び東京の如水会館で第3回。同年10月には神戸の辰馬汽船本社で、「総力戦経済と交通」を総合課題として、第4回の研究報告会が開かれた。第5回の研究報告会は、戦争が苛烈さを加えた昭和19(1944)年の4月下旬に開催されたが、この時の記録は、すべて、戦災で失われた。ただ、第1回と第2回の研究報告会の記録だけは、「東亜交通論集(1)」および「東亜交通論集(2)」として、取り纏められ、現存している。

学会が、研究者に対して、研究の調査委託などをしてきたことにも留意されてよからう。たとえば、学会が鉄道省から依頼された「交通銀行に関する研究調査」が、学会から、改めて京都帝大の小島昌太郎氏に委嘱されている(「東亜交通論集(1)」巻末、昭和十六年度事業報告)し、別に、学会から京都帝大の佐波宣平氏に「海運政策に関する理論的研究」、大阪商大の金谷重義氏に「都市交通」の研究が委嘱されている(「東亜交通論集(2)」巻末、昭和十七年度事業報告)

さて、昭和20(1945)年8月、敗戦となった。

そして、上述のように、昭和21(1946)年5月、日本交通学会への改組。

「1946年から1947年へかけての一年余は、戦後の事情が特に悪かったため、46年の秋の大会は開くことができなかった。それでもこの一年の間にも学会メンバーによる戦後交通の特殊問題研究会が五回ほど開かれている」(「1957年交通学研究」所載、「日本交通学会創立一六年の歩み」細野日出男氏記)。たとえば、当時の国鉄民間払下げ論についての討論や、国鉄の経営形態問題の検討などがそこで行われた。

1947年秋には、日本交通学会として第1回の、東亜交通学会からは通算6回目の研究報告会が、学会の主催で、運輸省において開催された。学会の正規の活動の復活である。その後、研究報告会は、しばらく、運輸省ないし国鉄の建物を借りて、毎年一回、開催されたが、1952年以降は、主として大学、研究所の回り持ち主催の形とし、それも、近年は、関東で2回続いたら、その他の所で1回という形で、行われている。その開催形式は、当初から2日間にわたるものとし、1955年以降は、うち1日を、統一課題に関するシンポジウムに宛てるのが通例となっている。

毎年の一課題を辿ってみると、学会会員の関心の所在が判る筈である。1960年代半ばまでは、経済の復興および成長基調の中における交通の技術や市場、運賃、投資が論ぜられたが、60年代後半からは、経済計画が目ざされ、経済成長とともに、産業構造、都市構造が変わる過程における交通が検討された。とくに、国鉄の近代化や採算難に衆目が集まった。1969年頃からは、総合交通政策が関心の的となり、イコール・フットイングや環境が合言葉となった。77年頃から、国鉄補助の合理性如何や、交通戦略、とくにエネルギー対策が論ぜられた。81年頃から、再び総合交通政策に、関心が集まった。国鉄の経営がいよいよ行き詰まり、その合理化策が検討される一方で、規制緩和が、国民生活、とくに地域交通に及ぼす影響が考察された。89年からは、国際的市場秩序に目が向けられるとともに、地域の活性化を促す交通に、改めて関心が寄せられている。

会員の興味は、時代とともに変わってきている。学会は、それを適切に受けとめ、統一課題に組み込むことによって、その論議が深まるように配慮しなければならない。これまで、それで成功してきているかどうか、会員の判断に待たねばならないところである。

統一課題で扱われるテーマとともに、それを解析し構築する手法も注目に値する。もともと、総合的・実証的研究をめざして設立された学会であるだけに、現実の交通動向やそれに関連する政策の解析・批判という性格の報告が多く見られることは当然であるが、交通にか

かわる経済理論的側面の研究も、最近、増えてきている。ただ、逆に、これまで展開されてきた理論の不毛性を強調して、理論への無批判的依拠を戒める報告のあることにも関心が持たれる。

学会を運営するメンバーにも変遷があった。初代会長に選出された島田孝一氏は、1973年に会長を辞されるまで、27年間にわたって、早稲田大学、流通経済大学学長という本務のかたわら、つねにおだやかに、適切に、学会の運営を主宰された。会長を譲られてからも、学会の会合にはいつも出席されて、後進の指導を続けて下さっていたが、1987年3月が圧、なくなられた。会長の任は、1973年に、明治大学学長の麻生平八郎氏に引き継がれ、さらに1979年、東京大学名誉教授の今野源八郎氏が、第3代の会長に就任された。続いて、第4代は、わたくし（増井健一）が1983年に引き受け、第5代の会長には、1987年に法政大学教授廣岡治哉氏が就任、今日に至っている。

つぎに、副会長の任に当たられたのは、まず、運輸調査局理事長の片岡譚郎氏（1966年逝去）で、同氏は、資金面での協力、研究活動の推進、会員有志を糾合しての意見発表など、身をもって当たる姿勢で、学会報告振興の実をあげられた。1959年以降は、複副会長制（関東・関西）をとり、片岡氏のほか、富永祐治、吾孫子豊（1970年逝去）、麻生平八郎、今野源八郎、前田義信、増井健一、佐竹義昌、佐々木誠治、秋山一郎、岡野行秀、山田浩之の諸氏が、つぎつぎに、その任に就かれた。

また、学会の常務運営にあたる常務理事としては、細野日出男氏（1981年逝去）が、1961年まで、事務局長を兼ねながら、まことに誠実に、綿密で行き届いた仕事をされた。労を惜しまない方であった。その後、各理事が、ローテーションでこれにあたることとなり、麻生平八郎、野村寅三郎（1985年逝去）、増井健一、蔵園進（1974年逝去）、佐々木誠治、大森一二（1979年逝去）、大島藤太郎、加地照義（1988年逝去）、今野源八郎、山口亮（1974年逝去）、前田義信、中村英男、中西健一、岡田清、廣岡治哉、秋山一郎、岡野行秀、山田浩之、藤井弥太郎、東海林滋、池田博行、杉山雅洋、雨宮義直、榊原胖夫、杉山武彦の諸氏が、つぎつぎに、その任にあたられている。

なお、1985年頃から、学会運営の活性化をはかるため、顧問制度をつくり、シニア会員の意見はそこで伺うことにするなど、種々工夫がなされたが、1989年、役員に定年制を設け、70歳を超える会員は理事・監事に選出されないこととした。

事務局長も、上述の細野日出男氏から、工藤和馬（逝去）、木俣彰（逝去）、田中清（逝去）、中村英男、鈴木順一、織田隆市という、運輸調査局勤務の諸氏が担当して下さっている。学会の繁雑な事務処理のほとんどが、これら歴代の事務局長と、それを補佐する事務局員（これまで、八雲香俊、前田信夫、松尾光芳、田村宗平、西田徳重、須田（南）淳子、織田隆市、黒沼光夫の諸氏が歴任）のお骨折りに負う。これらの方々に、何とお礼を述べたらよいのか、言葉に窮するほどの世話になった。とくに中村英男氏は、その長期間の事務局長退任後も、進んで学会事務を手伝って下さり、年報の校正などまで、同氏に負うところが非常に多い。現在の織田隆市氏も、運輸調査局退職後の今日まで、引続き、熱心に、学会の面倒を見て下さっている。

つぎに、学会は、日本学術会議とは、その1949年における創設以来、密接な関係をもっている。すなわち、その第一期会員に当学会推薦の島田孝一、片岡譚郎両氏が当選し、それ以来、高橋秀雄、細野日出男、難波田春夫（1991年逝去）、麻生平八郎、蔵園進の諸氏が、つぎつぎに当選されてきた。その後、しばらく中断の後、増井健一、それから現会長の廣岡治哉氏が学術会議の会員となり、わが国の学術進行のために、力を尽くしてきている。日本学術会議に対しては、さらに、研究連絡委員として、会員中から1名を推薦し、また、会議第3部の仕事のひとつである毎年の英文文献目録の作成にも学会として協力している。

当学会は、この間に、日本経済学会連合にも加盟（1950年）し、その評議員として、会員より2名づつを推薦、また、1977年に連合の刊行した「経済学の動向」には、会員の何人かが、交通論の項を、分担、執筆した。

1970年には、国際学術交流をめざして、西ドイツの交通学会と交流の契約を結んだ。1974

年には、同学会の年次大会を兼ねてハンブルグで開かれた国際会議に、日本学術会議より派遣のかたちで、当会員より増井健一が参加し、また、1982年、東ドイツのドレスデンで開かれた東ドイツ交通学会主催の国際会議にも、同じ形で、増井健一が参加したほか、角本良平氏が報告を行った。1977年9月には、東京で、西ドイツ交通学会のザイデンフス氏の参加を得て、日独交通政策シンポジウムを開催した。これらのほかに、外国の交通学研究者の講演会を共催したこともあり、また、最近は、中国の交通学会との交流も、進められており、1991年には、韓国交通学会との提携をとりきめた。しかし、何ととっても、今回開催される国際シンポジウムが、当学会の国際交流上の最大イベントである。

片岡譚郎氏の記念に設定されたものに、日本交通学会賞がある。1968年以降、毎年優秀な著書、論文を選んで、総会時に学会賞が授与されることとなっている。

学会は、また、有志の名をもって、「国鉄経営改善に関する意見（1）および（2）」を公にして、世論へのアピールを試み（1955年）た。1980年代に国鉄の改組が論ぜられた際にも学会有志の提言を提案される向きもあったが、結局、学会自体としては、その論議の場を設ける以上のことをしなかった。

毎年1回の大会を補うものに、部会活動がある。1954年より関東、関西両部会を設け、毎月1回を目標に研究報告会を開催している。その運営には特段の工夫が払われ、当初は、両部会とも、一般部会と海運部会に分けて開催された。それらの会合では、会員の報告とそれに基づく討論を行うほかに、随時、関係の官庁や業界の方から情報の提供を受けたり、若手会員の試論的報告にもとづく活潑な討論の場としたり、あるいはその機会にとくに理論の共同研究のための勉強会が持たれることもあった。関東部会には、かつて十河前国鉄総裁も一参加者として出席されていたということもあった。関西部会には、富永祐治氏の御助力のおかげで、都市交通研究所が事務局になって下さっている。また、1959年には西日本部会が開設され、九州における部会活動が始められたが、熱心なプロモーターであった田中喜一氏の逝去後は、残念ながら中絶している。

研究年報の刊行についても歴史がある。その発刊に関しては、1953年頃から、理事会に何度も提案されたが、財政事情のために実現せず、1957年、やっと刊行に踏み切られた。こうして、徒前の、運輸調査局発行の月刊「運輸と経済」（運輸調査月報の後身）の紙面を借りての会員の研究発表や、学会記事の掲載という変則的な形ながら、学会自身の編集にかかる年報刊行へと移行できたのである。

1959年の年報からは、毎年の統一テーマに関わる数篇の論文と、自由テーマによる数篇の論文を合わせ載せるという形をとり、現在に至っている。研究年報の縦組みが横組みに改められたのも、1959年であった。

1963年に創設された「過去1年の会員業績リスト」の欄は、その後、順調に続けられているが、その編集には、事務局の大きな支えがあることが忘れられてはならない。せっかくの成果品が、会員の研究の上に生かされる方策が、今後期待される。

ここで、学会活動を、側面から援助して下さった幾つかの団体のことについて触れたい。学会の事務局を引き受けて下さった運輸調査局の支援がなかったならば、日本交通学会の今日の姿は考えられない。片岡氏を先頭にして、調査局の方々には、物心、両面で支えられてきた。

運輸経済研究センターにも、なみなみならぬ助力を頂いている。とくに、角本良平氏は、センター理事の立場で、学会活動に絶大な協力をして下さった。「交通学説史の研究」（その1からその4まで）の刊行を実現して下さったその一事だけとってみても、私たちは、非常に大きな恩恵を受けている。ちなみに、「交通学説史の研究」は、その1982年3月の第1巻刊行から、91年3月の第4巻刊行まで、多数の会員の協力・執筆をいただき、合わせて2,200ページにも及ぼうとする大冊である。私たちの研究活動に対する最大級の贈物といえる。

さらに、つねに資料を提供して下さり、あるいは特別会員として学会に協力して下さっているJR各社、日本通運をはじめ海運、航空、鉄道、自動車、旅行業各社、高速道路調査会

や海事産業研究所などの研究所、山県記念財団、幾つかの道路公団、運輸省、建設省、郵政省、総理府などに、私たちは、感謝申し上げるとともに、引き続いての今後の御支援をお願いする。

最後に、日本交通学会会員諸氏がこれまでの学会活動の成果の上に立って、いっそうの御活躍をなされることを期待している。

5. 日本交通学会の回顧と展望

廣岡治哉

この「日本交通学会の回顧と展望」は、日本交通学会創立 50 周年を記念して、当時の会長の廣岡治哉先生氏に対してなされたインタビューの内容であります。創立 50 周年の前年にあたる 1990 年に『交通新聞』11 月 16 日号に掲載されたものです。ここに、その本文を廣岡治哉先生と交通新聞社のご承諾とご好意のもとに抜粋し転載させていただきました。

日本交通学会が来年、創立 50 周年を迎える。交通に関する学術的研究の促進と交通知識の普及、さらには交通の健全な発達に貢献することを目的に創設された、この学会は今日、名実ともに日本を代表する交通問題を扱う学会に成長し、国際的にも高い評価を受ける。その事業分野も研究会、研究報告会、講演会などの開催、雑誌、報告書、図書類の発行、研究助成など幅広い。また会員の多くが、中央官庁や地方自治体など各種の委員会に学識経験者として参画し、交通問題を中心とした政策課題に協力しているケースが目立つ。それだけ、交通問題が大きくクローズアップされてきており、この学会に寄せる内外の期待は大きいといえる。そこで、廣岡治哉会長（法政大学教授）に、この学会の現状と当面の課題、これからの進路を中心に聞いてみた。（聞き手・水野 弥彦編集局次長）

——まず、交通学会の特徴的な部分から伺いたいのですが。

廣岡 当学会は研究対象が交通経済学ということで、交通政策にかかわる理論的な研究に大きなウェイトがあるものですから、最初からアカデミックな学会として発展させたいという先輩の気持ちをこれまでも大事にしてやってきました。しかし、絶えず政策当局から当学会のメンバーに対して審議会の委員とか専門委員ということで協力を要請されることが多いのです。運輸省、国鉄、地方自治体といったところで実際の政策の研究、立案に加わっている人（研究者）が多いとみています。

ただ日本交通学会という名称からいって、交通に関する総合的な学会と受けとられることもあるわけですが、実際には英文名が The Japan Society of Transportation Economics となっていますので、交通経済学を中心とした学会なんです。もちろん学会のメンバーには、交通経済学に関心のある研究者で、実際には交通工学の専門家、研究機関はもちろん中央官庁や企業で調査研究に関心を持っている人たちなどにも学会に参加してもらっています。

——他の学会との違いは。

廣岡 経済学関係の学会としては、比較的中規模な学会で、歴史は非常に古いといえます。それは創設に努力された方々が、会員をふやすことよりも学会の質的なレベルを維持していくべきだというお考えがあったからだと私は理解しています。しかしそれは大学の先生だけで閉じ込めようということではなかったと思います。

——学風としての特徴は。

廣岡 創設当時から今日まで、アカデミズムの独立を尊重するというので、会員同士のお互いの学風や意見の相違があっても、アカデミックな活動のソサエティーとして仲よくやっていくという当学会の伝統は、これまでも保ってきています。

大きくいってマルクス経済学、現代経済学という流れがあるわけですが、現代経済学も昔はアメリカの制度派経済学の流れが強く、その影響を受けました。

アメリカの交通経済学の影響というのは、昭和30年代くらいまでが、その影響が強い時代でした。しかし、昭和40年代以降をみると、ヨーロッパ、特にイギリス、フランス、ドイツとの交流が盛んになり、比較的海外に出掛けることが自由になってきたわけです。それまでは外貨の関係からも、海外渡航には制約があったということです。

このことは学問的にも転機になり、例えばイギリスの交通経済学といいますのは、学者の数は日本と比べても多いとはいえませんが、非常に伝統があり、理論的なレベルからいって高いものがありました。もっともアメリカとイギリスといいますのは、実は、交流があって、ある意味では切り離せない関係にあり、アングロ・サクソンの交通経済学というのが、戦前から戦後にかけて一番強い影響力を持ってきたというふうに見る方が妥当かもしれません。——しかし近年は、圧倒的にヨーロッパとの交流が盛んになってきたということですか。

廣岡 その通りです。もちろん、アメリカの人も日本にやってきますが、交通経済学者としては、ヨーロッパの方がなじみが深くなったという感じがしています。

——ところで、本来、交通経済学は、どの学問的分野に属するものなのでしょう。

廣岡 実は交通経済学を専門にして大学で講義する点についていいますと、昔から商学系統で行い、大学でいえば商学部、戦前なら高等商業とか商科大学、ここでは交通経済学は重要科目に指定されていたわけです。ですから、そうした伝統を持った大学では二人とか三人とかの複数の教授がいます。が、そうでない大学では普通、交通経済学といいますのは、経済学部あるいは経済関係の学部で一人ががんばっているというところが多いわけです。

——最近では、交通工学関係の先生方の活躍が目につくようですが。

廣岡 交通工学、つまりエン지니어リングの方が確かに交通経済学に比べると、人数は多いです。社会のインフラストラクチャーとして交通施設の持つウェイトは非常に高いわけで、ご存じのように、どこの国でも交通施設の整備といいますのは国の骨格を形成するものであり、地域開発や都市計画、国土計画の全般についても交通計画は重要な地位を占めているわけです。

それには大変な土木工事、機械工事を伴っているわけですから、当然、数多くのプロフェッショナルな人材を必要とするわけです。近年、私も東南アジアとか中国、台湾に行くようになりましたが、そうした国ではこの分野のプロフェッショナルな人材が少ない。そのためにアメリカ、イギリス、フランスなどのコンサルタントに依存してきました。最近になって、ようやく日本のコンサルタントも出ていくようになりましたが、1970年代ぐらいまではアメリカの力が圧倒的だったものですから、アメリカのコンサルタントの影響力が強かったわけです。

——これまでの日本交通学会の役割と評価をどうみますか。

廣岡 戦前は交通経済学といっても鉄道中心の経済学だったといえましょうか。量的にも質的にも。ところが、1920年代以降、自動車、航空機が経済的な交通機関として登場してきます。そして1930年代以降、鉄道、自動車、航空機の間で競争と補完の関係、交通調整政策が浮上してくるわけです。

この辺の時代から、交通経済学の研究が深まってきたように思います。ただ理論的な前進ということになりますと、もちろん経済学全体の骨組みの中で起こってくるわけで、必ずしも交通の専門家だけが発展するというものではなく、絶えず理論経済学あるいは経済政策学との相互作用の中で発展してきたように思います。

当学会の存在は、大部分の会員にとって非常に大きかったと思います。もし、この学会がなければ、各大学の研究内容も分からなかったし、研究発表に接することもできなかったでしょう。現在では質的なレベルからみても、世界有数の学会に育ってきたといえます。ただ新しい理論を創造するという点に関していえば、日本の経済学会そのものが、欧米の経済学会に比べてどれだけクリエイティブかということになりますと、あまり高い評価はできない面もあります。何も交通経済学に限ったことではありませんが――。

しかし、日本経済の驚異的な成長、世界経済における日本の経済力の増大とこれを基本的に反映してきた日本の交通技術の発展も交通投資、交通施設の整備、これらにはやはり目を

見張るものがあるわけですから、外国の評価も高いんです。

——外国に比べての評価は。

廣岡 実際、東海道新幹線の成功が、非常にフランスやドイツを刺激したことは否定できません。そういう意味で、日本の交通経済学者に対する期待というものは、アメリカ、ヨーロッパでも大きくなってきているし、アジア諸国の場合にはなおさらだと思います。それだけに日本の交通学会がリーダーとしての役割を果たしてほしいという気持ちは、東南アジアの交通研究者の共通のものだと思います。

——つまり、国際舞台での活躍が望まれているということですか。

廣岡 企業の海外進出に比べて文化面での日本の交流活動というのはまだまだ手探りの状態といえます。日本の学会は学問研究の分野で主体的に国際交流を進めていく点では弱いのです。そこで当学会では、来年の50周年を契機にもっとグローバル化していく機運に盛り上げていきたいと考えています。

今日、グローバリゼーションといわれるように、日本の社会そのものが地球社会に組み込まれていくように、世界が変化していった一つの最も大きな原因が、実は“情報と交通”の技術革新なんです。

そうだとすれば、交通問題を研究しているわれわれの方がもっと国際化する必要があるということです。もちろん国際社会の一員になることによって、経済を発展させていくばかりでなく、もっと文化的にも貢献していく必要があると思っています。これによって日本の学会自身が理論的にも鍛えられますし、質的レベルも高まり日本の成果としてはね返ってくるものと考えています。

——これからの課題と抱負は。

廣岡 今後は国際的な交通経済学の世界で、日本の経済力に見合った、それだけの力量をもった学会にレベルアップさせたい。いつまでもイギリスやアメリカにオルガナイザーをゆだねるということではなく、日本もリーダー的な役割を果たすべきではないかと思っています。

6. 創立期の経過—座談会「日本交通学会の創立をめぐる」

この座談会の内容は、『1967年研究年報』に掲載されたものであります。研究者を中心に創設時を語った貴重な記録であるために、ここに掲載することにしました。

出席者 (A、B、C 順)
細野 日出男
伊坂 市助
島田 孝一
高橋 秀雄
司会 蔵園 進

司会 それでは只今から日本交通学会の設立のときのお話を、いろいろお伺いしたいと思います。設立から 26 年たちましたし、片岡さんもなくなりましたので、設立についていろいろとご尽力された先生方にお集り頂きましてその当時のことをお話し頂きたいと思います。先ず話のきっかけといたしまして、昭和 16 年に東亜交通学会が財団法人として発足したのであります。そのときのいきさつを伺いたいと思います。

細野 私は昭和 8 年から、交通学者や実務家の人たちが書いた単行本や論文を毎年集めて、その解説を「交通文献解題」として高岡高商の機関誌「研究論集」に発表していました。それを昭和 17 年度までやったんですが、そういうことで学界の人たちや、交通界でものを書いている人たちの名前を知っているということで、そうした人たちとの横の連絡がとりやすいという位置にいたわけです。

当時鉄道省の高橋さんとは昭和 8 年からの知り合いで、その高橋さんを通じて片岡さんと知り合ったんです。そのときに片岡さんが、「交通研究は、大いに実証的な研究をやってもらわないと困る。

それには実務家と官庁と学者が一体となった学会を作ることを考えようじゃないか」ということを言い出されて、昭和 15 年の夏頃だと思いますが、それで伊坂さんを引っ張り出して、学界の方をまとめるのは伊坂さんと私がやり、片岡さんは官庁側の鉄道省と逓信省に働きかけると。いうことで、学会を作るということの具体的な動きになったのは昭和 15 年の夏だったと思います。伊坂さん、その頃のご記憶はどうですか？

伊坂 まさにその通りでございます。当時、海運の方には海和会という一つのトップ・グループがございまして、そのグループは当時の日本郵船社長の太谷登さん、大阪商船社長の村田省蔵さん、三井船舶の川村貞次郎さん、この川村さんは途中で亡くなられて、代わりに向井忠晴さんになりましたが、それから国際汽船の黒川新次郎さん、この 4 人とそれから逓信省管船局長の小野猛さんと、この 5 人の方々の話し合いの会であったわけです。当時は良き時代でありまして、この 5 人の実力者によって海運に関する政策とくに、船質改善助成施設の推進成果や、海外からの共同繋船計画の誘い話などを中心に話し合っていたわけで、非常に成果をあげていたのです。

ことに当時イギリスなどは日本のやり方をまねて、スクラップ・アンド・ビルト・スキムという、古い船を壊わして新しい船を建造するという方法を追従施行するなどのこともあって、このグループの氣勢は大いに上っておりました。

その海和会に私は学界側からの専門委員ということで、お手伝い役の一人として出ておまして、上記の各社からはそれぞれ専門委員に重役・支店長級の方が出られ、逓信省側からは米田富士雄さんが出られたんです。そういうことで、下調べ役を私ども 6 人でいろいろとやり、この会は月に 1 回程度の定例会をやっていたわけです。

そこへ細野さんから海陸空運を一丸とした交通学会創立の構想について、どうだという声

がかかったので、早速これらの、巨頭連中並びに専門委員各位にお話をすると、大いにやるべきだということになりまして、細野さんに協力をすることになったわけです。私の方の海運については、あまり苦労もなく、すらすらといけたということです。

司会 海運の方はあまり官庁関係の方とは関係されなかったのですか。

伊坂 そんなことはありません。小野猛さんなんか、島田先生もよくご存知ですが、お役所の方には珍しいような、太っ腹の方でして、風格はちょっとダルマさんといったようで、片岡さんなんかとちょっと違ったタイプでした。……片岡さんは瀟洒型な紳士でしたが、小野さんは体格のいい……。

細野 当時、片岡さんは勅任監察官でしたか、監察官といえば巡回大使みたいなものですから、いろんな所に関係するわけですね。片岡さんが鉄道省側は全部引き受けて、そして逓信省側に話をつけられたわけです。当時の逓信省は郵便、電信、電話のほか、海運と航空を持っておったので、逓信省に入ってもらわないと話にならないということで、片岡さんが話をつけてくれたんです。

当時、鉄道大臣は小川郷太郎さんで、逓信大臣は村田省蔵さんで、最初の設立認可申請は、設立人が小川郷太郎、村田省蔵で、認可した人が鉄道大臣小川郷太郎、逓信大臣村田省蔵という単名手形なんですね、つまり自分たちを、自分たちで認可したということです。

この申請が5月16日で、認可が出たのが6月16日ですから、1ヵ月かかったわけです。それで財団法人東亜交通学会は資本金1万円で設立されたわけで、その1万円は鉄道大臣と逓信大臣が5000円ずつ出したんです。

司会 どうして財団法人に……。

細野 法人格を持たない任意団体では助成金が出にくいということなんです。一般の社会科学系統の学会で法人格を持っているものはほとんどなく、みんな任意団体なんです。しかも学会ならば文部大臣の管轄ですが、交通関係のものだからということで、片岡さんが鉄道大臣と逓信大臣を管轄大臣にして、鉄道省と逓信省認可の財団法人にしたわけで、文部省系の財団法人でないわけです。

島田 設立趣意書の中に「学者及び事業者相共に提携して之が総合的実証的研究を行い、その完璧を期するため、ここに東亜の交通学者及び交通事業者を打って一丸とする総合的研究機関として東亜交通学会を設立せんとする所以である」と出ていますが、まさにその通りですね。

司会 やはり研究機関というような色彩が強かったんですか。

細野 学会であって、学術的な研究をやり、それを助成し推進するんだが、要するに学者と実務と官庁というものが、三位一体的にやっっていこうじゃないかということであって、その推進者は片岡さんですね。

片岡さんという人は、なかなかあとに残るものを実にたくさん作られたんですね。鉄道弘済会もそうですし、日本通運や地下鉄営団もそうですね。

島田 営団の理事も一時やっておられたんですね。

細野 国鉄を辞められて営団の理事ですね。交通協力会も片岡さんが作られたんです。鉄道貨物協会もそうだし、あとに残っているものがたくさんありますよ。

その中で交通学会という、一番金にならないところに片岡さんは熱を入れられたわけで、片岡さんらしいことだと思うんです。カンの強い人で、よく怒鳴りつけるということをやった人ですが、実に清廉潔癖な人で、私はこの清廉なところが尊敬できるし、それで大いに協力する気になったんです。高橋さんはその片岡さんの右腕となってやられたんです。

島田 非常にいいコンビだった。

細野 片岡さんは大どころで進めて具体的な事務折衝は、高橋さんがやったわけですね。ですから事務局を作ることになって、高橋さんの所に置いたんです。運輸局の貨物課ですね。

島田 ぼくが初めて高橋さんにお目にかかったのは、当時の貨物課だったんです。当時、私は国鉄に関係はほとんどなかったんですが、高橋さんにいろいろ教えられ、指導を受けたんです。高橋さんはずっと官庁の方ですが、学者でありまして、片岡さんとのコンビもさる

ことながら、交通学会としては、出発当時の陣容としては打ってつけでなかったかと思うんです。その後に学者先生方にお加わりいただいて、最初の趣旨通りに進んでいったということは、一応言えると思いますね。

司会 その当時ですから、実証的なことをやるということは少なかったでしょうね。

細野 私が昭和8~9年頃に書いた「非常時財政と国有鉄道」という論文を片岡さんが評価してくれられ、それ以来のつきあいです。昭和10年に「鉄道旅客等級の研究」という論文を書きまして、そのときに片岡さんが、実証的な研究をやってくれということで、大いに意気投合したわけです。

この東亜交通学会も最初は日本交通学会という名称でいこうということだったんですが、満鉄の人たちから、おれたちも入れてもらうには、日本交通学会では入りにくい。それに満鉄だけでなく、華北にも華中にも鉄道やその他の交通企業があるんだということで、そこでそういう人たちが入るためには、日本交通学会よりも東亜交通学会と大きくしてくれということで、それで申請書を出すときに東亜交通学会という名前にしたわけです。

認可が出まして、いよいよ創立総会をやった日は、ちょうど太平洋戦争の始まった日であって、それでいろいろと印象深いんです。東京ステーション・ホテルの広間で、12月8日の12時から、食事をすまして議事に入るといって、その日に太平洋戦争が始まって、ハワイ大空襲ということで・ラジオや新聞の号外などで大変な騒ぎでしたよ。その日は鉄道省と逓信省の次官局長など首脳部はみな集まってくれて、学者もだいが集まってくれて、夕方の5時半までかかったんです。

司会 当時のメンバーは、どのくらいでしたか……。

細野 150~160人くらいだったですね。今のメンバーに比べると3分の2くらいだったと思います。理事長は最初は設立者が任命して、その任期が来たら、あとは理事会で選任するということになっているわけで、最初の理事は設立者が任命することから、理事長は鉄道次官であった喜安健次郎さんがなり、副理事長は逓信省航空局長官だった藤原保明さんで、常務理事は鉄道省の首席監察官と逓信省の管船局長と早稲田大学の島田さん、それから理事は東京大学の三輪さん、東京商科大学(現一橋大学)の伊坂さん、大阪商大の富永さん、神戸商大(現神戸大学)の野村さん、慶応大学の増井(幸雄)さんその他で……。

鉄道省からの常務理事は勅任監察官ということになっていますが、片岡さんが勅任監察官だったんです。その後鉄道省を辞めて営団の理事に出られたんです。創立総会は正に太平洋戦争の始まった日で、そして第1回の研究報告会が開かれたのは17年3月です。これは一つ橋の如水会館でやりました。そのあとで鉄道大臣官邸で招待晩さん会がありまして、官邸は三宅坂の所にあって、桜が満開だったという記憶が鮮かに残っております。マニラ・シンガポールの占領やジャワ海戦の勝利など、戦争も景気のいい絶頂でした。

伊坂 そのときの片岡さんについてのご記憶はありませんか。

細野 片岡さんは演説をやられたと思いますね。

司会 よく最初から機関誌をお出しになりましたね。

細野 国鉄運輸局の貨物課でもって、高橋さんが部下を使って、編集までやられたんです。役所にいると部下が使えるんですね。学校では部下なんか1人もいないんですからね。

喜安さんが18年までやられて、19年に喜安さんは一応任期が来て、代わりに三井高陽(男爵)さんを引っぱり出したんです。これは片岡さんが引っぱり出されたんです。そして定款を変更して、理事長を会長という名前にしまして、三井さんが会長で、片岡さんが副会長ということで……。

司会 片岡さんはずっと副会長で？

細野 そうですね。それで戦争が激化をして、報告も4回までやったと思います。報告書を出したのは2回までで、3回、4回は目黒の事務所が焼けてしまって記録がないんです。

司会 事務所は目黒の？

細野 国鉄調査課(高橋さんが課長)の目黒分室だったんです。私は高岡高等商業学校を辞めて、国鉄の常勤嘱託になっておったんです。片岡さんが国鉄にこいということだった

んです。

私が常務理事で事務局長になったのは19年3月で、そして終戦を迎えたわけですが、そのときに片岡さんが、こんな戦争に負けるというのは、平素の調査研究が足りないからだ。鉄道省には技術研究所が官制を別にこしらえて出来ているのに、経済系統のものは各局でやっていて、その場限りの調査しかやらない。こういうことではいけない。鉄道経済研究所を作るべきだということを言い出されて、国鉄当局にだいぶ働きかけられたんです。それで私も鉄道経済研究所という官制案みたいなものもこしらえたんですが、敗戦直後の非常に困難なときで官制改正しても予算を取ることはとてもできないということから、それでは一つ学会を調査研究機関に改組をしようということで、東亜交通学会の財団法人格をもらって、運輸調査局に改名するという手続きをとったんです。

そのときに逓信省と縁が切れるということになったんですが、これについて片岡さんが逓信省の了解を取りつけるということをして、また学会のメンバーは敗戦後の混乱のときですから、なかなか集まらないので、常時集まっているメンバーだけに了解を得るということにしたんです。

敗戦直後に国鉄の民営払い下げという運動が関西で起ったんです。その頃民間の企業は大半半潰れで禄に仕事が無くなってしまったのに、鉄道だけは毎日動いていたので、鉄道を民営に払い下げてもらって、民間企業として運営をしたいという運動を、マッカーサーの副司令だったアイケルバーガー中將を知っている人が関西において、そうした運動を始めたんです。アイケルバーガーとしては、アメリカの鉄道は全部民営ですから、民営にするということは至極賛成しそうなことです。

そこで国鉄側としては、そんなことが実現されては大変だということで、猛反対運動をやったわけです。そして学会のメンバーにも働きかけて、集められるだけの人を集めて、なんべんも会合を開いて、その対策について研究会をやったんです。そして片岡さんといっしょに、関西でそういうことを主張している実業家達と一つ討論会をやるということで、大阪に出かけたんです。20年の12月頃だったでしょう。

当時の大阪鉄道局長は今の佐藤総理大臣でしたが、関西で民営払い下げ運動をやっているのは関西財界の大立物で、商工会議所の主役をやったりした大阪（鉄工所）の飯島幡司氏がその推進役をやっておられたのですが、その一党が出て来まして、大阪鉄道局の会議室で小島昌太郎さんの司会で討論をやったんです。

民営払い下げ論の根拠は何かというと表面の根拠は、第一次大戦でドイツが負けたときに、ドイツの鉄道は賠償に取られた。あれとおなじように、日本も国有鉄道が当然賠償の主対象になるだろう。そして国有鉄道のままだと安く値踏みされるだろうが、民営にして置けば高く値踏みしてもらえるとということなんです。

その根拠に対してこちらの反論は、そんなバカなことではない。日本の鉄道を高く評価して賠償として取ってもらうことは、賠償金の金額はこれだけだと決まっています、その中で鉄道を高く評価してもらうのは、それだけほかのものが助かるということには違いないけれども、日本の鉄道を取っても、向うに持っていかれるものではない。日本国民が使ってその運賃の上りから賠償を払うということだ。

そういう意味では高く取られるということは、国民が高い運賃を払うということで、国家に取つてもちっとも利益にはならない。高く評価されることはかえって不利だし、そういう考え方はナンセンスである、ということをやったら、片岡さんもそうだというんです。佐藤大阪鉄道局長は笑って聞いていましたが、飯島さんも困っちゃったんですね。それで八つ当りに怒り出して、大体、会場は鉄道の会場じゃないか、それに出してくれたウドンが国鉄のおしきせだろう。こんなものは食わんなどと、小児病的なことを言い出したりしてお開きでした。片岡さんが、この討論は勝った。これで民営論の息の根を止めたな、ということで、それで国鉄の民営払い下げ論は表面ざたにならないですんだわけです。

学会を改組して、学会は任意団体として残す。東亜交通学会は財団法人運輸調査局という名前を変えて、国鉄の経済調査機関とする。学会は任意団体として日本交通学会として再発

足し、運輸調査局はその事務局を引受け、大いに協力するという事で了解がついて、学会は財団法人格を譲り渡すことを了承したのです。

そのスタートは5月14日になっておりますけれども、事実上は4月1日から出発したわけです。そのときから任意団体として交通学会はスタートすることになって、島田先生が会長で、片岡さんは財団法人運輸調査局の理事長で学会の方の副会長になったのです。

その学会の会長選任の会議（21年6月）の終り頃に島田先生が、きようはこれから早稲田大学の総長の選挙があるからと席をお立ちになったんですが、選挙の結果、島田先生が総長になられたということで、それで非常に印象が深いんです。

島田 あのとときはびっくりしたんですね。私は津田左右吉先生を推していたので、私自身のことなどは考えてなかったんですからね。

司会 一番最初に日本交通学会ができたときは、何人ぐらいですか。

細野 200人ぐらいだったと思いますが、国鉄と業界の人が多かったですね。学者は少なかったと思います。

細野 今でも大した数じゃないでしょう。学校のメンバーは50~60人でしょう。東亜交通学会というものを改めて、国鉄の研究機関という一つのものにするとときに、逓信省の方からいろいろ出るかも知れないということであつたんですが、そのところは片岡さんが折衝をして、逓信省の了解をとりつけたんですね。

司会 伊坂先生、さきほどの海和会の発端は？

伊坂 当時、日本船主協会が神戸にありまして、監督官庁であつた逓信省との距離は遠かったんですね。そのうちに支那事変が拡大されるにつれて、海運の方も行政面でいやが応でも政府と接近せざるを得ないようになって……。

細野 戦時統制が強化されましたからね。

伊坂 それで船会社の中枢も次第に東京に移っちゃつたんです。そしてこの巨頭の方々の間の話し合いの機会も多くなっていったわけです。

ときたまには各社間の商戦上の仲々おもしろいお話も起りましたが、この巨頭会談の考え方が中心になつて、当時の日本の海運政策の基調が動いておつたということです。

司会 東亜交通学会から別れるとき、海運の方は……。

伊坂 その当時私は日本にいなかったんです。天津・北京に行つておつたんです。

司会 海運界の方は別に改組については……。

細野 なんにもしなかったんですね。伊坂さんがいなかったせいもありますが、海事振興会にまかせるといふことで。

伊坂 最初は5社がいっしょに参加しようということになっておりましたが、途中から海事振興会というものができて、一手にその方でやるということになったと記憶しています。

細野 民間の満鉄と日本通運が一番大口のメンバーで、鉄道・逓信両省は毎年3000円、満鉄と日通が2000円出すということで、日通が2000円出すのは片岡さんが日通の久保田社長（前鉄道次官）に話してやってくれたんです。満鉄も非常に熱心だったんですね。

伊坂 細野さんにハッパをかけられて、鉄道側はこういうことだ、だから海運の方もぜひ頑張って了解をとれたと言われましてね。

細会 島田先生、学界の方はどうでしたか……。

島田 数の上では少なかったと思いますが、とにかく関東、関西の主なる大学の先生方は最初からメンバーになってくださったんです。交通理論関係の先生方は、ほとんど賛成をしていただいて、今日を迎えていると思いますね。

司会 学会ができるということは、学者にとって非常に結構なことですからね。

細野 創立総会ときは、関西からも全部出たんです。

司会 戦後、日本交通学会が財団法人格を譲って別にスタートするときには、別に大して……。

島田 ほとんどトラブルはなかったですね。

細野 戦後しばらくの間は名簿も住所も碌にわからなくなった時代ですから、始終連絡のとれている人たちにだけ集まってもらって、国鉄民営払い下げ問題や、国鉄経営形態の研究などをやりましたが、大会を開いて報告するようになったのは22年10月第6回からで3年半あきましたね。

司会 敗戦直後、海運の方は大変な激動期でしたが、海運の方はどうでしたか。

細野 船を無くしたんですからね。

伊坂 全く船がなくなってしまったんですからね。小さな船で沿岸漁業をやったり、石炭を運んだりしたんです。私その頃引揚げて来て、片岡さんや高橋（秀雄）さんに連れられて、上野のお料理屋の二階でご慰労をうけたんです。そのとき海運界の方にはそういう余裕はとてなかつたんですね。鉄道側のおかげで温かく迎えていただいて、本当に嬉しかった思い出があるんです。海が陸に慰められたということ。

細野 海事振興会の方もすっかり縮小したんですからね。

伊坂 学会は学者側の先生方がおおいに協力になり、ことにリーダーには島田先生がなってくださいまして、また、細野さんが終始一貫、世話をしてくられたということで、さらにまた、一方で鉄道関係からは片岡さん、高橋さんが熱意をもって面倒を見てくれたということがありまして、この三拍子のどれが欠けても、こんなに盛んな学会には盛り上り得なかつたと思います。

司会 片岡さんが交通学会のために、いろいろお世話をしてくださったそうですが、そのことについて一つ……。

細野 有形無形いろいろお世話をしてくださったわけで、陸運関係の特別会員の加入や、会費増額のことや、費用にしても事務局の維持から機関誌まで面倒を見てくれたのです。ことに大きいのは研究者の養成ということで、そうした人が50人近くいますよ。

島田 今後も出てくると思いますね。

細野 片岡さんが、おれのところ（運輸調査局）は大学教授の養成機関みたいだとよくいわれたんですが、その功績は大きいですね。

島田 二つあるんですね。その一つは事務局を引受けてもらったということで、今もってやっつけてくださっているわけで、それがなかったら、この貧乏世帯は持ちこたえられなかつたと思うんです。それともう一つは、人材の養成ですね。片岡さんの監督下においてそれがされて、各大学は非常に大きな恩恵を受けていると思います。交通専攻の人は非常に少ないんですからね。これは外国でもそうですが、運輸調査局と密接な関連のもとに、そうした恩恵を蒙っているということで、各大学は非常にありがたいと思います。

司会 そういう意味で、片岡さんの功績は多面的なものがあるということですね。

島田 それを忘れてはいけません。

伊坂 ことに片岡さんのお人柄ですね。実に瀟洒で、すっきりとして、情味に厚い、そうした片岡さんに接し得たということ、とてもうれしく思っております。

高橋 交通学会として、この頃シンポジウムのテーマを前年度の役員会や総会できめられていますが、交通学会創立後数年間は長期計画とまではいかななくても次の年次大会に研究報告すべきテーマのバランスと時局の要請などを考えて総会、に当る関係者の会合のときに予めテーマと報告者を決めておくという方法が採られましたので、報告会も年次の発行も円滑に軌道に乗ったのではないかと思います。なおテーマについても交通理論と実務との関連について特に意が用いられたのであり、これらの関係でも片岡さんの功績は大きかったのではないかと思います。（紙上参加）

司会 時間がまいりましたのでこれで終らせて頂きます。本日はどうもありがとうございました。

7. 資料

(1) 「日本交通学会創立 16 年の歩み—研究報告大会の記録—」

日本交通学会事務局

わが学会は思い出も特に深い太平洋戦争勃発の日、1941 年（昭和 16 年）12 月 8 日に、ハワイ大空襲の捷報をききながら創立総会を開き、鉄道省、逓信省の共同出資による財団法人東亜交通学会としてスタートした。

第 1 回の研究報告（大会）は学会主催（以後第 10 回までは常にこの形式）で東京、神田如水会館において 1942 年 3 月 28、29 日に開かれた。当初は、春秋年 2 回の大会主義であったが、1944 年春の第 5 回までで、戦争激化のため開催できなくなり、遂に 1945 年春の空襲で学会事務局も罹災焼失して了った。また、機関紙「東亜交通論集」も 1 輯は厚いものを早期に出せたが、2 輯（1942 年秋第 2 回大会の分）は印刷事情悪化のため、1944 年夏になってやっと発刊できた。第 3 回～第 5 回大会の分は原稿が印刷所で焼失したり、記録が事務局で焼失したりして、惨澹たる状態のまま終戦となったのである。

しかし、終戦直後 9 月初め、直ちに戦後復興的交通研究活動に入ったことは恐らく他のどの学会よりも早かったと自負してよいであろう。すなわち、極度の悪条件の中から「戦後処理対策資料：という書物（パンフレット以上のものである）を第 6 輯まで出版した。その中には第一大戦戦後処理としての独乙のドーズ案賠償（鉄道）を扱ったものもあるし、また敗戦直後燃え上がった国鉄民営払下問題を研究し反論した「国家復興における鉄道事業の経営形態」も入っている。後者のためには本学会有力メンバーは随分度々研究会を開き、大阪へも出かけた程であった。この書物の中には国鉄今日の企業主体機関である公共企業体構想も入っているし、監査委員会的構想も盛られているのである。

しかし、運輸省国鉄は、開戦と敗戦の原因がわが国の調査研究機関不備の積弊にあることを痛感し、新たに専属的鉄道経済研究機関を設置することを決意し、これを諸君の都合上民間機関とする方針をとったが、当時の事情上、本学会の財団法人格をこの機関に譲ることとなり、ここに財団法人運輸調査局が誕生したのである。

一方、東亜交通学会は、財団法人格を譲って一般経済系学会同様任意団体となり、その名も「日本交通学会」と改めて新発足をしたのである。こういう事情にあるから、財団法人運輸調査局と当日本交通学会とは特別に深い関係に在り、学会事務局も同局に置かれ、人的物的財的に諸種の便宜と援助が与えられることとなったのである。このことは当時の主な関係者と会員とはよく諒解されているが、その後の会員諸氏や外部の方々にはよく判っていないことであるから、ここにお知らせをして置く次第である。

1946 年（昭和 21 年）から 47 年へかけての 1 年余は戦後の事情が殊に悪かったため、46 年の秋の大会は開くことができなかつたけれども、それでもこの 1 年半の間にも学会メンバーによる戦後交通の特殊問題研究会が 5 回程開かれている。かくして 1947 年秋に 3 年半振り研究報告会（第 7 回大会）が復活され、爾来毎年秋に 1 回の大会が持たれ、回をおって盛大に赴きつつあるのである。研究機関誌も、戦後の悪条件により特別会員の減少あるいは特別会費のインフレ的相対低下により単行機関誌の発行が不能となったために、運輸調査局の機関誌、月刊「運輸調査局月報」、後に改名した「運輸と経済」と当学会の代行機関誌として今日に至っているのである。代行ではあるが、月刊の機関誌を持っていることは学会として誠に幸なことである。

ここに当学会独自の機関誌「交通学会研究—研究年報」刊行の喜びを迎えるに当たり、当学会の第 1～15 回の大会報告の要目を取纏め記録し、わが国交通学会 16 年の歩みを省みる

のも意義あることであろう。

ここに、改めて多年の熱意と厚意を寄せられている正会員諸君と、多年にわたり多大の財物的精神的援助を惜しまれない特別会員である諸官公庁、公社、会社等に深甚の謝意を表したい。

事務局、年報編集委員長
細野 日出男

(2) 日本交通学会役員名簿

(1961年-2001年)

1961年秋～1963年秋

会 長 島田 孝一 (早稲田大学)
副会長 (関東) 片岡 譔郎 (運輸調査局)
(関西) 富永 祐治 (大阪市立大学)
常務理事 (関東) 麻生平八郎 (明治大学)
増井 健一 (慶応義塾大学)
(関西) 野村寅三郎 (神戸大学)
理 事 (関東) 細野日出男 (中央大学)
伊坂 市助 (関東学院大学)
今野源八郎 (東京大学)
蔵園 進 (武蔵大学)
大森 一二 (青山学院大学)
大島藤太郎 (中央大学)
高橋 秀雄 (早稲田大学)
工藤 和馬 (運輸調査局)
理 事 (事務局長)
理 事 (関西) 前田 義信 (甲南大学)
岡庭 博 (三光汽船)
佐波 宣平 (京都大学)
佐々木誠司 (神戸大学)
吉川 貫二 (同志社大学)
理 事 田中 喜一 (大分大学)
(西日本)

1963年秋～1965年秋

会 長 島田 孝一 (早稲田大学)
副会長 (関東) 吾孫子 豊 (運輸調査局)
(関西) 富永 祐次 (大阪市立大学)
常務理事 (関東) 麻生平八郎 (明治大学)
蔵園 進 (武蔵大学)
(関西) 佐々木誠司 (神戸大学)
理 事 (関東) 細野日出男 (中央大学)
今野源八郎 (東京大学)
増井 健一 (慶応義塾大学)
大森 一二 (青山学院大学)
大島藤太郎 (中央大学)
高橋 秀雄 (早稲田大学)
水俣 彰一 (運輸調査局)
理 事 (関西) 野村寅三郎 (神戸大学)
佐波 宣平 (京都大学)
前田 義信 (甲南大学)
吉川 貫二 (同志社大学)
岡庭 博 (三光汽船)
加地 照義 (神戸商科大分大学)

1965年秋～1967年秋

会 長 島田 孝一 (流通経済大学)
副会長 (関東) 吾孫子 豊 (運輸調査局)
(関西) 富永 祐治 (大阪経済大学)
常務理事 (関東) 麻生平八郎 (明治大学)
蔵園 進 (武蔵大学)
(関西) 佐々木誠治 (神戸大学)
理 事 (関東) 細野日出男 (中央大学)
高橋 秀雄 (早稲田大学)
今野源八郎 (東京大学)

工藤 和馬 (運輸調査局)
大森 一二 (青山学院大学)
増井 健一 (慶応義塾大学)
大島藤太郎 (中央大学)
八雲 香俊 (運輸調査局)
理 事 (関西) 野村寅三郎 (名古屋学院大学)
佐波 宣平 (京都大学)
前田 義信 (甲南大学)
吉川 貫二 (同志社大学)
岡庭 博 (三光汽船)
加地 照義 (神戸商科大学)

1967年秋～1969年秋

会 長 島田 孝一 (流通経済大学)
副会長 (関東) 吾孫子 豊 (運輸調査局)
(関西) 富永 祐治 (大阪経済大学)
常務理事 (関東) 大森 一二 (青山学院大学)
大島藤太郎 (中央大学)
(関西) 加地 照義 (神戸商科大学)
理 事 (関東) 今野日出男 (中央大学)
高橋 秀雄 (流通経済大学)
麻生平八郎 (明治大学)
今野源八郎 (早稲田大学)
工藤 和馬 (流通経済大学)
増井 健一 (慶応義塾大学)
蔵園 進 (武蔵大学)
八雲 香俊 (運輸調査局)
伊坂 市助 (関東学院大学)
小川 博三 (北海道大学)
理 事 野村寅三郎 (名古屋学院大学)
(西日本)
吉川 貫二 (同志社大学)
佐々木誠治 (神戸大学)
前田 義信 (甲南大学)
岡庭 博 (三光汽船)
西原 峯次郎 (九州産業大学)

1969年秋～1971年秋

会 長 島田 孝一 (流通経済大学)
副会長 (関東) 吾孫子 豊 (運輸調査局)
(関西) 富永 祐治 (大阪経済大学)
常務理事 (関東) 今野源八郎 (早稲田大学)
山口 亮 (運輸調査局)
(関西) 前田 義信 (甲南大学)
理 事 (関東) 麻生平八郎 (明治大学)
細野日出男 (中央大学)
伊坂 市助 (関東学院大学)
工藤 和馬 (流通経済大学)
蔵園 進 (武蔵大学)
増井 健一 (慶応義塾大学)
大森 一二 (青山学院大学)
大島藤太郎 (東洋大学)
小川 博三 (北海道大学)
理 事 (関西) 野村寅三郎 (名古屋学院大学)
吉川 貫二 (同志社大学)
佐々木誠治 (神戸大学)
加地 照義 (神戸商科大学)

岡庭 進 (三光汽船)
中西 健一 (大阪市立大学)
西原 峯次郎 (九州産業大学)

1971 年秋～1973 年秋

会 長 島田 孝一 (流通経済大学)
副会長 (関東) 麻生平八郎 (明治大学)
(関西) 富永 祐治 (大阪市立大学)
常務理事 (関東) 蔵園 進 (武蔵大学)
中村 英男 (運輸調査局)
(事務局長)
(関西) 前田 義信 (甲南大学)
理 事 (関西) 伊坂 市助 (関東学院大学)
小川 博三 (北海道大学)
大島 藤太郎 (東洋大学)
大森 一二 (青山学院大学)
工藤 和馬 (流通経済大学)
今野 源八郎 (早稲田大学)
高橋 秀雄 (流通経済大学)
廣岡 治哉 (法政大学)
細野 日出男 (中央大学)
増井 健一 (慶應義塾大学)
山口 亮 (運輸調査局)
理 事 (関西) 岡庭 博 (三光汽船)
加地 照義 (神戸商科大学)
佐々木 誠治 (神戸大学)
中西 健一 (大阪市立大学)
西原 峯次郎 (九州産業大学)
野村 寅三郎 (名古屋学院大学)
吉川 貫二 (京都学院大学)

1973 年秋～1975 年秋

会 長 麻生平八郎 (明治大学)
副会長 (関東) 今野 源八郎 (早稲田大学)
(関西) 前田 義信 (甲南大学)
常務理事 (関東) 蔵園 進 (武蔵大学)
中村 英男 (運輸調査局)
(事務局長)
(関西) 中西 健一 (大阪市立大学)
理 事 (関東) 伊坂 市助 (関東学院大学)
小川 博三 (北海道大学)
大島 藤太郎 (東洋大学)
岡田 清 (成城大学)
島田 孝一 (流通経済大学)
高橋 秀雄 (流通経済大学)
廣岡 治哉 (法政大学)
細野 日出男 (亜細亜大学)
増井 健一 (慶應義塾大学)
本山 実 (拓殖大学)
山内 公猷 (運輸調査局)
理 事 (関西) 岡庭 博 (三光汽船)
佐々木 誠治 (神戸大学)
田原 栄一 (大分大学)
富永 祐治 (大阪市立大学)
野村 寅三郎 (名古屋学院大学)
平井 都士夫 (大阪市立大学)
山田 浩之 (京都大学)

1977 年秋～1979 年秋

会 長 麻生平八郎 (明治大学)
副会長 (関東) 今野 源八郎 (早稲田大学)
(関西) 前田 義信 (甲南大学)
常務理事 (関東) 岡田 清 (成城大学)
廣岡 治哉 (法政大学)
(関西) 山田 浩之 (京都大学)
理 事 (名簿発行されず、資料欠如のため不詳)

1979 年秋～1981 年秋

会 長 今野 源八郎 (東海大学)
副会長 (関東) 増井 健一 (慶應義塾大学)
(関西) 前田 義信 (甲南大学)
常務理事 (関東) 岡野 行秀 (東京大学)
廣岡 治哉 (法政大学)
(関西) 山田 浩之 (京都大学)
理 事 (関東) 麻生平八郎 (明治大学)
井上 邦之 (運輸調査局)
大島 藤太郎 (東洋大学)
岡田 清 (成城大学)
角本 良平 (早稲田大学)
佐竹 義昌 (学習院大学)
高橋 秀雄
中西 睦 (早稲田大学)
中村 英男 (運輸調査局)
(事務局長)
細野 日出男 (亜細亜大学)
理 事 (関西) 秋山 一郎 (神戸大学)
佐々木 誠治 (神戸大学)
東海林 滋 (関西大学)
田原 栄一 (大分大学)
富永 祐治 (大阪市立大学)
中西 健一 (大阪市立大学)
平井 都士夫 (大阪市立大学)

1981 年秋～1983 年秋

会 長 今野 源八郎 (東海大学)
副会長 (関東) 増井 健一 (慶應義塾大学)
(関西) 佐々木 誠治 (神戸大学)
常務理事 (関東) 岡野 行秀 (東京大学)
藤井 弥太郎 (慶應義塾大学)
(関西) 東海林 滋 (関西大学)
理 事 (関東) 麻生平八郎 (明治大学)
五十嵐 日出夫 (北海道大学)
石川 達二郎 (運輸調査局)
大島 藤太郎 (東洋大学)
岡田 清 (成城大学)
角本 良平 (早稲田大学)
佐竹 義昌 (学習院大学)
高橋 秀雄 (東京交通短期大学)
中村 英男
廣岡 治哉 (法政大学)
理 事 (関西) 秋山 一郎 (神戸大学)
宇野 耕治 (大阪産業大学)
岡庭 博 (三光汽船)
田原 栄一 (大分大学)
富永 祐治 (大阪市立大学)
中西 健一 (大阪市立大学)
前田 義信 (甲南大学)
山田 浩之 (京都大学)
監 事 (関東) 大島 国雄 (青山学院大学)

(関西) 榊原 胖夫 (同志社大学)

1983 年秋～1985 年秋

会 長 増井 健一 (松坂大学)
 副会長 (関東) 佐竹 義昌 (学習院大学)
 (関西) 秋山 一郎 (神戸大学)
 常務理事 (関東) 藤井 弥太郎 (慶應義塾大学)
 池田 博行 (専修大学)
 (関西) 東海林 滋 (関西大学)
 理 事 (関東) 麻生 平八郎 (明治大学)
 五十嵐 日出夫 (北海道大学)
 太田 恒武 (運輸調査局)
 大島 藤太郎 (東洋大学)
 岡田 清 (成城大学)
 岡野 行秀 (東京大学)
 角本 良平 (運輸経済研究センター)
 今野 源八郎 (道路経済研究所)
 鶴見 勝男 (中央大学)
 中村 英男
 廣岡 治哉 (法政大学)
 理 事 (関西) 榊原 胖夫 (同志社大学)
 佐々木 誠治 (大阪産業大学)
 田原 栄一 (大分大学)
 富永 祐治 (大阪市立大学)
 中西 健一 (大阪市立大学)
 前田 義信 (松坂大学)
 平井 都士夫 (名城大学)
 山田 浩之 (京都大学)
 監 事 (関東) 大島 国雄 (青山学院大学)
 (関西) 崎山 一雄 (大阪産業大学)

1985 年秋～1987 年秋

会 長 横井 健一 (松坂大学)
 副会長 (関東) 佐竹 義信 (学習院大学)
 (関西) 秋山 一郎 (神戸大学)
 常務理事 (関東) 池田 博行 (専修大学)
 杉山 雅洋 (早稲田大学)
 (関西) 山田 浩之 (京都大学)
 理 事 (関東) 麻生 平八郎 (明治大学)
 五十嵐 日出夫 (北海道大学)
 太田 恒武 (運輸調査局)
 大島 藤太郎 (東洋大学)
 岡田 清 (成城大学)
 岡野 行秀 (東京大学)
 角本 良平 (早稲田大学)
 清水 義汎 (明治大学)
 中村 英男
 廣岡 治哉 (法政大学)
 藤井 弥太郎 (慶應義塾大学)
 理 事 (関西) 斎藤 峻彦 (近畿大学)
 榊原 胖夫 (同志社大学)
 佐々木 誠治 (大阪産業大学)
 東海林 滋 (関西大学)
 田原 栄一 (大分大学)
 中西 健一 (大阪市立大学)
 前田 義信 (松坂大学)
 平井 都士夫 (名城大学)
 監 事 (関東) 大島 国雄 (青山学院大学)
 (関西) 宇野 耕治 (大阪産業大学)

1987 年秋～1989 年秋

会 長 廣岡 治哉 (法政大学)
 副会長 (関東) 岡野 行秀 (東京大学)
 (関西) 山田 浩之 (京都大学)
 常務理事 (関東) 雨宮 義直 (国学院大学)
 杉山 雅洋 (早稲田大学)
 (関西) 榊原 胖夫 (同志社大学)
 理 事 (関東) 麻生 平八郎 (明治大学)
 五十嵐 日出夫 (北海道大学)
 池田 博行 (専修大学)
 太田 恒武 (運輸調査局)
 大島 藤太郎 (東洋大学)
 岡田 清 (成城大学)
 角本 良平 (運輸経済研究センター)
 佐竹 義昌 (学習院大学)
 藤井 弥太郎 (慶應義塾大学)
 増井 健一 (松坂大学)
 理 事 (関西) 秋山 一郎 (神戸大学)
 斎藤 峻彦 (近畿大学)
 佐々木 誠治 (大阪産業大学)
 柴田 悦子 (大阪市立大学)
 東海林 滋 (関西大学)
 田原 栄一 (大分大学)
 中西 健一 (大阪市立大学)
 前田 義信 (松坂大学)
 平井 都士夫 (名城大学)
 監 事 (関東) 大島 国雄 (青山学院大学)
 (関西) 宇野 耕治 (大阪産業大学)
 事務局長 織田 隆市 (運輸調査局)

1989 年秋～1991 年秋

会 長 廣岡 治哉 (法政大学)
 副会長 (関東) 岡野 行秀 (東京大学)
 (関西) 山田 浩之 (創価大学)
 常務理事 (関東) 雨宮 義直 (国学院大学)
 杉山 武彦 (一橋大学)
 (関西) 榊原 胖夫 (同志社大学)
 理 事 (関東) 五十嵐 日出夫 (北海道大学)
 太田 恒武 (運輸調査局)
 岡田 清 (成城大学)
 角本 良平 (運輸経済研究センター)
 杉山 雅洋 (早稲田大学)
 武田 文夫 (帝京技術科学大学)
 中条 潮 (慶應義塾大学)
 野村 宏 (日通総合研究所)
 藤井 弥太郎 (慶應義塾大学)
 理 事 (関西) 秋山 一郎 (流通科学大学)
 斎藤 峻彦 (近畿大学)
 柴田 悦子 (大阪市立大学)
 東海林 滋 (関西大学)
 田原 栄一 (大分大学)
 中西 健一 (大阪市立大学)
 平井 都士夫 (名城大学)
 宮下 國生 (神戸大学)
 監 事 (関東) 大島 国雄 (青山学院大学)
 (関西) 宇野 耕治 (大阪産業大学)
 事務局長 織田 隆市 (運輸調査局)

1991 年秋～1993 年秋

会 長 岡野 行秀 (創価大学)

副会長 (関東) 藤井 弥太郎 (慶応義塾大学)
 (関西) 榊原 胖夫 (同志社大学)
 常務理事 (関東) 杉山 武彦 (一橋大学)
 野村 広 (奈良県立商科大学)
 (関西) 斎藤 峻彦 (近畿大学)
 理事 (関東) 雨宮 義直 (国学院大学)
 五十嵐 日出夫 (北海道大学)
 大島 国雄 (駿河台大学)
 太田 恒武 (運輸調査局)
 岡田 清 (成城大学)
 清水 義汎 (明治大学)
 杉山 雅洋 (早稲田大学)
 中条 潮 (慶応義塾大学)
 廣岡 治哉 (法政大学)
 松尾 光芳 (立正大学)
 和久田 康雄 (運輸経済研究センター)
 (関西) 秋山 一郎 (流通科学大学)
 柴田 悦子 (大阪市立大学)
 田原 栄一 (大分大学)
 中西 健一 (大阪経済法律大学)
 平井 都士夫 (名城大学)
 三上 宏美 (関西大学)
 宮下 國生 (神戸大学)
 山田 浩之 (京都大学)
 監事 (関東) 織田 政夫 (東京商船大学)
 (関西) 宇野 耕治 (大阪産業大学)
 事務局長 織田 隆市 (運輸調査局)

1993 年秋～1995 年秋

会 長 岡野 行秀 (創価大学)
 副会長 (関東) 藤井 弥太郎 (慶応義塾大学)
 (関西) 榊原 胖夫 (帝京技術科学大学)
 常務理事 (関東) 野村 宏 (奈良県商科大学)
 中条 潮 (慶応義塾大学)
 (関西) 斎藤 峻彦 (近畿大学)
 理事 (関東) 雨宮 義直 (国学院大学)
 五十嵐 日出夫 (北海道大学)
 太田 恒武 (運輸調査局)
 岡田 清 (成城大学)
 織田 政夫 (東京商船大学)
 杉山 武彦 (一橋大学)
 杉山 雅洋 (早稲田大学)
 廣岡 治哉 (法政大学)
 松尾 光芳 (立正大学)
 和久田 康雄 (運輸経済研究センター)
 (関西) 秋山 一郎 (流通科学大学)
 伊勢田 穆 (大阪市立大学)
 柴田 悦子 (名城大学)
 田原 栄一 (大分大学)
 細田 繁雄 (愛知大学)
 丸茂 新 (関西学院大学)
 三上 宏美 (関西大学)
 宮下 國生 (神戸大学)
 山田 浩之 (京都大学)
 監事 (関東) 生田 保夫 (流通経済大学)
 (関西) 宇野 耕治 (大阪産業大学)
 事務局長 織田 隆市 (運輸調査局)

1995 年秋～1997 年秋

会 長 藤井 弥太郎 (慶応義塾大学)
 副会長 (関東) 杉山 雅洋 (早稲田大学)

(関西) 斎藤 峻彦 (近畿大学)
 常務理事 (関東) 中条 潮 (慶応義塾大学)
 (同) 塩見 英治 (中央大学)
 (関西) 三上 宏美 (関西大学)
 理事 (関東) 雨宮 義直 (国学院大学)
 五十嵐 日出夫 (北海学園大学)
 太田 恒武 (運輸調査局)
 岡田 清 (成城大学)
 岡野 行秀 (創価大学)
 織田 政夫 (東京商船大学)
 金本 良嗣 (東京大学)
 杉山 武彦 (一橋大学)
 廣岡 治哉 (法政大学)
 松尾 光芳 (立正大学)
 和久井 康雄 (ジャパン・エア・チャーター)
 (関西) 伊勢田 穆 (大阪市立大学)
 榊原 胖夫 (帝京平成大学)
 柴田 悦子 (名城大学)
 田原 栄一 (大分大学)
 松澤 俊雄 (大阪市立大学)
 丸茂 新 (関西学院大学)
 宮下 國生 (神戸大学)
 山田 浩之 (大阪国際大学)
 監事 (関東) 生田 保夫 (流通経済大学)
 (関西) 宇野 耕治 (大阪産業大学)
 事務局長 織田 隆市 (運輸調査局)

1997 年秋～1999 年秋

会 長 藤井 弥太郎 (慶応義塾大学)
 副会長 (関東) 杉山 雅洋 (早稲田大学)
 (関西) 斎藤 峻彦 (近畿大学)
 常務理事 (関東) 塩見 英治 (中央大学)
 山内 弘隆 (一橋大学)
 (関西) 三上 宏美 (関西大学)
 理事 (関東) 雨宮 義直 (国学院大学)
 岡田 清 (成城大学)
 岡野 行秀 (創価大学)
 金本 良嗣 (東京大学)
 佐藤 肇一 (北海道大学)
 杉山 武彦 (一橋大学)
 中条 潮 (慶応義塾大学)
 中村 英夫 (武蔵工業大学)
 真島 和男 (運輸調査局)
 松尾 光芳 (明治大学)
 (関西) 伊勢田 穆 (大阪市立大学)
 柴田 悦子 (名城大学)
 正司 健一 (神戸大学)
 田原 栄一 (九州産業大学)
 細野 繁雄 (愛知大学)
 松澤 俊雄 (大阪市立大学)
 丸茂 新 (関西学院大学)
 宮下 國生 (神戸大学)
 山田 浩之 (大阪商業大学)
 監事 (関東) 忍田 和良 (朝日大学)
 (関西) 中村 徹 (大阪産業大学)
 事務局長 織田 隆市 (運輸調査局)

1999 年秋～2001 年秋

会 長 山田 浩之 (大阪商業大学)
 副会長 (関東) 杉山 武彦 (一橋大学)

(関西) 宮下 國生 (神戸大学)
 常務理事 (関東) 塩見 英治 (中央大学)
 山内 弘隆 (一橋大学)
 (関西) 伊勢田 穆 (大阪市立大学)
 理事 (関東) 青木 真美 (運輸調査局)
 雨宮 義直 (国学院大学)
 今橋 隆 (法政大学)
 岡田 清 (成城大学)
 金本 良嗣 (東京大学)
 佐藤 肇一 (北海道大学)
 杉山 雅洋 (早稲田大学)
 中条 潮 (慶応義塾大学)
 寺田 一薰 (東京商船大学)
 中村 英夫 (武蔵工業大学)
 藤井 弥太郎 (慶応義塾大学)
 (関西) 衛藤 卓也 (福岡大学)

齋藤 峻彦 (近畿大学)
 正司 健一 (神戸大学)
 土居 靖範 (立命館大学)
 松澤 俊雄 (大阪市立大学)
 丸茂 新 (関西学院大学)
 三上 宏美 (関西大学)
 忍田 和良 (朝日大学)
 中村 徹 (大阪産業大学)
 長濱 敬 (運輸調査局)

監事 (関東)
 (関西)
 事務局長

(3) 日本交通学会受賞者一覧 (1968年－2000年)

- 1968年(昭和43) <著書>「交通労働の研究」
佐竹 義昌 (学習院大学)
- 1969年(昭和44) <著書>「現代日本の交通経済」
佐波 宣平 (京都大学)
<論文>「道路サービスの価値形成と道路資源の問題」
岡野 行秀 (東京大学)
- 1970年(昭和45) <著書>「都市交通論」
角本 良平 (早稲田大学)
<論文>「都市と交通と投資基準としての外部経済学論」
榊原 胖夫 (同志社大学)
- 1971年(昭和46) <著書>「地方公営企業の研究」
蔵園 進 (武蔵大学)
<著書>「物流輸送量の計測と予測」
鈴木 啓祐 (流通経済大学)
<論文>「中世後期中地中海・北海海運企業史論究」
松本 一郎 (海事交通文化研究所)
- 1972年(昭和47) <著書>「社会主義交通論」
平井都士夫 (大阪市立大学)
<論文>「社会的費用の問題」
中島 勇次 (運輸調査局)
- 1973年(昭和48) <著書>「海陸複合輸送の研究」
飯田 秀雄 (山下新日本汽船)
<著書>「鉄道運賃学説史」
丸茂 新 (関西学院大学)
- 1974年(昭和49) <著書>「現代日本の交通政策」
中西 健一 (大阪市立大学)
- 1975年(昭和50) <著書>「海運論」
東海林 滋 (関西大学)
<論文>「私鉄経営と運賃問題」
山口 亮 (海運調査局)
- 1976年(昭和51) <著書>「帝政ロシア交通政策史」
池田 博行 (専修大学)
<論文>「タウンシク＝ピグー論争」
伊勢田 穆 (香川大学)
- 1977年(昭和52) <著書>「海運経済論」
織田 政夫 (東京商船大学)
- 1978年(昭和53) <著書>「海運産業論」
池田 知平 (一橋大学)
<著書>「輸送計画の研究」
小林 清晃 (甲南大学)
- 1980年(昭和55) <著書>「海上運賃の経済分析」
下条 哲司 (神戸大学)
- 1981年(昭和56) <著書>「アメリカ国民経済の生成と鉄道建設」
生田 保夫 (流通経済大学)
<著書>「都市の経済分析」

- 1982年（昭和57） 〈著書〉「海運業の設備投資行動」
山田 浩之（京都大学）
- 1983年（昭和58） 〈著書〉「貨物輸送の自動車化—戦後過程の経済分析」
宮下 國生（神戸大学）
村尾 質（神奈川大学）
- 1986年（昭和61） 〈著書〉「西ドイツ交通政策研究」
杉山 雅洋（早稲田大学）
- 1987年（昭和62） 〈著書〉「交通の計画と経営」
武田 文夫（高速道路調査会）
- 1988年（昭和63） 〈著書〉「交通行動分析」
近藤 勝直（流通科学大学）
- 1989年（平成元） 〈論文〉「現代アメリカ鉄道研究序説」
野田 秋雄（久留米大学）
- 1990年（平成2） 〈著書〉「航空輸送」
増井 健一（松坂大学）
山内 弘隆（中京大学）
〈著書〉「道路貨物運送政策の軌跡」
谷利 亨（日通総合研究所）
- 1991年（平成3） 〈著書〉「交通の未来展望」
〈著書〉「現代交通論」
角本 良平（運輸経済研究センター）
- 1992年（平成4） 〈著書〉「交通市場政策の構造」
斎藤 峻彦（近畿大学）
- 1993年（平成5） 〈著書〉「近代日本交通労働史研究」
武知 京三（近畿大学）
- 1994年（平成6） 〈著書〉「日本の国際物流システム」
宮下 國生（神戸大学）
- 1995年（平成7） 〈著書〉「発展途上国交通経済論」
土井 正幸（神戸商科大学）
- 1996年（平成8） 〈著書〉「近代日本海運とアジア」
片山 邦雄（大阪学院大学）
〈著書〉「Japanese Urban Railways : A Private-Public Comparison」
水谷 文俊（神戸大学）
- 1997年（平成9） 〈著書〉「私鉄運賃の研究—大都市私鉄の運賃改革 1945—95年」
森谷 英樹（敬愛大学）
- 1998年（平成10） 〈著書〉「道路投資の社会経済評価」
中村 英夫（武蔵工業大学）
- 1999年（平成11） 〈著書〉「米国航空規制緩和をめぐる諸議論の展開」
高橋 望（関西大学）
- 2000年（平成12） 〈著書〉「クルマ社会 アメリカの模索」
西村 弘（大阪市立大学）
〈著書〉「アメリカ物流改革の構造」
齊藤 実（神奈川大学）
〈論文〉「交通サービスの自発的供給は可能か？
—理論的フレームワーク—」
湧口 清隆（国際通信経済研究所）
〈論文〉「中核国際港湾整備の効果と今後の方向」
岡本 直久（筑波大学）

8. 日本交通学会 60 周年記念 大会行事

(1) 国際シンポジウム

テーマ：「規制改革と交通政策」（大会統一テーマ）

7月29日(日) 天王寺都ホテル新館
18:00 歓迎会

7月30日(月) 日本交通学会第60回研究報告大会第1日（大阪市立大学学術情報センター）
プログラム

- 9:20 開会の辞 伊勢田 穆（大会実行委員長 大阪市立大学教授）
9:25 挨拶 山田 浩之（日本交通学会会長、大阪商業大学教授 京都大学名誉教授）
9:30 報告1 T. H. Oum（ブリティッシュ・コロンビア大学教授）
「航空輸送における規制緩和と競争」
10:10 報告2 J. Preston（オックスフォード大学 交通研究所所長）
「欧州における地上交通に対する規制政策」
10:50—11:10 休憩
11:10 報告3 K. Small（カリフォルニア大学アーバイン校教授）
「交通分野における環境規制」
11:50 報告4 金本 良嗣（東京大学大学院教授）
「日本における交通規制政策」
12:30—14:00 昼食
14:00 コメント1 中村 清（早稲田大学教授）
14:20 コメント2 D. Van de Velde（エラスムス大学ロッテルダム校）
14:40—15:00 休憩
15:00 パネルディスカッション
モデレーター 正司 健一（神戸大学大学院教授）
パネリスト Prof. T. H. Oum
Dr. J. Preston
Prof. K. Small
金本 良嗣
16:30 閉会の辞 宮下 國生（国際シンポジウム企画委員長、神戸大学大学院教授）
17:30 懇親会

7月30日(月) 日本交通学会第60回研究報告大会第2日（大阪市立大学学術情報センター）
自由論題

(2) 趣意書

2001 年 3 月 1 日

日本交通学会
会長 山田 浩之

趣 意 書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は当学会の運営と発展のために何かとご協力賜り、まことにありがとうございます。

日本交通学会は、21 世紀に入った本年、創立 60 周年を迎えることになりました。前身である「東亜交通学会」は 1941 年に創立され、それから 60 年を経た次第です。その間、わが国は太平洋戦争、高度経済成長、石油危機、バブル経済等の大変動を経験し、今日、グローバル化、情報化、規制緩和の時代を迎えております。

日本交通学会もこれらの大波にもまれながらも、時代の要請にこたえ、着実に成長して参りました。創立当時は数十人にすぎなかった個人会員数は現在では 450 名をこえておりますが、さらに特別会員数も増加し、現在、46 団体になっています。また、最近、若い研究者の参加が頼著であります。他方、従来は経済学・経営学を中心とする社会科学関係の学者から構成されておりましたが、最近は交通計画を専攻する工学等の研究者の参加も増え、学際的な研究も進んでおります。さらに、近年、国際的な学会への参加・発表など、国際交流も大きく進んでいるのも一つの特徴であります。このように学会が発展してきましたのも、先輩達の長年の活動の蓄積によるものであるとともに、特別会員をはじめとする交通業界のご支援によるものと感謝しております。

ここで、この数年に、本学会が取り組んだ統一論題を紹介しておきますと、「運輸新時代における地域交通のあり方」(1998 年)、「情報通信時代の交通」(1999 年)、「交通政策の展開と環境制約」(2000 年)であります。

さて、日本交通学会は創立 60 周年の記念事業として、本年 7 月に大阪市立大学において、「規制改革と交通政策」を統一論題とし、このテーマを国際的視野の下で取り組むために、国際シンポジウムの開催を企画しました。すでに、世界の交通学会の第一線で活躍している次の学者から協力の内諾を得ております。

K. A. Small	カリフォルニア大学教授
J. Preston	オックスフォード大学・交通研究所所長
T. H. Oum	ブリテッシュ・コロンビア大学教授
金本良嗣	東京大学大学院教授

この記念事業を成功させるために、本学会の役員及び会員が特別寄付を行うことを昨年の総会で決定しておりますが、本学会の特別会員及び本学会と関係の深い諸団体にもこの記念事業にご賛同と特別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

9. あとがき

本日の日本交通学会創立 60 周年記念行事には、ご出席下さった方々は勿論、ご都合で出席いただけなかった多くの方々や機関から多大なご支援を賜りました。当学会の 60 周年記念事業の趣旨に快くご賛同のうえ大変なご賛助していただき、誠にありがとうございました。お蔭さまで、本日の記念行事、国際シンポジウムを無事、迎えられた次第です。厚くお礼を申し上げます。

このささやかな記念の小冊子の刊行を企画した趣旨について一言述べさせていただきます。今回の記念行事である国際シンポジウムの内容については、今後、『研究年報』等に収録し公表することになっており、この小冊子では詳しく触れてはいません。学会の歴史経過を示す記録の大きなものとしては、つい 10 年前に出た『日本交通学会 50 年の歩み』がございませう。しかし、最近 10 年間に当学会に新たに加入された方の数は優に 100 人を超えております。この方々に、これまでの学会の経過を知っていただき、これによって、今後の当学会の発展につながればよいとの思いから、この刊行を企画いたしました。

また、この僅か 10 年間に学会を取り巻く環境もめまぐるしく変わっており、これをうけて、学会の研究動向にも新たな潮流がみられる。また、世紀の転換の時期でもあって、新たな境地で展望することが求められている。このために、この時期をとらえ、最近四半世紀を中心に新たな時代のなかで回顧することの意義を考え、座談会等を開催しました。これを収録し、これに『研究年報』を中心に今日までの学会での取り組みを併せて参照していただくことの必要性、先に述べた『50 年の歩み』はあるものの、これはデータベース化されておらず、これにその後の動向を加え今後の情報提供に役立てる必要性を考えました。

だが、60 年と一口に言いますが、実際には長い年月であり、過去の資料と記録にたどるしかありません。この意味からも、本小冊子は、先輩諸氏が苦心して作成された『50 年の歩み』の一部の資料を活用しました。前会長である増井先生による詳細な回顧記録、廣岡先生に対する 50 周年を記念してなされたインタビューの記録に加え、これに新たに、創立時の経過を語る『研究年報』に掲載された座談会の記録を収録させていただきました。転載等を快くお引き受け下さりご協力していただいた諸先生方や諸機関に厚くお礼を申し上げます。また、連絡調整等でご尽力された学会事務局長の長濱敬さん、資料の一部のチェックでご協力下さった運輸調査局の方々、初期の入力作業でお世話いただいた中央大学経済学部の中矢真理子さんに心から感謝申し上げます。

ただ、残念に思いますのは、この 10 年間に、本学会の発展に多大なご功績があった今野源八郎先生、麻生平八郎先生、富永祐治先生をはじめ、多くの先輩の先生方がお亡くなりになって、今回の 60 周年を迎える席にお出でにならないことです。我々は、交通学会 60 周年を迎えるにあたって、これらの先生方の御遺恩を偲ばずにはおれません。これらの多くの先生方のご冥福を祈り心からの哀悼の意をささげる次第です。

今後とも、学会の発展のために、皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2001 年 7 月 30 日

日本交通学会常務理事 塩見英治